

# 市原市山小川遺跡・柏野遺跡・山口城跡

- 県単道路改良(幹線)委託事業(山小川・柏野・山口地区)埋蔵文化財調査報告書 -

平成21年3月

千葉県県土整備部  
財団法人 千葉県教育振興財団

いち はら

やま こ がわ

かしわ の

やま ぐち じょう

# 市原市山小川遺跡・柏野遺跡・山口城跡

- 県単道路改良(幹線)委託事業(山小川・柏野・山口地区)埋蔵文化財調査報告書 -





山小川遺跡・柏野遺跡周辺空中写真（1990年、1/15,000）



平蔵川沿いの河岸段丘と山小川遺跡・柏野遺跡

鶴舞方面より望んだ山小川遺跡・柏野遺跡の遠景である。中央の谷底を平蔵川が流れ、河岸段丘が両岸に発達する。中央ブルーシートは首都圏中央連絡自動車道(圏央道)の工事現場で、シートの下側から手前の竹林や人家が建っている一帯が低位段丘面ないしは沖積面にあたる。ブルーシート上側の面が中位段丘面(鶴舞カントリー面)で、山小川遺跡はこの面上、画面右寄りの山林の後ろ側に位置する。画面中央やや右寄りの建物群は高位段丘面(柏野台面)に建てられており、柏野遺跡はこの面一帯に広がる。中央奥の建物が新井浄水場で、縄文早期の新井花和田遺跡はこの位置に所在する。ここはすでに丘陵上となり、南方の房総丘陵へと連なっていく。(平成20年8月14日、安井健一撮影)

#### (前頁) 山小川遺跡・柏野遺跡周辺空中写真

左側の湖が高滝湖で、養老川の本流である。右側を斜め方向に貫くのが国道297号線で、それに沿って蛇行する緑色の帯が平蔵川である。川沿いの低位段丘面には集落と小区画の水田が密集する。山小川遺跡は中央上部のゴルフ場の南側に位置し、ゴルフ場と同じ中位段丘面(鶴舞カントリー面)に位置する。写真中央の整然と並んだ建物と周辺の区画された畠・山林はさらに一段高い高位段丘面(柏野台面)で、柏野遺跡はこの段丘面上から養老川沿いの中位段丘面(柏野面)にかけて広がる。建物群下側に見える茶色の五角形の区画は、調査終了直後の新井花和田遺跡である。写真下側(南側)は平坦地がなく山肌が険しくなり、丘陵となっているのが分かる。

## 序 文

財団法人千葉県教育振興財団(文化財センター)は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第624集として、千葉県県土整備部千葉地域整備センター市原整備事務所による県単道路改良(幹線)委託事業(山小川・柏野・山口地区)に伴って実施した、市原市山小川遺跡・柏野遺跡・山口城跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代中期から後期にかけての集落跡や古墳時代中期の円墳など、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また文化財の保護、普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際しご指導、ご協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係機関、また、発掘調査から整理までご苦労をおかけした補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成21年3月

財団法人 千葉県教育振興財団  
理事長 福島義弘

## 凡　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部千葉地域整備センター市原整備事務所による県単道路改良(幹線)委託事業(山小川・柏野・山口地区)に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、千葉県市原市山小川柏野台748-1他に所在する山小川遺跡(遺跡コード219-085)、市原市大和田柏野584-1他に所在する柏野遺跡(遺跡コード219-086)、市原市山口後田255-1他に所在する山口城跡(遺跡コード219-087)の成果を収録したものである。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県教育庁教育振興部文化財課の指示のもと、千葉県県土整備部千葉地域整備センター市原整備事務所の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査および整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は、第2章第4節・第4章第2節を副所長 白井久美子、第3章第2節を上席研究員半澤幹雄、他を上席研究員 安井健一が担当した。編集は安井健一が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県県土整備部千葉地域整備センター市原整備事務所、市原市教育委員会、市原市埋蔵文化財調査センター、いわき市考古資料館の諸機関、忍澤成視(市原市埋蔵文化財調査センター)、黒村友延(いわき市考古資料館)、高島好一(同)、西川博孝(県立中央博物館大利根分館)の各氏の御指導・御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
  - 第1図 國土地理院発行 1/25,000地形図「鶴舞」(N1-54-19-16-2)
  - 第2図 市原市発行 1/2,500基本図No.N-8 (IX-ME 37-2)・No.O-8 (IX-ME 37-4)
  - 第3図 市原市発行 1/2,500基本図No.O-8 (IX-ME 37-4)・No.P-8 (IX-ME 47-2)
  - 第4図 市原市発行 1/2,500基本図No.N-6 (IX-ME 36-2)・No.N-7 (IX-ME 37-1)・  
No.O-6 (IX-ME 36-4)・No.O-7 (IX-ME 37-3)
  - 第5図 國土地理院発行 1/50,000地形図「茂原」(N1-54-19-12)・「紳崎」(N1-54-19-16)・  
「上総大原」(N1-54-20-9)・「大多喜」(N1-54-20-13)
- 8 本書で使用した航空写真は、下記のとおりである。  
卷頭図版1 京葉測量株式会社撮影(平成2年)
- 9 本書で使用した図面の方位は全て座標北である。測量値については旧日本測地系を使用したが、地形図は世界測地系に則っており調査の測量値とは一致しない。(抄録の緯度・経度は世界測地系による。)
- 10 遺物の色調は、農林水産省・(財)日本色彩研究所監修『新版標準土色帖 2002年版』(日本色研事業株式会社発行)を参考にした。

## 目 次

第1章 はじめに .....	1
第1節 調査の経緯と経過 .....	1
1 調査に至る経緯 .....	1
2 調査および整理の組織と担当 .....	1
第2節 遺跡の立地と歴史的環境 .....	2
1 遺跡の立地 .....	2
2 遺跡の沿革 .....	2
3 周辺の遺跡 .....	7
第2章 山小川遺跡の調査成果 .....	13
第1節 調査・整理の方法と概要 .....	13
1 調査の方法と概要 .....	13
2 整理の方法 .....	13
第2節 旧石器時代 .....	20
1 基本土層 .....	20
2 出土遺物 .....	20
第3節 縄文時代 .....	20
1 エリア① .....	20
2 エリア② .....	37
3 エリア③ .....	45
4 エリア④ .....	59
5 エリア⑤ .....	74
6 エリア⑥ .....	78
7 エリア⑦ .....	85
8 エリア外 .....	90
9 縄文時代中期後半から後期中葉以外の時期 .....	92
10 土器以外の遺物 .....	92
第4節 古墳時代 .....	104
1 山小川古墳群と周辺の古墳 .....	104
2 山小川1号墳(SM001) .....	104
第5節 中近世 .....	113
1 土坑 .....	113
2 溝 .....	114
第3章 柏野遺跡、山口城跡の調査成果 .....	116
第1節 柏野遺跡の調査成果 .....	116

1 調査の概要 .....	116
第2節 山口城跡の調査成果 .....	116
1 調査の概要 .....	116
2 遺構と遺物 .....	116
第4章 まとめ .....	118
第1節 縄文時代 .....	118
1 遺跡の立地について .....	118
2 出土遺物について .....	118
3 遺構について .....	119
第2節 古墳時代 .....	120
1 山小川古墳群 .....	120

#### 報告書抄録

## 挿図目次

第1章 はじめに	第16図 エリア①の遺構		
第1図 山小川遺跡・柏野遺跡・山口城跡の位置 .....	(SI001・004、SK005・009) .....	25	
..... 3	第17図 エリア①出土土器(3) .....	27	
第2図 山小川遺跡の地形と調査範囲 .....	4	第18図 エリア①出土土器(4) .....	28
第3図 柏野遺跡の地形と調査範囲 .....	5	第19図 エリア①出土土器(5) .....	30
第4図 山口城跡の地形と調査範囲 .....	6	第20図 エリア①出土土器(6) .....	31
第5図 周辺の主要な遺跡 .....	9	第21図 エリア①出土土器(7) .....	32
第2章 山小川遺跡の調査成果	第22図 エリア①出土土器(8) .....	33	
第6図 グリッド配置 .....	15	第23図 エリア①出土土器(9) .....	34
第7図 年度別調査範囲・確認トレンド配置と 本調査範囲 .....	16	第24図 エリア①出土土器(10) .....	35
第8図 上層遺構全体図 .....	17	第25図 エリア①出土土器(11) .....	36
第9図 縄文時代の遺構全体図(1) .....	18	第26図 エリア①出土土器(12) .....	37
第10図 縄文時代の遺構全体図(2) .....	19	第27図 エリア②の遺構(SI003・005・006・009)	
第11図 下層基本柱状図 .....	21	..... 38	
第12図 旧石器時代遺物 .....	21	第28図 エリア②の遺構(SI002・007、SK008)	
第13図 エリア①の遺構 (SI008、SK006・007・010・011) .....	22	..... 41	
第14図 エリア①出土土器(1) .....	22	第29図 エリア②の遺構(SH001) .....	41
第15図 エリア①出土土器(2) .....	24	第30図 エリア②出土土器(1) .....	42
		第31図 エリア②出土土器(2) .....	44
		第32図 エリア③概況図 .....	46

第33図 エリア③出土土器(1) .....	47	第67図 エリア⑦の遺構(SI014・015) .....	88
第34図 エリア③出土土器(2) .....	48	第68図 エリア⑦の遺構(SI016) .....	88
第35図 エリア③出土土器(3) .....	49	第69図 エリア⑦出土土器 .....	89
第36図 エリア③出土土器(4) .....	50	第70図 エリア外出土中期後半～後期中葉土器 .....	91
第37図 エリア③出土土器(5) .....	51		
第38図 エリア③出土土器(6) .....	52	第71図 トレンチ出土中期後半～後期中葉土器 .....	91
第39図 エリア③出土土器(7) .....	53		
第40図 エリア③出土土器(8) .....	54	第72図 出土その他の時期の土器 .....	93
第41図 エリア③出土土器(9) .....	55	第73図 出土縄文時代土製品(1) .....	94
第42図 エリア③出土土器(10) .....	56	第74図 出土縄文時代土製品(2) .....	95
第43図 エリア③出土土器(11) .....	57	第75図 出土縄文時代石器(1) .....	95
第44図 エリア③出土土器(12) .....	58	第76図 出土縄文時代石器(2) .....	96
第45図 エリア④の遺構(SI018・019、SK018) .....	59	第77図 出土縄文時代石器(3) .....	97
	60	第78図 出土縄文時代石器(4) .....	98
第46図 エリア④の遺構 (SI020・021、SK019・022) .....	62	第79図 出土縄文時代石器(5) .....	99
第47図 エリア④の遺構(SI017) .....	64	第80図 出土縄文時代石器(6) .....	100
第48図 エリア④の遺構(SH003) .....	64	第81図 山小川1号墳(SM001)・2号墳現況圖 .....	105
第49図 エリア④出土土器(1) .....	65	第82図 1号墳(SM001)全体図 .....	106
第50図 エリア④出土土器(2) .....	66	第83図 1号墳墳丘・周溝土層断面図 .....	108
第51図 エリア④出土土器(3) .....	67	第84図 1号墳埋葬施設 .....	109
第52図 エリア④出土土器(4) .....	68	第85図 1号墳(SM001)出土遺物 .....	111
第53図 エリア④出土土器(5) .....	69	第86図 中近世土坑(SK001・002・003) .....	113
第54図 エリア④出土土器(6) .....	70	第87図 中近世土坑、溝(SK004、SD001) .....	113
第55図 エリア④出土土器(7) .....	71	第88図 中近世溝(SD002・003) .....	115
第56図 エリア④出土土器(8) .....	72	第89図 中近世溝(SD004) .....	115
第57図 エリア⑤の遺構(SK015、SH002) .....	75	第3章 柏野遺跡、山口城跡の調査成果 .....	
第58図 エリア⑤出土土器(1) .....	76	第90図 山口城跡トレンチ配置 .....	117
第59図 エリア⑤出土土器(2) .....	77	第91図 柏野遺跡トレンチ配置 .....	117
第60図 エリア⑥の遺構 (SI010・011・012、SK012・016) .....	79		
第61図 エリア⑥出土土器(1) .....	81		
第62図 エリア⑥出土土器(2) .....	82		
第63図 エリア⑥出土土器(3) .....	83		
第64図 陥穴(SK013・014) .....	85		
第65図 陥穴出土土器 .....	86		
第66図 エリア⑦の遺構(SI013) .....	88		

## 表目次

第1表 山小川遺跡エリア別遺構・グリッド・ トレンチ一覧	14	第3表 山小川遺跡縄文土器時期別・ 出土地点別口縁部重量一覧	122
第2表 山小川遺跡石器属性表	101		

## 図版目次

卷頭図版1 山小川遺跡・柏野遺跡周辺空中写真 (1990年、1/15,000)	⑤SI012
卷頭図版2 平蔵川沿いの河岸段丘と山小川遺跡・ 柏野遺跡	図版4 ①SI011、SK012 ②SK016 ③SI013 ④SI014・015 ⑤SI016 ⑥SI016炉 ⑦SK013 ⑧SK014
山小川遺跡	図版5 エリア①出土土器(SI008・001、SK007、 グリッド)
図版1 ①SK006・007・010 ②SI001 ③SI004 ④SK005 ⑤SK009 ⑥SI003 ⑦SI005・009 ⑧SI006	図版6 エリア①出土土器(SI008・001、SK006・ 007・011、グリッド)
図版2 ①SI002・007 ②SK008 ③SH001 ④SI018 ⑤SI019、SK018 ⑥SI021、SK019 ⑦SI021炉 ⑧SI020	図版7 エリア①出土土器(グリッド) 図版8 エリア①出土土器(SK005)、エリア②出土 土器(SI002・005～007、SK008、SH001、 グリッド)、エリア③出土土器(グリッド) 図版9 エリア③出土土器(グリッド) 図版10 エリア③出土土器(グリッド) 図版11 エリア③出土土器(グリッド)、 エリア④出土土器(SH003) 図版12 エリア④出土土器(SI017～021、SK018・ 019、SH003、グリッド)
図版3 ①SK022 ②SI017 ③SH003 ④SH003 P19 (埋設土器) ⑤SK015 ⑥SH002 ⑦SI010	図版13 エリア④出土土器(SH003)、エリア⑤ 出土土器(SH002)、エリア⑥出土土器 (SI010～012、SK012)、陥穴出土土器 (SK013・014) 図版14 エリア⑤出土土器(グリッド)、エリア⑥

- 出土土器(SI012、SK012)、エリア⑦出土  
土器(SI013～016)、トレンチ出土土器  
(T3・4)、縄文時代土製品(1)
- 図版15 縄文時代土製品(2)、旧石器時代石器、  
縄文時代石器(1)
- 図版16 縄文時代石器(2)
- 図版17 ①1号墳(SM001)全景(南西から)  
②1号墳全景(北東から)  
③④南西周溝内遺物出土状況  
⑤南西周溝(南東から)
- 図版18 ①②1号墳(SM001)北東周溝内遺物出土状  
況  
③北東周溝(東から)  
④埋葬施設直刀出土状況  
⑤⑥埋葬施設遺物出土状況
- ⑦埋葬施設全景(北から)  
⑧埋葬施設全景(西から)
- 図版19 1号墳出土鉄製品
- 図版20 1号墳出土土器
- 山口城跡
- 図版21 ①北半部調査前(南西から)  
②南半部調査前(南西から)  
③1トレンチ(南から)  
④1トレンチ落ち込み  
⑤2トレンチ(北から)  
⑥3トレンチ(西から)  
⑦4トレンチ(南から)
- 柏野遺跡
- 図版21 調査区全景

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯と経過

### 1 調査に至る経緯

千葉県県土整備部千葉地域整備センター市原整備事務所は一般県道鶴舞馬来田停車場線の改良事業に当たり、予定地内に存在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて千葉県教育委員会と協議を行った。その結果、記録保存措置を講じることとなった。調査は市原整備事務所の委託を受けた財団法人千葉県教育振興財團が実施した。

### 2 調査および整理の組織と担当

調査は市原市に所在する3遺跡を対象に、平成17年・18年の2年度にわたって実施された。遺跡ごとの調査状況は以下のとおりである。調査の詳細は各章にて述べる。

山小川遺跡

平成17年度

調査期間：平成18年2月1日～平成18年2月8日

調査対象面積：1,556m<sup>2</sup>

確認調査面積：上層446m<sup>2</sup>/1,556m<sup>2</sup>、下層32m<sup>2</sup>/1,556m<sup>2</sup>

組織：調査部長 矢戸三男、南部調査事務所長 高田 博、担当：主席研究員 宮 重行

平成18年度

調査期間：平成18年10月2日～平成18年11月20日

調査対象面積：2,527m<sup>2</sup>

確認調査面積：上層252m<sup>2</sup>/2,527m<sup>2</sup>、下層100m<sup>2</sup>/2,527m<sup>2</sup>

本調査面積：上層1,590m<sup>2</sup>

組織：調査部長 矢戸三男、南部調査事務所長 高田 博、担当：上席研究員 鈴木弘幸

柏野遺跡

調査期間：平成18年2月9日～平成18年2月22日

調査対象面積：194m<sup>2</sup>

確認調査面積：上層43m<sup>2</sup>/194m<sup>2</sup>、下層4m<sup>2</sup>/194m<sup>2</sup>

組織：調査部長 矢戸三男、南部調査事務所長 高田 博、担当：主席研究員 宮 重行

山口城跡

調査期間：平成19年3月1日～平成19年3月15日

調査対象面積：515m<sup>2</sup>

確認調査面積：上層105m<sup>2</sup>/515m<sup>2</sup>

組織：調査部長 矢戸三男、南部調査事務所長 高田 博、担当：上席研究員 半澤幹雄

整理は平成19年・20年度の2年度にわたって実施された。年度ごとの担当と作業内容は以下のとおりである。

平成 19 年度

作業内容：水洗注記、記録整理・接合の一部まで

組織：調査研究部長 矢戸三男、南部調査事務所長 西川博孝、担当：主席研究員 土屋治雄

平成 20 年度

作業内容：接合の一部から刊行まで

組織：調査研究部長 大原正義、中央調査事務所長 折原 繁、整理課長 高田 博、担当：副所長 白井久美子、主席研究員 伊藤智樹、今泉 潔・土屋治雄、上席研究員 安井健一・半澤幹雄・川勝里文

## 第 2 節 遺跡の立地と歴史的環境

### 1 遺跡の立地

市原市は総面積 368.2km<sup>2</sup>、東西約 22km、南北約 36km の広大な市域を抱え、その南北を縱断するように養老川が流れている。上流域は丘陵地帯で河床が深い渓谷を形成し、中流域は河岸段丘を形成し、下流域は沖積平野となって河口部には三角州を形成する。その河口から約 35km 遠った地点に高滝ダムが設置されており、貯水池は千葉県最大の人造湖である高滝湖となっている。本報告で採りあげる 3 遺跡はいずれもこの高滝湖周辺に位置する（第 1 図）。

山小川遺跡は市原市山小川字柏野台に所在する。養老川支流である平蔵川の左岸標高約 74m の河岸段丘上に位置する。ただし西側は養老川本流に注ぐ小支谷によって開析されており、高滝湖に近接した位置にある。現況は民家が数軒存在するほかはほとんどが山林ないしは畑地で、北西側はゴルフ場になっている。遺跡北端部の段丘崖付近には縄文土器が多数散布している。

柏野遺跡は市原市大和田字柏野に所在する。養老川とその支流である古敷谷川との合流点（現在高滝湖になっている）の右岸標高約 68m の河岸段丘上に位置する。ただしこの段丘は養老川寄りの西側が最も低く、東側に行くにしたがってだんだん標高が高くなり北東部は標高約 90m に達する。端部は比高差約 20m の急斜面となって山小川遺跡と接している。現況は西側の低位段丘は集落と畑地であるが、東側の高位段丘は養鶏場がある他はほとんどが山林となっている。

山口城跡は市原市山口字後田に所在する。養老川の左岸標高約 45m の独立丘陵上に位置する。ちょうど高滝ダムのすぐ脇である。全体に起伏が激しく平坦面はほとんどない。現況は北側の斜面裾が集落となっている他はほとんど山林である。

### 2 遺跡の沿革

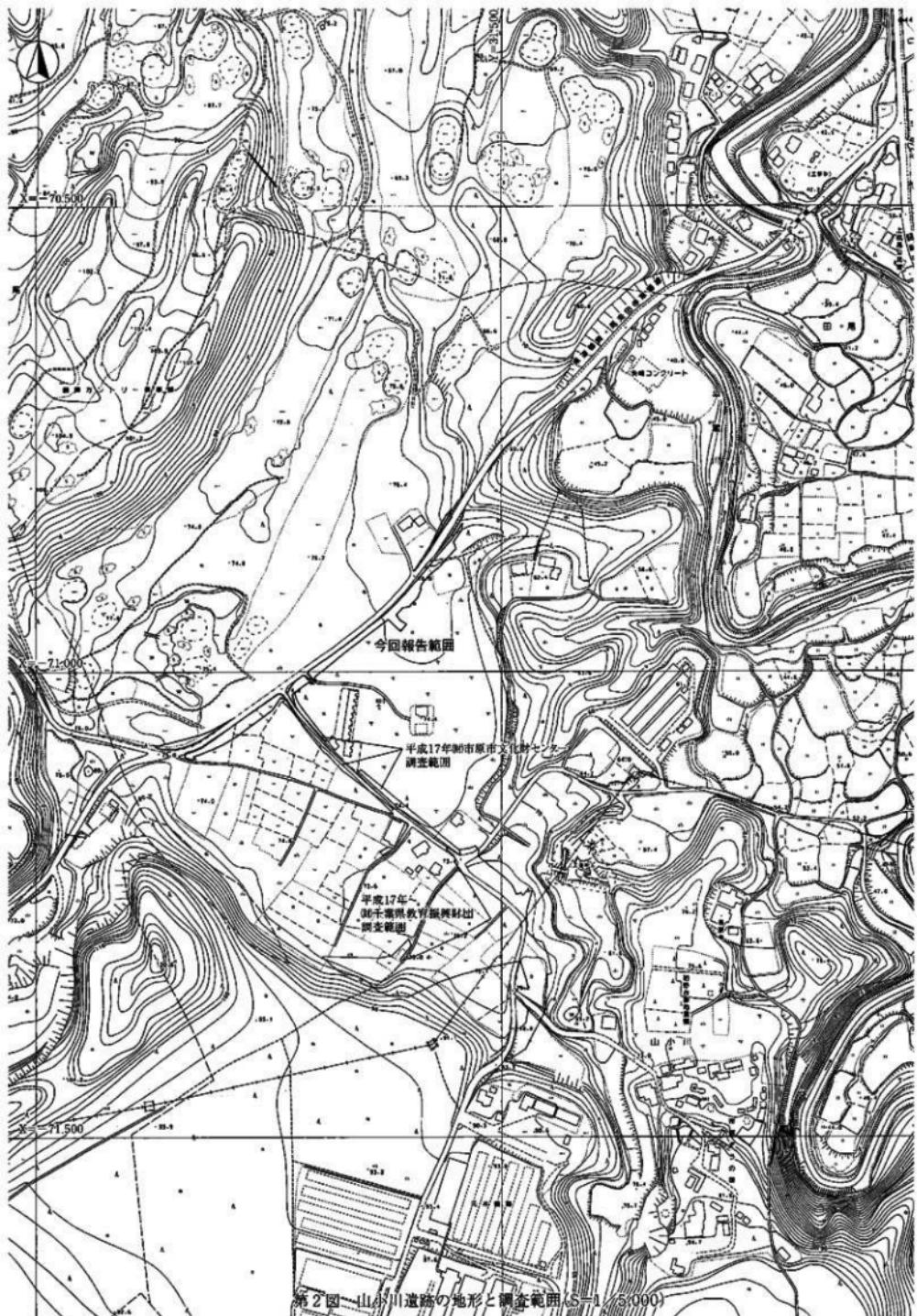
今回報告する 3 遺跡は、従来より埋蔵文化財包蔵地として周知されている。

山小川遺跡はこれまで調査歴はほとんど無い。今回調査した県道から分岐する市道の拡幅に伴い、平成 17 年に財団法人市原市文化財センターによって調査されたが、遺構は検出されず縄文土器が少数出土したにとどまっている<sup>注 1)</sup>。平成 17 年より首都圏中央連絡自動車道（以下、圏央道と略す）建設工事に伴う発掘調査が遺跡南東部で開始されており、加曾利 E 式期の堅穴住居跡や土坑、縄文時代早期～前期の包含層などが検出されている（第 2 図）<sup>注 2)</sup>。

柏野遺跡も調査歴こそほとんど無いが、西側の古敷谷川に面する段丘は縄文土器が多量に散布する包蔵地として知られている。これまで採集資料として後期の山形土偶および晩期の中実土偶の破片<sup>注 3)</sup>、晩期の石劍<sup>注 4)</sup>、中期末の深鉢鳥頭形把手<sup>注 5)</sup>などが公表されている。昭和 55 年に高滝ダム建設関連工事に先立



大第1図 山小川遺跡・柏野遺跡・山口城跡の位置 (S=1/25,000)



第2図 山少川遺跡の地形と調査範囲 S=1/5,000

第3圖 一組引導路跡(由北上)調查範圍(S=1-5,000)





ち千葉県文化財センターが北西端部の調査を行っているが、この時は加曾利E式から後期安行式の少数の土器が出土したにとどまっている（調査時の遺跡名は神明台遺跡）<sup>106)</sup>。ただし調査報告書には「踏査を実施した際、道路際に加曾利E II式土器を出土する住居跡の落ち込みを発見した」とあり、該期の集落の存在をうかがわせる。平成3年には道路建設に伴い市原市文化財センターによって調査されたが、調査区がより高い段丘上で道路敷き分の狭い範囲だったこともあり、遺構は検出されず遺物も縄文土器・石器がごく少数出土したのみであった<sup>107)</sup>。平成20年度より圓央道建設に伴う調査が開始されている（第3図）。

山口城跡は千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書に登録されているが、文献資料は確認されておらず来歴は不明である<sup>108)</sup>。北側の集落には駒込などの地名が残されており、城館の中心はそちら側であろう。平成18・19年に圓央道建設に伴う調査が行われたが、縄文時代早期の包含層が検出されたのみで城館跡であることを示す遺構は検出されなかった（第4図）<sup>109)</sup>。

### 3 周辺の遺跡

これまでの調査は養老川下流域の平野部に集中しており、著名な遺跡も多数存在するが、近年中流・上流域でも調査が行われるようになり、養老川流域の遺跡の様相が少しずつ明らかになってきている。ここでは中流・上流域を中心に周辺の遺跡を俯瞰してみたい（第5図）。なお、図中の1は山小川遺跡、2は柏野遺跡、3は山口城跡を示す。以下、文中遺跡名後の数字は図中の番号と対応する。

旧石器時代の遺跡は少ない。新井花和田遺跡（4）は柏野遺跡南東側のさらに一段高い段丘上に位置し、上層遺構覆土・包含層中からではあるが尖頭器を主体とする石器群が出土している<sup>110)</sup>。平成20年現在調査中の柏野遺跡ではかなり大量に出土しており今後が期待される。江子田遺跡は平蔵川と養老川の合流地点より下流側の低位段丘上に位置する。遺跡地としての面積は広大で調査地点によって別称が付けられており、北西部は南総中学遺跡（5）、南西部は雪解沢遺跡（6）、東端部は大蔵屋遺跡（7）と称されている（以下、文中ではこの別称を用いて説明する）。旧石器時代の遺物は表面採集品がほとんどであるが、各地区でナイフ形石器、彫器、削器などが出土している<sup>111)</sup>。

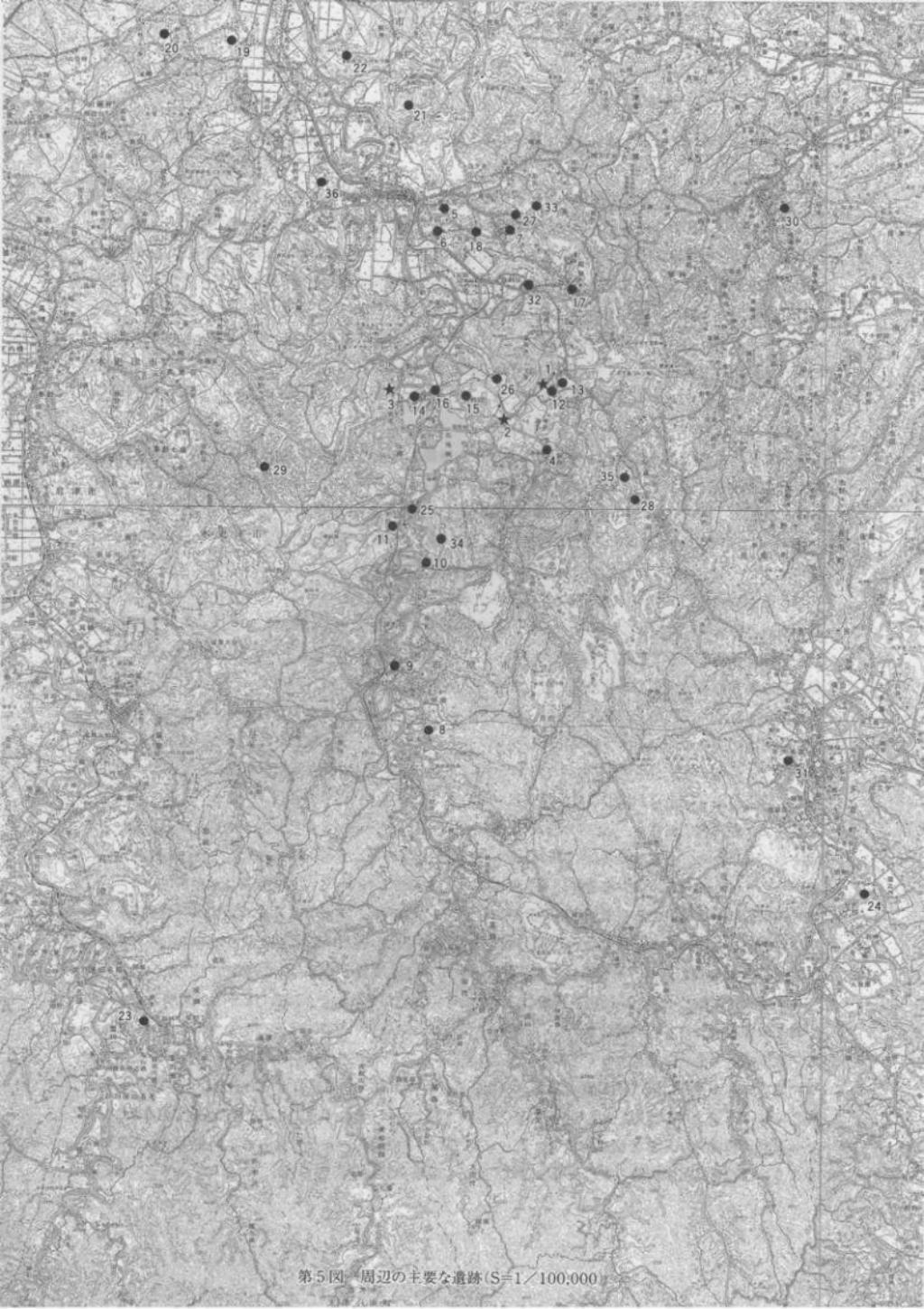
縄文時代も遺跡数は少ないが、上流域でも河川沿いの段丘あるいは独立丘陵上から集落跡が確認される例が増えつつある。石神台遺跡（8）は上流域を代表する遺跡である。道路拡幅に伴い調査が行われたもので、河川に面した丘陵上の狭い平坦地に形成されており、道路敷きの狭い範囲から後期末～晩期初頭の竪穴住居跡3軒、土坑6基のほか、断面V字状の大溝が検出されたのが注目される<sup>112)</sup>。さらに上流側においても類似する平坦地に遺物散布地が存在することが確認されている。月崎寺ノ台遺跡（9）は養老川水面より50m以上高差のある独立丘陵上に位置する遺跡で、加曾利E式期の竪穴住居跡が3軒、土坑が4基検出されたほか多量の土器が出土した。土坑1基には直径・高とも50cmを超す大形の深鉢が埋設されていた<sup>113)</sup>。道生掘遺跡（10）からは、堀之内式期の竪穴住居跡と土坑群が検出され、まとまった量の遺物が出土した<sup>114)</sup>。上平野遺跡（11）は、調査歴は無いがみみずく土偶の破片が採集されている<sup>115)</sup>。

中流域に目を移すと、平蔵川に面した山小川遺跡より低位の段丘面上には閑尻遺跡（12）<sup>116)</sup>、竹ノ下遺跡（13）<sup>117)</sup>が存在する。平成16年以降順次調査が実施されており、いずれからも散発的であるが縄文時代の竪穴住居跡や遺物包含層が検出されている。番後台遺跡（14）は養老川右岸の台地上に位置し、高滝ダムをはさんで山口城跡と向かい合う。昭和54～55年にかけて実施された調査では、加曾利E式期の竪穴住居跡が1軒検出されたほか、中期前半の阿玉台式を中心に早期条痕文期から晩期末に至る土器片が出土した<sup>118)</sup>。平成17～18年の調査では中期を中心とした小竪穴状遺構や土坑などが検出されている<sup>119)</sup>。柏野

遺跡の北西側に隣接する大和田遺跡(15)は平成19年に調査が実施されており、早期の炉穴などが検出されている<sup>[注18]</sup>。新井花和田遺跡(4)からは子母口式から野島式を中心とする早期条痕文期の堅穴住居跡や炉穴・土坑が多数検出され、該期の拠点的な集落遺跡である<sup>[注19]</sup>。久保堰ノ台遺跡(16)は番後台遺跡の東側に隣接する遺跡で、かつて小形の筒型土偶が採集されたことで著名である<sup>[注20]</sup>。昭和58年に南端部が調査されており、遺構は検出されなかったが比較的多量の土器が出土している<sup>[注21]</sup>。鶴舞遺跡(17)は平蔵川右岸に位置し、まとまった平坦面を持つ台地としては山小川遺跡と並んで最も上流にあたる。遺跡地の面積はかなり広大であるが、ごく一部の調査にとどまっているため全体像は不明な点が多い。平成7年の調査では加曾利E式期とみられる小堅穴を検出したほか、中期から後期にかけての遺物が出土している<sup>[注22]</sup>。その下流の江子田遺跡では昭和60年に南東側が南富士台遺跡(18)の名称で調査が行われ、遺構は検出されなかつたが野島式を中心とする条痕文期の土器が出土した<sup>[注23]</sup>。南総中学遺跡(5)では堅穴住居跡12軒、堅穴状遺構2基、土坑3基が検出された。時期は前期と中期で、特に開山式期の堅穴住居跡は中流域では希少であり注目される<sup>[注24]</sup>。牛久地区より下流域に至ると河川に沿って沖積地が広がり、背後には平坦な台地が広がる。遺跡数も飛躍的に増大し、大規模な集落・貝塚が展開する。上高根貝塚(19)は養老川左岸の台地上に位置する。3箇所の地点貝塚が直径150mほどの規模で環状に分布し、拠点的な集落遺跡であると考えられる。昭和36年の調査では中期から後期にかけての多量の土器が出土したほか、骨角貝製品も多く出土し、特にクジラ脊椎骨の加工品は注目される<sup>[注25]</sup>。また、この時出土した土偶4点は別途紹介されている<sup>[注26]</sup>。上高根貝塚の西側、養老川左岸の河岸段丘最上面には南原遺跡(20)が所在する。小櫃川の支流である松川の水源付近にある。草創期微隆起線文土器と多数の石器が出土しており該期の資料としては市原市隨一である<sup>[注27]</sup>。奉免上原台遺跡(21)は養老川右岸の台地上に位置する。養老川に面する台地先端付近を中心に早期条痕文期の炉穴が110基以上検出されているほか、前期開山式の堅穴住居跡が6軒、中期加曾利E式の堅穴住居跡が1軒検出されている<sup>[注28]</sup>。馬立塚ノ台遺跡(22)は奉免上原台遺跡よりさらに下流側に位置する。昭和51～52年にかけて土字遺跡の名称で調査され、加曾利E式期の堅穴住居跡が20軒以上検出されたほか、早期から晩期に至る土器が出土している<sup>[注29]</sup>。さらに下流に至ると土器石遺跡(武士遺跡)、山倉貝塚、西広貝塚、祇園原貝塚など、全国的にも名の通った集落遺跡・大貝塚が密集する。それらについて詳細は省略するが、山小川遺跡の縄文時代と関連する資料として北野原遺跡について触れておく。北野原遺跡は祇園原貝塚とは谷をはさんで向かい合う位置にあり、堅穴住居跡6軒、地点貝層3箇所などが検出されている<sup>[注30]</sup>。称名寺式から堀之内1式古段階にかけての良好な資料が出土している。

隣接する水系に目を移すと、西側の小櫃川水系では亀山ダムを望む高台の上に寺ノ代遺跡(23)が位置する。緩斜面に堀之内式から加曾利B式期の堅穴住居やピット群が展開する。また、極めて多量の石鍬が出土しているのが注目される<sup>[注31]</sup>。南側の夷隅川水系では河川に面した丘陵上に堀之内上の台遺跡(24)が存在する。後期末から晩期中葉にかけての堅穴住居跡、土壙墓、水場遺構などが検出され、多量の土器・石器が出土しているほか、晩期土偶の出土が多いことが注目される<sup>[注32]</sup>。両水系とも近年上流域の遺跡調査事例が増えており、養老川流域との比較も興味深い。主要な川筋に沿ってある程度の規模の集落が点在しており、交通ルートが確立していたことを示しているとも言える。

弥生時代以降は本報告では中心的な時代ではないこと、遺跡数も膨大であり詳細に述べる余地がほとんどないことから、ここでは上・中流域のうち発掘事例があるものを中心にごく簡単に述べるにとどめたい。



第5図 周辺の主要な遺跡(S=1/100,000)

特に古墳時代については第2章第5節で養老川中流域の状況とあわせて概観しているのでそちらを参照していただきたい。

弥生時代中期は養老川下流の沖積平野に面した台地上に環濠を伴う集落遺跡が出現する。中流以上では数は少ないが、南總中学遺跡(5)では竪穴住居跡32軒、竪穴状造構3基、方形周溝墓12基、土器棺1基、V字溝1条など中期から始まる多数の遺構が検出されている<sup>[注11]</sup>。後期になると沖積平野に面した台地上に集落遺跡が展開する。番后台遺跡(14)は耕作に適した沖積平野を臨む最奥部の台地上に位置する集落であり、昭和54～55年の調査では竪穴住居跡が30軒検出されている<sup>[注12]</sup>。雪解沢遺跡(6)では後期の土器棺墓が検出されている<sup>[注13]</sup>。南富士台遺跡(18)では狭い範囲ながら弥生時代終末から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡を9軒検出した<sup>[注14]</sup>。馬立塚ノ台遺跡(22)では弥生時代後期の竪穴住居跡が80軒以上検出され、古墳時代まで継続する大規模な集落であることが明らかになっている<sup>[注15]</sup>。これより下流域では国分寺台を中心に極めて大規模な集落遺跡が分布する。

古墳時代の集落のうち前期のものは弥生時代から継続するものが多い。主要なものとして番后台遺跡(14)<sup>[注16]</sup>、馬立塚ノ台遺跡(22)<sup>[注17]</sup>、雪解沢遺跡(6)<sup>[注18]</sup>などがある。ここより上流では段丘上の平坦地は主に墓域として利用されたようで、皿郷田茂遺跡(25)では古墳時代前期の方幕および円幕が9基検出された<sup>[注19]</sup>。中期になると東京湾岸地域の首長墓と考えられる鯉崎古墳群が出現し、養老川流域においてもその影響下と考えられる首長墓とそれに伴う多くの古墳が築造されるようになる。牛久周辺では牛久古墳群、佐是古墳群などが低地を囲む台地縁辺に密に分布している。その中でも江子田遺跡(江子田古墳群)は特筆される存在で、豊富な副葬品で有名な金環塚古墳(6)<sup>[注20]</sup>をはじめ、古墳時代の前期から終末期まで多数の古墳が築造されている。江子田遺跡は集落としても前期から後期に至るまで継続的に利用されており、局地的な調査のみではあるが遺構が密に分布する状況が明らかになっている<sup>[注21]</sup>。後期に至ると中流域の平坦面が少ない段丘もしくは独立丘陵は、墓域もしくは生産の場として利用されるようになる。大和田遺跡(15)では丘陵の頂部から古墳群が(緑岡古墳群)、斜面部から横穴墓が検出されている。さらに斜面部では県内でも最古の須恵器窯が検出されている<sup>[注22]</sup>。その他、宮原横穴群や池と田横穴、外部田ヤツ横穴群など、急な斜面を利用した横穴群が多数出現するのもこの時期の特徴である。

奈良・平安時代になると、下流域は上総国府と上総国分寺、国分尼寺を擁し、上総地方の中心地として栄えることになる。上流域は農耕や集落を営むのに適した平坦地に乏しいことからムラはほとんど作られず、かわりに墓域あるいは生産遺跡が多く分布する。代表的なものとして水田・不入窓跡群(26)<sup>[注23]</sup>、支流の内出川水系に位置する石川須恵器窯跡群(27)<sup>[注24]</sup>などがあり、生産された須恵器は国府や寺院などへ供給されたものであろう。奉免上原台遺跡(21)では50基以上の古墳・墳墓が検出されているが、そのうち14基が奈良時代以降の方形墳墓であり、あわせて10基の火葬墓が検出されている<sup>[注25]</sup>。

中世から戦国期には険しい地形を利用して城館あるいは砦が多数築造される。しかし文献資料が乏しいためその経緯については不明な点が多く、特に中世室町期以前の状況はほとんどわかっていない。そうした中で平蔵川上流域に位置する平蔵城跡(28)は、至近にある西願寺阿弥陀堂(国指定重要文化財)が15世紀末に建立された際平蔵城主平将常が関わったとされていることや、城郭構造や出土遺物の検討から15世紀後半～16世紀前半の築造と考えられており、室町後半期の様相をうかがうことができる事例である<sup>[注26]</sup>。<sup>[注27]</sup>それ以外の現在確認できる城館跡のほとんどが16世紀代に築造されたと考えられる。養老川水系をはさむように西に真里谷城(29)、東に長南城(30)、南に大多喜城(31)が控えており、これらをめぐって戦国期

には上総武田氏、里見氏、後北条氏が抗争を繰り広げている。山小川遺跡の下流約2kmに存在する池和田城跡(32)を舞台とした池和田合戦はそうした状況を示す挿話として知られているが、事実関係は不明な点が多い<sup>注37</sup>。一方で内田川流域に位置する石川城跡(33)は、その規模の大きさから拠点的な性格をもった城郭であることは間違いないと思われるが、記録はほとんど残されていない<sup>注38</sup>。山口城跡から養老川を約2kmさかのぼった右岸の丘陵上には大羽根城跡(34)が存在する。養老川沿いおよび後背丘陵を往来する上での要衝にあたる規模の大きな城郭である。先の平蔵城跡の北側には城部田城跡(35)が存在し、城郭構造から16世紀後半と考えられていて、平蔵城から移行した可能性が強いとされている<sup>注39</sup>。大羽根城跡と同時存在していた可能性が強く、相互の関係が興味深い。佐是城跡(36)は文献資料が存在しないが城郭構造から16世紀代と考えられ、真里谷武田氏との関連が指摘されている<sup>注40</sup>。

#### 注

- 1 西野雅人 2006「山小川遺跡」[市原市文化財センター年報 平成17年度]財団法人市原市文化財センター
- 2 財団法人千葉県教育振興財團 2006「山小川遺跡」[千葉県教育振興財團文化財センター年報No.31 - 平成17年度 -]
- 3 宮倉昭一郎 1968「養老川中流域発見の土偶」[南總郷土文化研究会誌]第6号 南總郷土文化研究会
- 4 宮倉昭一郎・佐野 誠 1970「齊藤宗庵氏旧庭の石劍」[市原地方史研究]第7号 市原市教育委員会
- 5 上守秀明 1983「市原市高瀬柏野遺跡出土の鳥頭形把手」[研究連絡誌]第6号 財団法人千葉県文化財センター
- 6 犀崎芳樹 1982「市原市番後台遺跡・神明台遺跡」[財団法人千葉県文化財センター]
- 7 大村 直 1995「高瀬柏野遺跡」[市原市文化財センター年報 平成3年度]財団法人市原市文化財センター
- 8 千葉県教育委員会編 1996「千葉県所在の中近世城館跡詳細分布調査報告書II - 旧上総・安房国地域 -」
- 9 財団法人千葉県教育振興財團 2007「山口城跡」[千葉県教育振興財團文化財センター年報No.32 - 平成18年度 -]
- 10 高橋康男・牧野光隆 2001「市原市新井花和田遺跡」[財団法人市原市文化財センター]
- 11 倉田芳郎編 1978「千葉・南總中学遺跡」[駒沢大学考古学研究室]
- 12 忍澤成視 1991「安久谷向ノ岱遺跡」[平成2年度市原市内遺跡発掘調査報告]市原市教育委員会
- 13 伊賀智樹 2005「市原市石神台遺跡 - 県単道路改良(幹線)委託(田浦地区)埋蔵文化財調査報告書 -」[財団法人千葉県文化財センター]
- 14 牛田堅三 1997「月崎寺の台」[市原市文化財センター年報 平成6年度]財団法人市原市文化財センター
- 15 大村 直 1994「道生堀遺跡」[市原市文化財センター年報 平成元年度]財団法人市原市文化財センター
- 16 財団法人千葉県教育振興財團 2006「閑尻遺跡」[千葉県教育振興財團文化財センター年報No.31 - 平成17年度 -]
- 17 財団法人千葉県教育振興財團 2007「竹ノ下遺跡」[千葉県教育振興財團文化財センター年報No.32 - 平成18年度 -]
- 18 財団法人千葉県教育振興財團 2006「番後台遺跡」[千葉県教育振興財團文化財センター年報No.31 - 平成17年度 -]
- 19 財団法人千葉県教育振興財團 2007「番後台遺跡」[千葉県教育振興財團文化財センター年報No.32 - 平成18年度 -]
- 20 財団法人千葉県教育振興財團 2007「大和田遺跡」[千葉県教育振興財團文化財センター年報No.32 - 平成18年度 -]
- 21 山口直樹 1985「堀の上遺跡」[市原市文化財センター年報 昭和57・58年度]財団法人市原市文化財センター
- 22 横井敦史 1996「鶴舞子来遺跡」[平成7年度市原市内遺跡発掘調査報告]市原市教育委員会
- 23 近藤 敏 1987「南富士台遺跡」[財団法人市原市文化財センター]
- 24 南總郷土文化研究会編 1961「上高根貝塚 南總郷土文化研究会誌」第1号
- 25 武田宗久・金子浩昌 1966「千葉県市原郡上高根貝塚」[日本考古学年報]14 日本考古学協会
- 26 大塚達朗・小川静夫・田村 隆 1979「市原市南原遺跡第1次調査抄報」[伊知波良 1 伊知波良刊行会]

- 大塚達朗・小川静夫・田村 隆 1980「市原市南原道路第2次調査抄報」「伊知波良」4 伊知波良刊行会
- 宇井義典 1998「南原遺跡炎採資料」「千葉文庫」第33号 千葉県文化財保護協会
- 財団法人千葉県史料研究財団編 2002『千葉県史懐さん資料 市原市南原遺跡縄文時代草創期石器資料調査報告書』千葉県
- 24 田中清美・忍澤成視 1992「千葉県市原市奉免上原台遺跡」財団法人市原市文化財センター
- 25 柿沼修平・新井和之・千山利明・村山好文 1979「土字」日本文化財研究所
- 26 小川浩一・蜂屋孝之 2000「市原市北野原遺跡」財団法人市原市文化財センター
- 27 小林清隆・高梨友子 2001「君津市寺ノ代遺跡・県単道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書-」財団法人千葉県文化財センター
- 28 寺門義範 1979「千葉県夷隅郡大多喜町船之内上の古遺跡」千葉県夷隅郡教育委員会
- 29 金丸 誠 1984「市原市雪解跡」財団法人千葉県文化財センター
- 30 山口直樹 1984「千葉県市原市豊郷田茂遺跡」財団法人市原市文化財センター
- 清藤一順 1988「皿郷田茂遺跡 - 第2次 - 」財団法人市原市文化財センター
- 31 上総江子田金環塚古墳発掘整理調査団編 1985「上総江子田金環塚古墳」市原市教育委員会
- 32 相京邦彦 2005「市原市江子田遺跡 - 千葉県立市原園芸高等学校道路拡幅工事(二期工事)に伴う埋蔵文化財調査報告書 - 」財団法人千葉県文化財センター
- 大村 実 2005「江子田遺跡の調査」「平成16年度市原市内遺跡発掘調査報告」市原市教育委員会
- 33 高橋康男 1988「火和田遺跡」財団法人市原市文化財センター
- 34 大川 清 1976「千葉県市原市永田・不入須恵窯跡調査報告書」「千葉県教育委員会
- 山口直樹 1985「千葉県市原市永田・不入窯跡」財団法人市原市文化財センター
- 田所 真 1989「市原市永田・不入窯跡」財団法人市原市文化財センター
- 鈴堤英司・小林信一 1992「市原市永田窯跡群発掘調査報告書」「財団法人千葉県文化財センター
- 森本和男 1994「市原市永田窯跡群第2次発掘調査報告書」財団法人千葉県文化財センター
- 35 奥田正彦 1988「市原市石川須恵器窯跡確認調査報告書」財団法人千葉県文化財センター
- 36 半澤幹雄 2008「市原市平蔵城跡 - 国道297号(平蔵地区)道路改良事業埋蔵文化財調査報告書 - 」財団法人千葉県教育振興財团
- 37 重要文化財西願寺阿弥陀堂修理委員会編 1955「重要文化財西願寺阿彌陀堂修理」事報告書
- 38 小高春雄 1993「千葉県中近世城跡研究調査報告書第14集 - 土気城跡・池和田城跡測量調査報告 - 」財団法人千葉県文化財センター
- 39 鈴木英啓 1984「千葉県市原市石川城郭跡」財団法人市原市文化財センター
- 40 柴田龍司 1985「千葉県中近世城跡研究調査報告書第6集 - 佐是城跡・岡本城跡発掘調査報告 - 」財団法人千葉県文化財センター

## 第2章 山小川遺跡の調査成果

### 第1節 調査・整理の方法と概要

#### 1 調査の方法と概要

調査区は、旧日本測地系のX= -71.180、Y=31.400を起点として全体を20m四方の大グリッドに分け、北から南へ0・1・2…、西から東へA・B・C…という形で表記している（第6図）。更に大グリッドを東西南北それぞれ2mごとに10等分し、全体を100区画に分けた小グリッドを設定して実施した。グリッド名称は大グリッド名と小グリッド名を組み合わせて、例えば1R-04や5N-94などといった方式で呼称している。遺構番号は記号付きの3桁番号で表記し、平成17・18両年度で通し番号となるようにした。なお、同じ遺跡の南側では首都圏中央連絡自動車道建設に伴う調査も進められているが、グリッド番号・遺構番号とも互いの整合性を取ることは考慮していない。小ピットは群で一つの番号を付け、さらに個別にpit1・2などという形で呼称している。記号の意味は以下の通りである。

S I…堅穴住居跡、SM…古墳、SK…土坑、SD…溝、SH…小ピット群。

確認調査は道路敷きに方向を合わせたトレントチを任意で設定して行った（第7図）。平成17年度は全対象範囲のうち南西部に対し調査を行い、中近世のものとみられる土坑や溝などを検出したが、トレントチを拡張して対処し本調査は行わなかった。平成18年度は北東部に対し調査を行った。前年度とは様相が大きく異なり、段丘先端部を中心に縄文時代の堅穴住居跡が密集しており多量の遺物が出土した。また、当初塚と考えられていた盛土状の遺構は古墳であり、主体部が残存していることが判明した。そのため調査区の半分以上が本調査範囲となった。前年度の成果をもとにした計画であったため行程はかなり厳しいものとなった。調査範囲が狭く遺構の形状把握が困難であったこと、調査前は山林で拔根を繰り返しながら調査を進めざるを得なかつたことなどから、遺構の掘り込みが認識できず相当量の遺物がグリッド取り上げとなつた。遺構出土であることが明らかなものでも出土位置の正確な記録を行う時間ではなく、大半が一括取り上げとなつた。特に古墳の墳丘下には良好な包含層が残存していたため、多くの力量を費やすこととなつた。なお、下層は両年度とも遺物は出土しなかつた。

#### 2 整理の方法

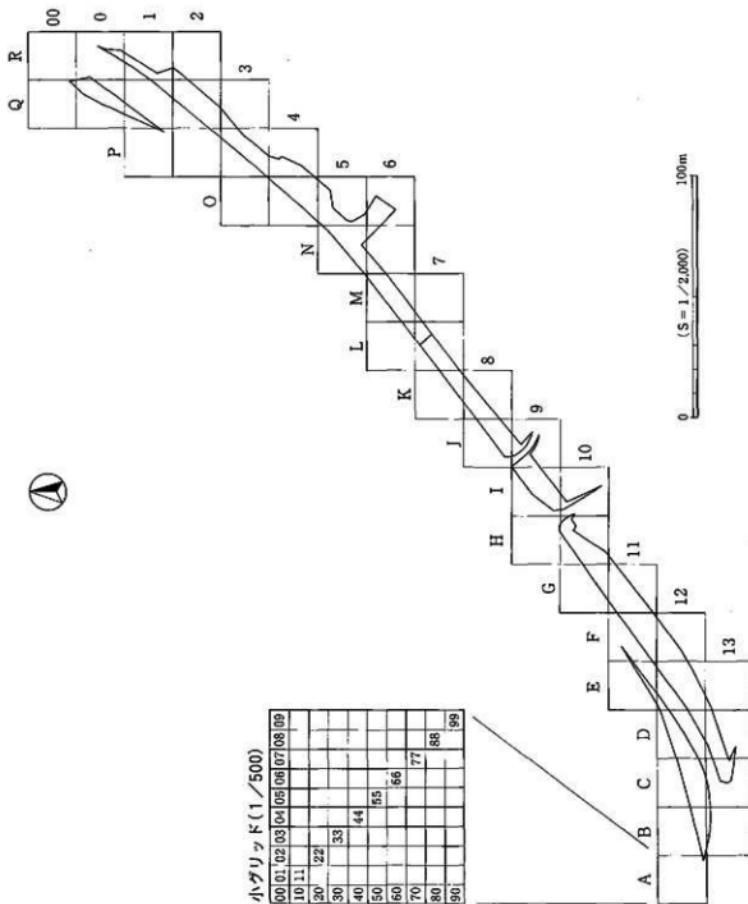
出土遺物のうち大多数を占めるのは縄文土器である。ただし遺構の主要な時期は中期後半の加曾利E3式期から後期前葉の堀之内1式期までであり、古墳墳丘中および旧表上中からは後期中葉の加曾利B式土器が多量に出土している。また、平面分布でも集中する部分とそうでない部分とがかなりはっきり分かれている。そこで土器の分類・接合に当たっては、当該時期（加曾利E3式～加曾利B式期）の遺構のまとまりおよび遺物集中域ごとにエリア分けをして、その中の遺構・グリッド・確認トレントチまでをまとめて処理するようにした。該期の遺物は実測遺物の抽出・計測・実測・探拓・写真撮影・押図レイアウトまで一貫してエリア単位で行っている。これは前項で述べたとおり調査時グリッド上げされたものの実際には遺構に帰属する可能性が強いものを同時に見通せるようにするためである。各エリアの遺構と該当するグリッドは第1表のとおりである。エリアに入らなかつたもの、それ以外の時期（早期～中期中葉および後期後葉以降）、縄文以外の時代については全体で一括している。

遺物のデータ処理法は以下の通りである。まず遺構・グリッド・トレントチごとに重量測定を行つた。これは単純に土器、石器、礫の別に重量を測定しただけである。この数値は各遺構の説明文中に記載してい

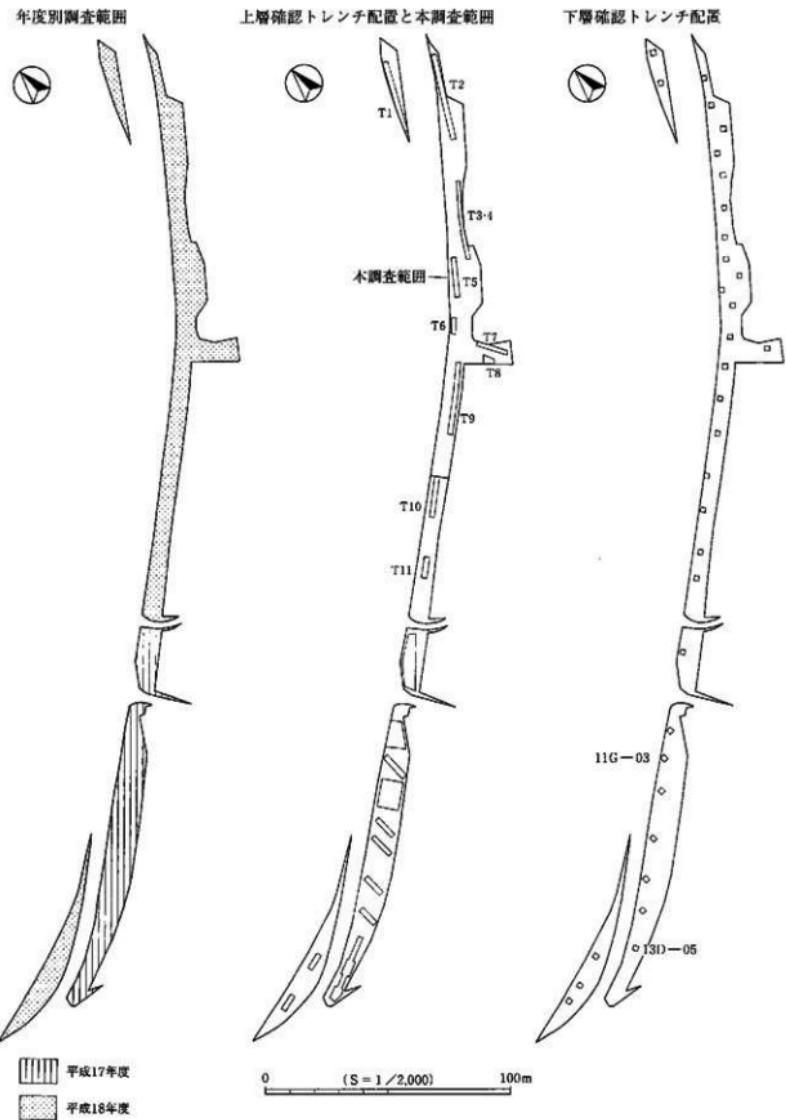
第1表 山小川遺跡エリア別遺構・グリッド・トレンチ一覧

エリア番号	調査年度	遺構		遺物が出土したグリッド	トレンチ
		番号	性格		
①	2006	SI001	堅穴住居跡	0R-75·84·85·94·95、1R-04·13·14·23·24·32·33·41·42	T2
		SI004	堅穴住居跡		
		SI008	堅穴住居跡		
		SK005	土坑		
		SK006	土坑		
		SK007	土坑		
		SK009	土坑		
		SK010	土坑		
		SK011	土坑		
		SI002	堅穴住居跡		
		SI003	堅穴住居跡		
②	2006	SI005	堅穴住居跡	1Q-69·78·79·88·89·96·97·99、1R-50·51·60·70·80·81·90·91、2Q-07·08·09·14·16·17·18·19·23·24·27·28·29·34·36·37·42·43·44·45·53、2R-00·01·10、3P-09	T2、T3-4
		SI006	堅穴住居跡		
		SI007	堅穴住居跡		
		SI009	堅穴住居跡		
		SK008	土坑		
		SH001	ピット群		
		(SM001)	(古墳)		
		3P-36·45·46·54·55·56·63·64·65·72·73·74·82·83·84·93·94	T3-4		
		SI017	堅穴住居跡		
④	2006	SI018	堅穴住居跡	4P-00·40·60·61·70·80、4O-57·67·74·75·83·84·85·89·92·93·94、5O-03·04	T3-4、T5
		SI019	堅穴住居跡		
		SI020	堅穴住居跡		
		SI021	堅穴住居跡		
		SK018	土坑		
		SK019	土坑		
		SK022	土坑		
		SH003	ピット群		
		SK015	土坑	5N-29·39·58·59·69·87·88·89·98·99、5O-21·30·31·32·41·50·60·70·80·81·90·91·92	T6、T7
		SH002	ピット群		
⑥	2006	SI010	堅穴住居跡	6N-09·19、6O-00·02·03·10·11·12·13·14·20·21·22·23·24·25·30·31·32·34·41·42·43·51·52	T7、T8
		SI011	堅穴住居跡		
		SI012	堅穴住居跡		
		SK012	土坑		
		SK016	土坑		
		SK013	陥穴		
		SK014	陥穴		
⑦	2006	SI013	堅穴住居跡	(遺物出土グリッドなし)	T9
		SI014	堅穴住居跡		
		SI015	堅穴住居跡		
		SI016	堅穴住居跡		
エリア外	2005	-	-	6L、9H、9I、10G、10H、11F、11G、12E、12F、13C	
	2006	-	-	0R-03·04、1Q-34	T1、T10

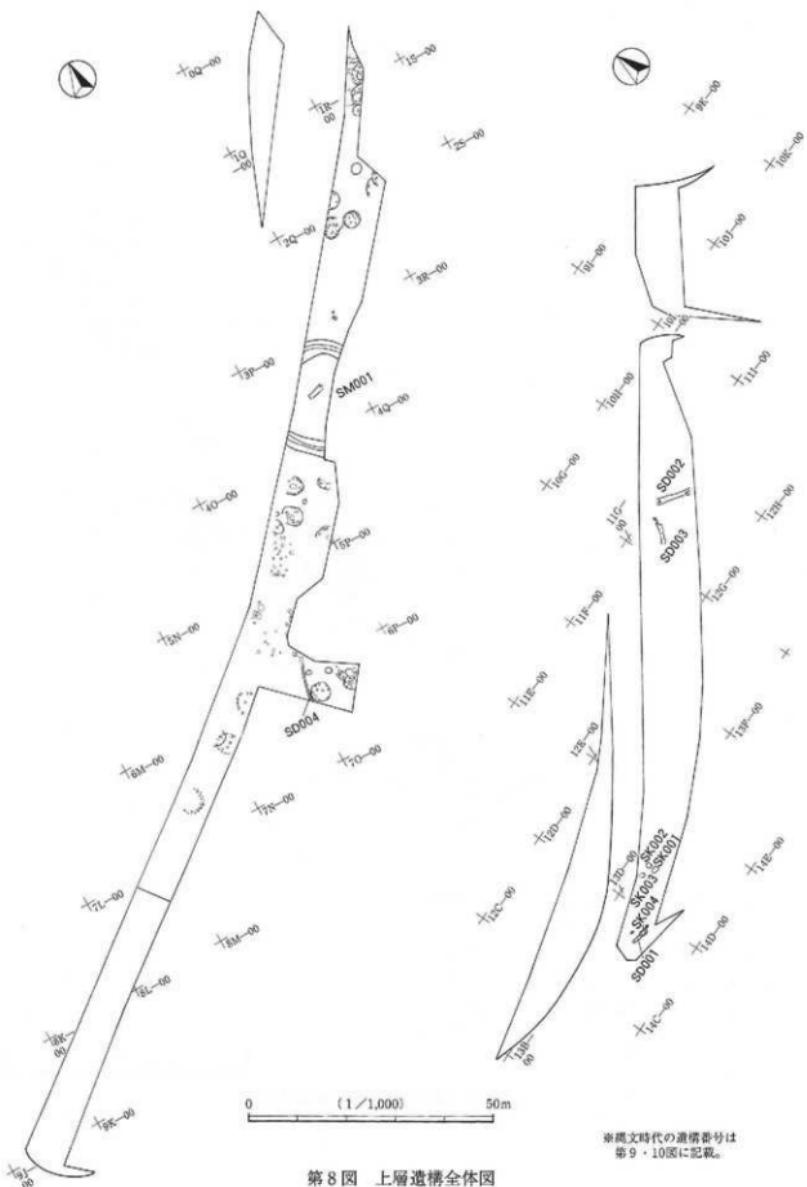
第6図 グリッド配置



る。その後土器の分類・実測個体の抽出と復元を行ったが、その縫口縁部破片は時期ごと・出土地点ごとに重量を計測した(第3表)。石器については明らかに道具とみなされるものあるいはその加工中に生成された剥片・碎片類を抽出し、それらについてはすべて計測と母岩分類を行った。実測個体についてはさらにそこから選別している。計測対象としなかった礫類については今回データ処理を行っていない。なお、整理作業は基本的に中央調査事務所大多喜作業所で実施したが、縄文時代石器の実測・計測・トレスは整理課で実施した。

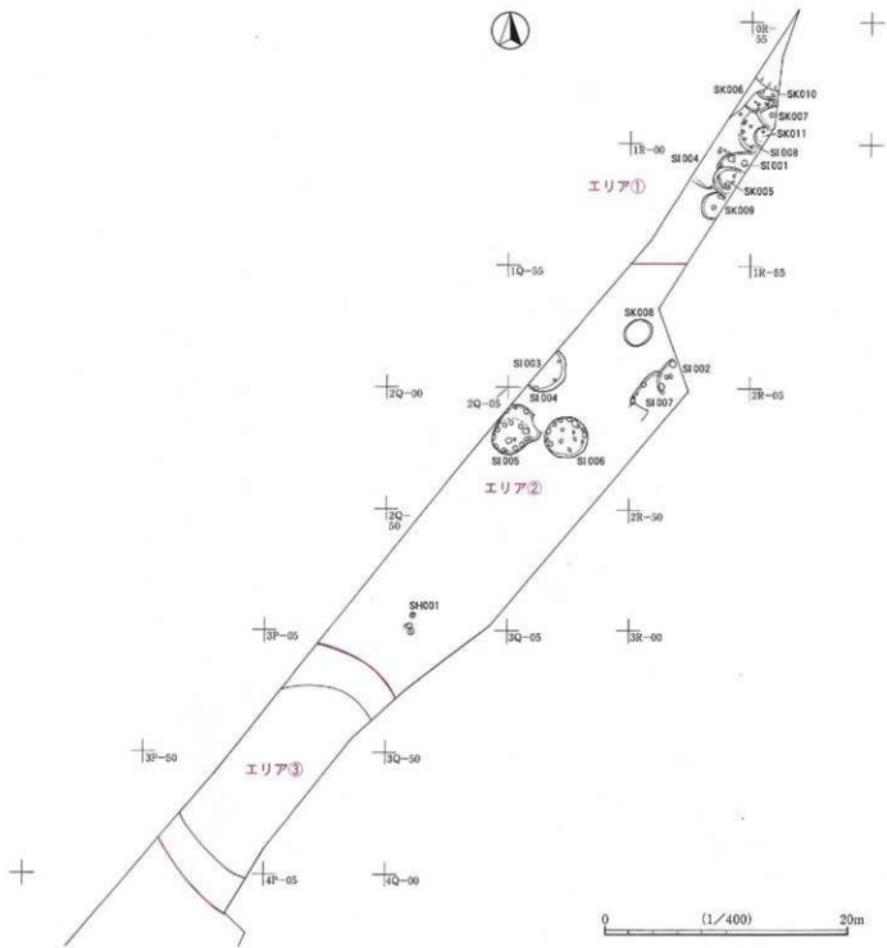


第7図 年度別調査範囲・確認トレンチ配置と本調査範囲

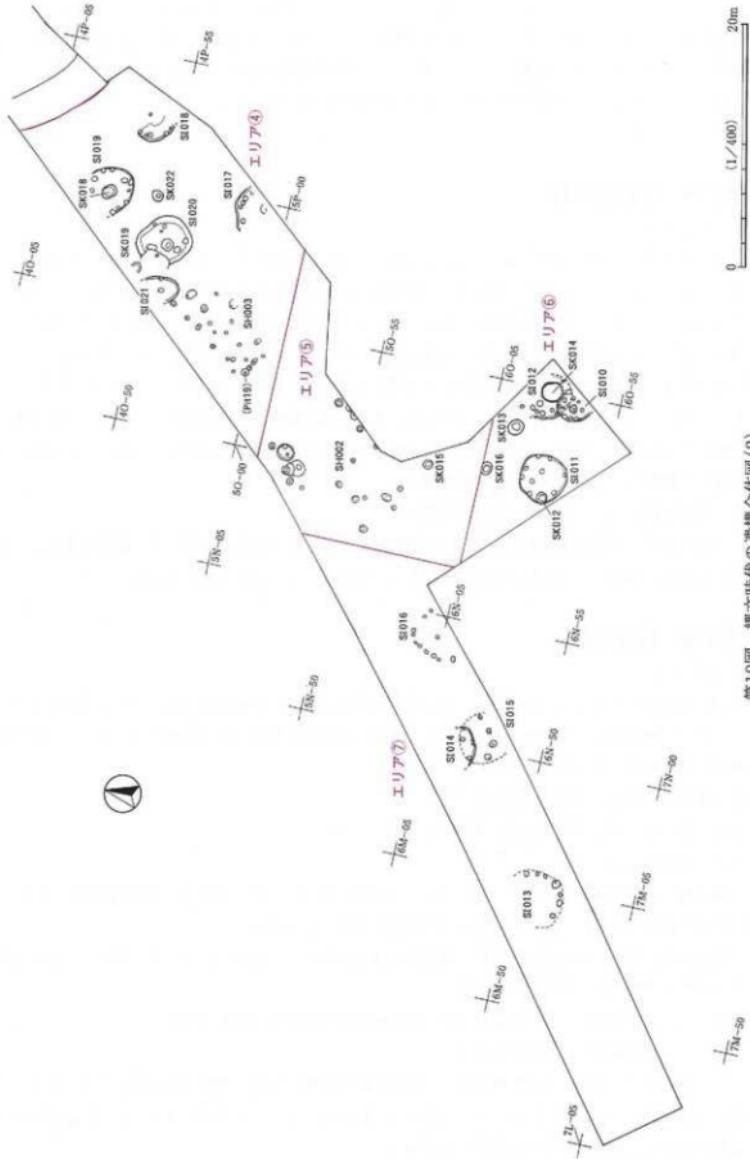


第8図 上層遺構全体図

本圖文時代の遺構番号は  
第9・10図に記載。



第9図 繩文時代の遺構全体図(1)



第10図 繩文時代の遺構全体図(2)

本報告の編集に当たっては、縄文時代については以上の理由から圧倒的多数を占める加曾利E3式期から加曾利B式期までをエリアごとに報告する体裁とした。遺構全体図は第8図、縄文時代の遺構全体図とエリアの区分けは第9・10図のとおりである。早期から中期中葉までと安行期以降の土器は第3節末尾に掲載した。また、土器以外の土製品・石器類は時期判別が困難なものも含まれるため、やはり第3節の最後にまとめている。

## 第2節 旧石器時代

### 1 基本土層

山小川遺跡の下層基本柱状図は第11図のとおりである。縄文時代以降に堆積したと思われる暗褐色土層、黒色土層が発達している反面、ローム層の遺存状況は悪く明確に立川ローム層と認識できる層は確認できなかった。また、縄文時代以降の層についても堆積状態は安定しているとは言えず、固化した2地点の相互対比は困難である。地表面から約1.2m、表土下からは約70cmで武藏野ローム層下部あるいは粘土層が露出する。実測した地点は調査区の西端部で平蔵川からは遠く、段丘の最も奥まった部分であるが、もともとローム層の堆積が不十分だったのか、あるいは堆積後の浸食作用によってロームが流失したのか現段階では判断できない。ただし立川ローム層由来の旧石器時代遺物が出土しており、旧石器時代からこの地が活動拠点となっていたことは確実である。

### 2 出土遺物（第12図、第2表、図版15）

下層の調査では遺物は出土しなかったが、上層グリッドおよび古墳の墳丘から遺物が出土している。いずれも段丘先端部に近い位置である。1はナイフ形石器、2・3は槍先型尖頭器である。

## 第3節 縄文時代

### 1 エリア①

調査区北東端にあたる。狭い面積であるが竪穴住居跡3軒、土坑6基が検出され、遺物も多量に出土した。ただし道路を挟んだ北側の1トレンチ周辺からは遺構は検出されず遺物も少なかった。遺構群は当該地点より南東側に広がると考えられる。

#### S1008（第13～15図、図版5・6）

〔位置〕 OR-84・85・94・95、1R-04・05

〔標高〕 75.1m

〔他遺構との重複関係〕 SK011より古い。SK006・007・010との新旧関係は不明。

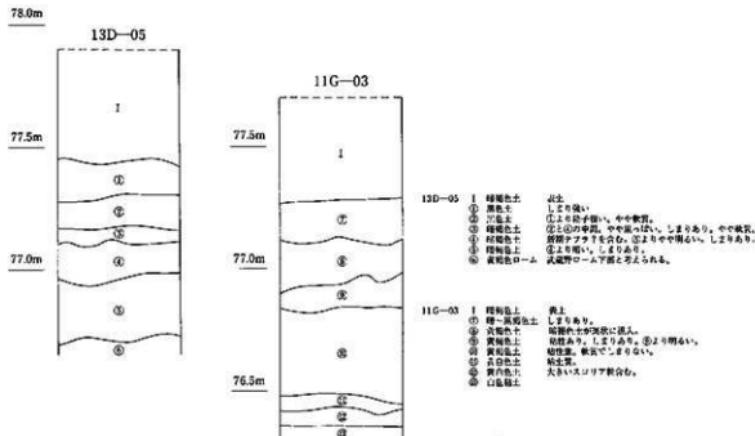
〔形状と規模〕 楕円形。遺存度が低いため軸長は不明。深さ17cm。

〔断面形状と覆土〕 残存部分は直形。遺存状況は悪く分りにくいか、ロームブロックを多量に含んだ褐色土あるいは暗褐色土が堆積している。

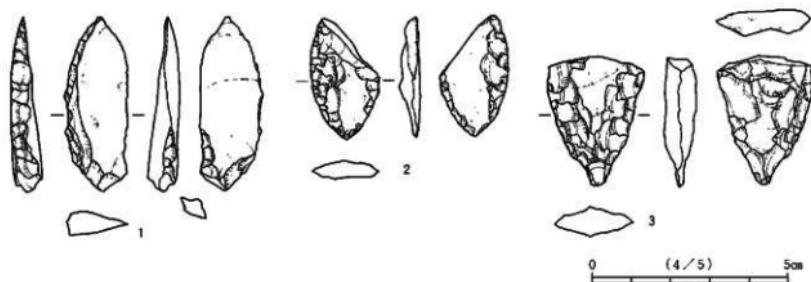
〔床面〕 北側に向かってやや傾斜する。硬化面は調査範囲から検出されず。

〔炉〕 調査範囲からは検出されず。

〔ピット〕 プラン内から6基検出された。壁際ほぼ等間隔に5基、中間に1基存在する。なお、プラン北西外側に位置するP7は、P5・6とSK011内のピットと合わせてもう1軒竪穴住居跡が存在する可能性があると、調査時に考えられたものである。



第11図 下層基本柱状図 ( $S = 1/20$ )



第12図 旧石器時代遺物

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
直径・長軸	19	19	28	29	21	21	22
短軸	-	-	-	20	-	-	-
深さ	17	6	12	8	11	11	13

(表中の単位はcm, ()は推定値、以下同じ)

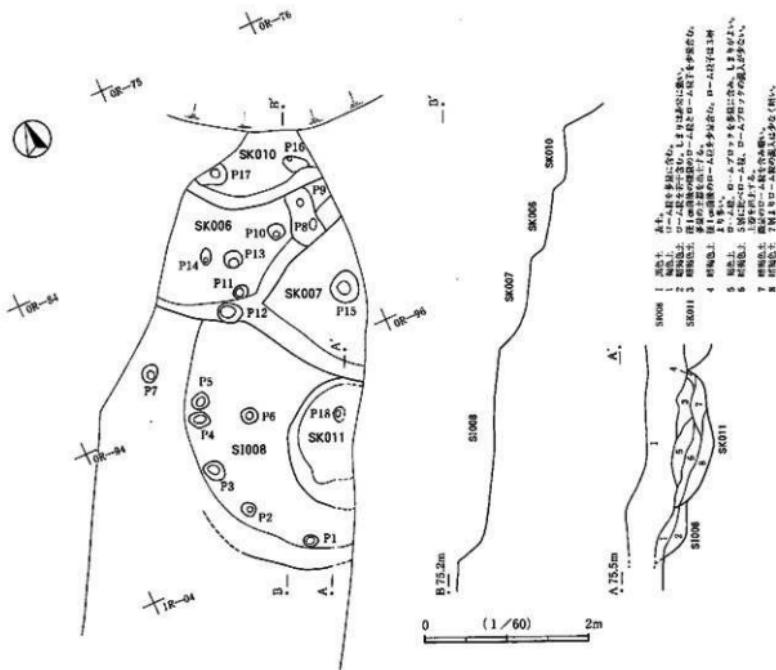
【出土遺物】総量は繩文土器3,507g、石器・礫362gである。主体は堀之内1式であるが堀之内2式の混入も認められる。SK011土坑に由来するものかもしれない。

SK006 (第13・15図、図版1・6)

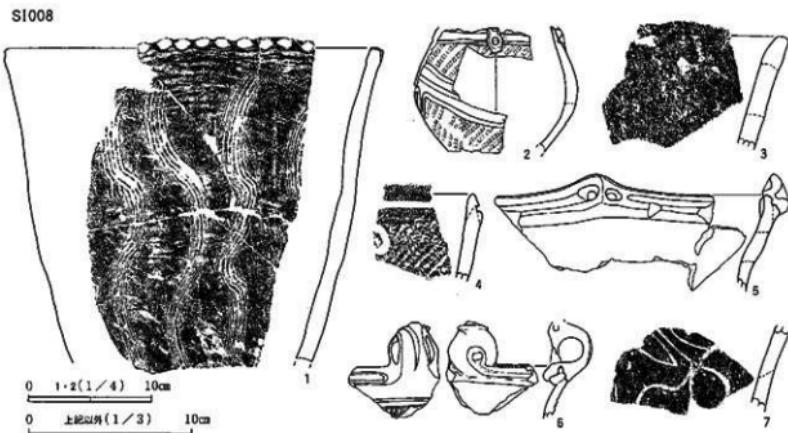
【位 置】OR-84・85

【標 高】74.0m

【他遺構との重複関係】SI008、SK007・010と切り合うが新旧関係は不明。



第13図 エリア①の遺構(SI008、SK006・007・010・011)



第14図 エリア①出土土器(1)

〔形状と規模〕半分以上削平されており不明。

〔断面形状〕残存部分は皿形。

〔床 面〕北側に向かってやや傾斜する。

〔 炉 〕調査範囲からは検出されず。

〔ピット〕7基。P8と9はつながった状態である。P12は壁から検出。

ピット番号	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14
直徑	(31)	(41)	21	16	31	21	19
深さ	20	17	24	11	16	6	10

〔出土遺物〕総量は縄文土器1,270gである。多くが覆土上層部から出土している。図化できる遺物は少なかった。12は復元すればかなり大きなものとなる土器で、形状などから網取式の影響を受けたものと思われる。

#### SK007 (第13・15図、図版1・5・6)

〔位 置〕OR-85・95

〔標 高〕74.2m

〔他遺構との重複関係〕SI008、SK006・010と切り合うが新旧関係は不明。

〔形状と規模〕半分以上削平されており不明。

〔断面形状〕残存部分は皿形。

〔床 面〕北側に向かってやや傾斜する。

〔 炉 〕調査範囲からは検出されず。

〔ピット〕1基のみ検出された(P15)。直径38cm×深さ14cmである。

〔出土遺物〕石器・礫は出土せず縄文土器が1,930g出土した。狭い範囲ながら遺物量は多い。堀之内1式あるいはそれに並行する土器が主体である。14は器表面の剥落が顕著である。16は下側に文様があるのが不自然であるが、厚みや輪積み痕跡の観察からこのように上下を決定した。17は棒状工具による刺突が施されるが、全体でどのようなモチーフを描くかは不明である。18は注口土器であるが、正面の注口部はほとんど欠損しているため背面と側面を実測した。

#### SK010 (第13図、図版1)

〔位 置〕OR-75・85

〔標 高〕73.7m

〔他遺構との重複関係〕SI008、SK006・007と切り合うが新旧関係は不明。

〔形状と規模〕ほとんど削平されており不明。

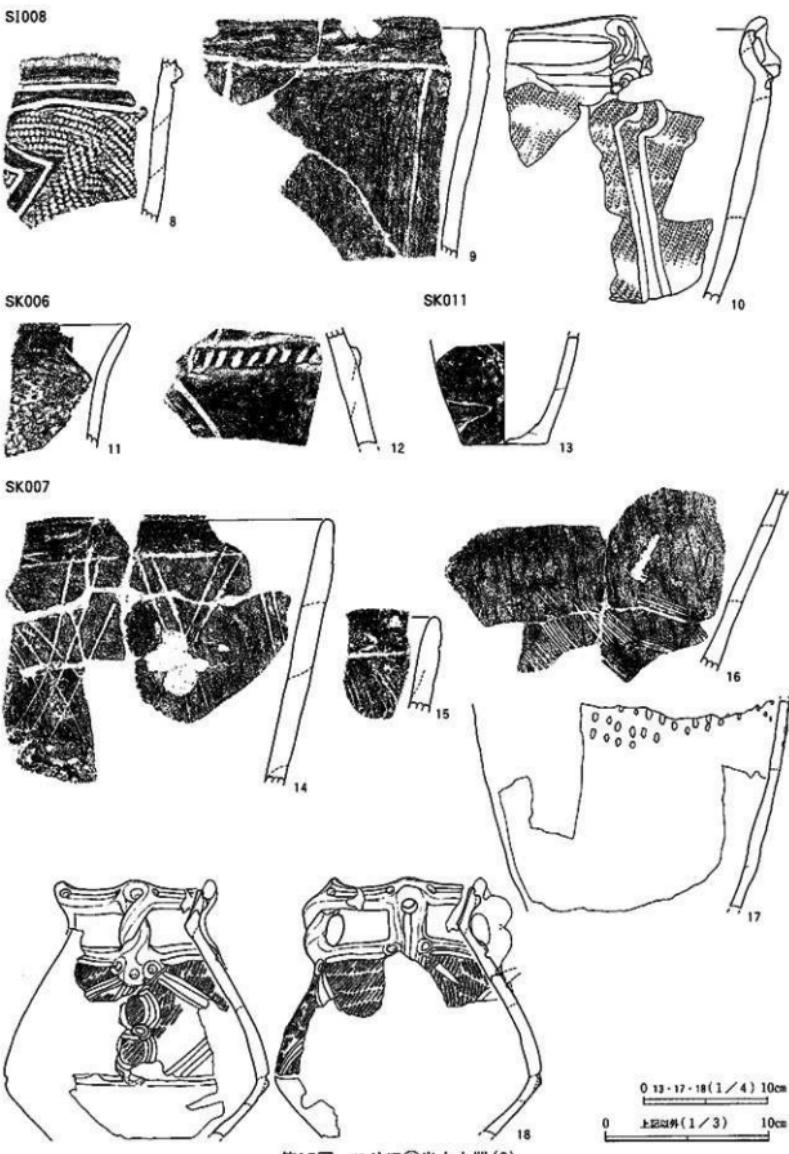
〔断面形状〕残存部分は皿形。

〔床 面〕北側に向かってやや傾斜する。

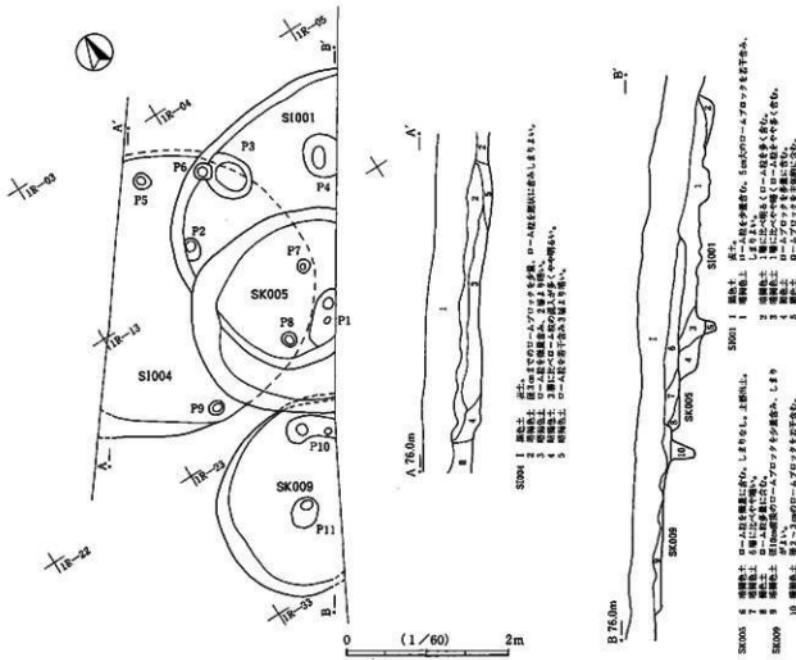
〔 炉 〕調査範囲からは検出されず。

〔ピット〕2基検出された。いずれも壁際である。

ピット番号	P16	P17
直徑・長軸	(26)	(37)
短軸	19	-
深さ	29	17



第15図 エリア①出土土器(2)



第16図 エリア①の遺構 (SI001・004、SK005・009)

〔出土遺物〕土器は出土せず石器・礫が45g出土した。

#### SK011 (第13・15図、図版6)

〔位 置〕OR-95

〔標 高〕75.0m

〔他遺構との重複関係〕SI008より新しい。

〔形状と規模〕楕円形。長軸推定160cm×短軸推定140cm×深さ48cm。

〔断面形状と覆土〕楕形。ローム粒子・ブロックを少量含む暗褐色土層がレンズ状に堆積し、ロームブロック主体の褐色土層が上部に堆積する。

〔床 面〕ゆるやかに窪んでおり平坦面はない。硬化面なし。

〔 炉 〕調査範囲からは検出されず。

〔 ピット 〕中央やや北寄りから1基検出(P18)。直径20cm×深さ14cmである。

〔出土遺物〕石器・礫は出土せず縄文土器が540g出土した。覆土上層からの出土が多かった。実測できたものは1点のみである。底面内側がほとんど剥落している。後期前葉に属するものであろう。

#### SI001 (第16～18図、図版1・5・6)

〔位 置〕IR-03・04・05・13・14

〔標 高〕75.5m

〔他遺構との重複関係〕 SK 005 より古い。SI 004 とは新旧不明。

〔形状と規模〕 橢円形。長軸推定 370cm × 短軸推定 300cm × 深さ 15cm。

〔断面形状と覆土〕 逆台形。ローム粒子・ブロックを多量に含む暗褐色土、褐色土が一様に堆積する。

〔床 面〕 やや凸凹あり。硬化面は調査範囲から検出されず。

〔炉〕 調査範囲からは検出されず。

〔ピット〕 4基検出された。壁際に3基、中側に1基存在する。規模はかなり不揃いである。

ピット番号	P1	P2	P3	P4
直径・長軸	(74)	29	59	(52)
短軸	(31)	19	49	--
深さ	26	52	14	19

〔出土遺物〕 総量は縄文土器 9,518g、石器・礫 153g である。土器の出土量が多かった。主体は堀之内 1 式である。20 は胴部蘇手のモチーフ内側を、23 は馬蹄状のモチーフ内側をそれぞれ磨消した痕跡がある。22 は器表面の剥落が目立つ。25 は分かりにくいか上端部に櫛羽状条線が施される。26・34 は熱を受けており外面にススが付着する。32 の口縁部の刺突は角棒状工具を使用している。33 は器表面の荒れが顕著である。

#### SI 004 (第 16 図、図版 1)

〔位 置〕 1R - 03・04・12・13・14

〔標 高〕 75.4m

〔他遺構との重複関係〕 SI 001 と重複するが新旧不明。

〔形状と規模〕 橢円形か。長軸推定 400cm × 短軸 340cm × 深さ 6 cm。

〔断面形状と覆土〕 逆台形だが壁は南側のみ残存。壁際にローム粒子をやや多く含む暗褐色土が堆積し、中央はローム粒子をわずかに含む暗褐色土がレンズ状に堆積する。

〔床 面〕 ほぼ平坦。硬化面は調査範囲から検出されず。

〔炉〕 調査範囲からは検出されず。

〔ピット〕 壁際に 5 基ほど等間隔に並ぶ。

ピット番号	P5	P6	P7	P8	P9
直径	22	23	18	22	20
深さ	16	15	31	14	15

〔出土遺物〕 総量は縄文土器 425g、石器・礫 908g。図化できるものはなかった。

#### SK 005 (第 16・18 図、図版 1・8)

〔位 置〕 1R - 03・04・13・14・23

〔標 高〕 75.4m

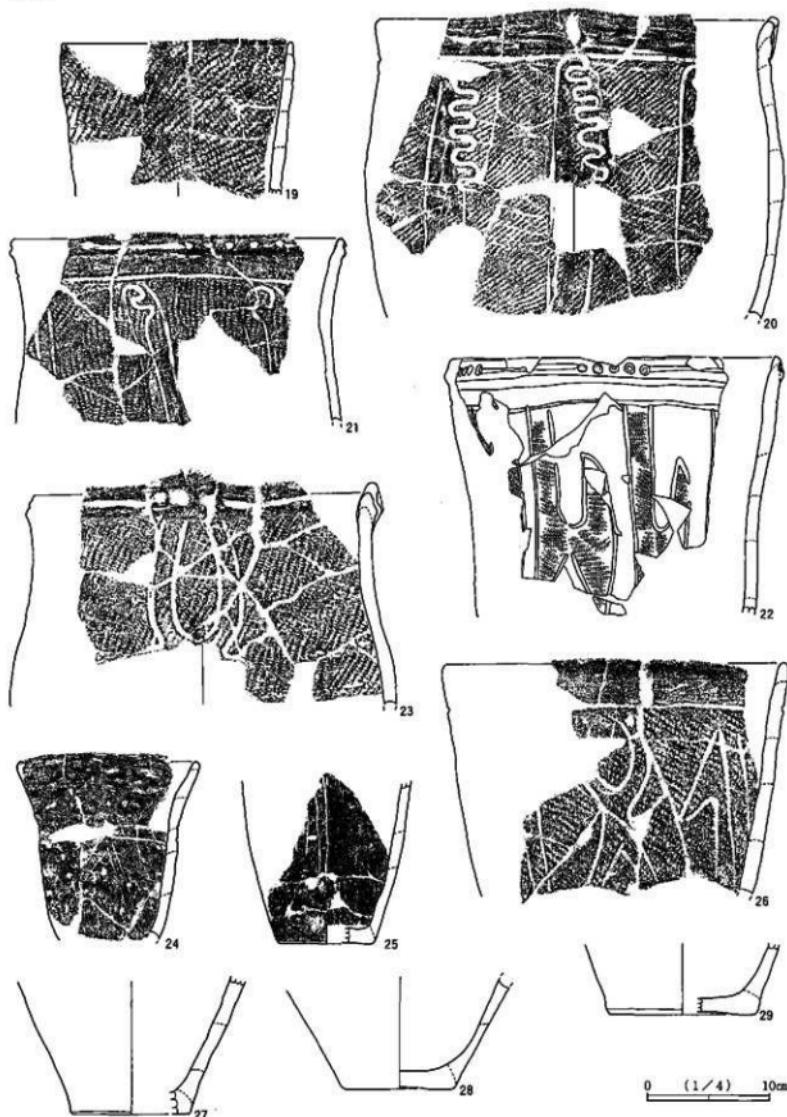
〔他遺構との重複関係〕 SI 001 より新しい。SK 009 より古い。

〔形状と規模〕 橢円形。長軸推定 330cm × 短軸 250cm × 深さ 14cm。

〔断面形状と覆土〕 皿形。下層はローム粒子を多く含む。上層はレンズ状堆積で土器が混入する。

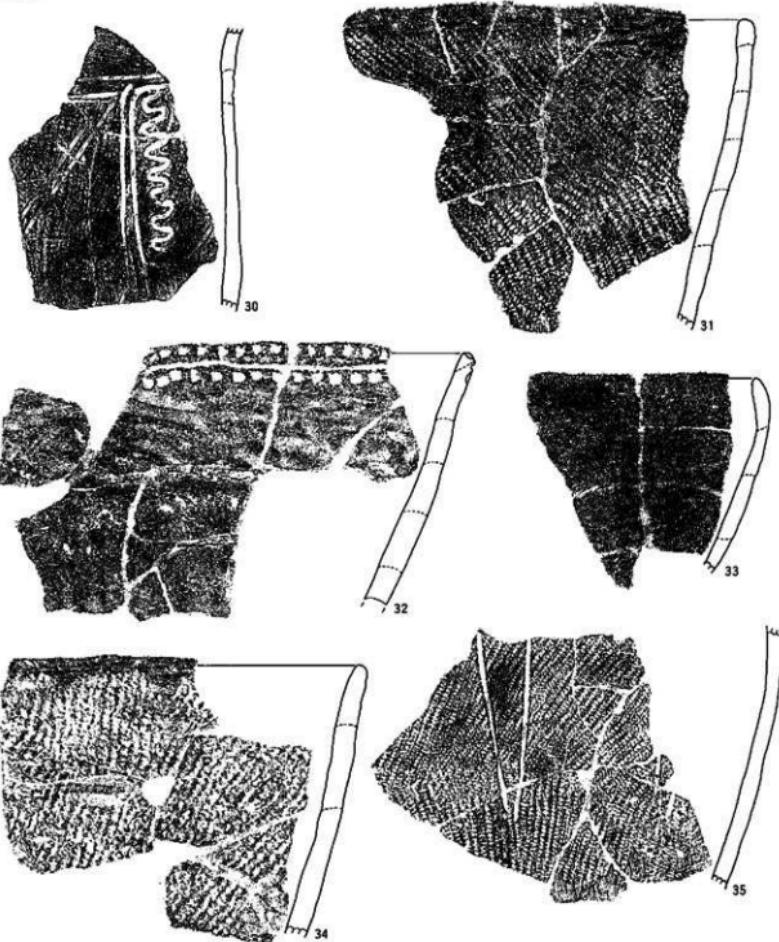
〔床 面〕 ほぼ平坦。硬化面は調査範囲から検出されず。

〔炉〕 調査範囲からは検出されず。



第17図 エリア①出土土器(3)

SI001



SK005



0 (1 / 3) 10cm

第18図 エリア①出土土器(4)

〔ピット〕なし。

〔出土遺物〕総量は縄文土器1,040g、石器・礫690gである。小片が多く分かりにくいが、堀之内1式を主体として堀之内2式が混入する。

#### S K 0 0 9 (第16図、図版1)

〔位 置〕1R-13・14・23・33

〔標 高〕75.5m

〔他遺構との重複関係〕S K 0 0 5より新しい。

〔形状と規模〕楕円形。長軸推定240cm×短軸推定210cm×深さ10cm。

〔断面形状と覆土〕皿形。ロームブロックを少量含む單一土層だが表土との境はやや荒れている。

〔床 面〕ほぼ平坦。硬化面は調査範囲から検出されず。

〔 爐 〕調査範囲からは検出されず。

〔ピット〕中心と壁際にそれぞれ1基あり。

ピット番号	P10	P11
直径・長軸	(61)	39
短軸	31	-
深さ	30	26

〔出土遺物〕出土しなかった。

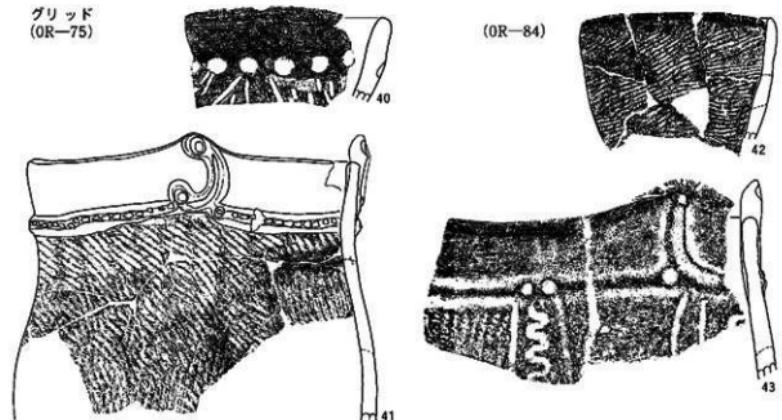
#### グリッド(第19~26図、図版5~7)

出土した遺物は以下のとおりである。(単位はg、以下同じ)

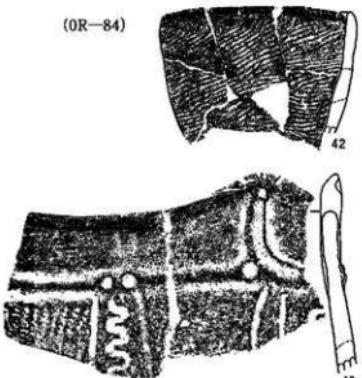
グリッド番号	縄文土器	石器・礫	グリッド番号	縄文土器	石器・礫	グリッド番号	縄文土器	石器・礫
OR-75	1,402	0	1R-04	10,950	0	1R-32	410	183
OR-84	1,560	0	1R-13	120	270	1R-33	80	110
OR-85	5,610	1,132	1R-14	80	60	1R-41	370	20
OR-94	12,028	10	1R-23	110	100	1R-42	60	20
OR-95	14,090	150						

第13図の遺構群と第16図のS I 0 0 1・0 0 4が位置する範囲から遺物が多量に出土している状況が分かる。その一方で南側は極端に少なくなっている。不自然ではある。主体は堀之内1式であるが、網取系土器が多量に出土しているのが目を引く。42・50・55・79は外面に熱を受けておりスカーフが付着する。43は外面の摩耗が顕著である。51は器面がやや荒れている。58は上半分(ちょうど縄文が施されている部分)にスカーフが付着する。64は土器片円盤の可能性もある。70は内面のやや高い位置にスカーフが付着する。75の口縁部は觀音縁帶が外れて刺突の底部のみ残存する。75は口縁部と胴部は接合しない同一個体であるが、双方の位置関係を正しく示すため拓本を一部カットして配置した。78は全体に砂っぽく接合してもすぐ外れるため、器形復元はしなかった。83は上端破断面が輪積み部分で、接合のための溝が観察できる。84は図の左端の破片のみ熱を受け劣化している。接合しない同一個体が1号墳丘から出土している。85は外面に輪積み痕跡を残す。88は楕円形で、図は最大径で復元した。92は全体に熱を受けており劣化が顕著である。94はSK 0 0 7出土の18と類似する注口上器の可能性が強い。102・103は上半分にスカーフが付着する。

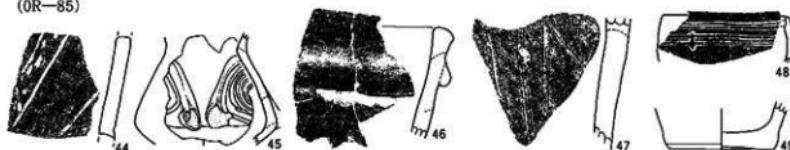
グリッド  
(OR-75)



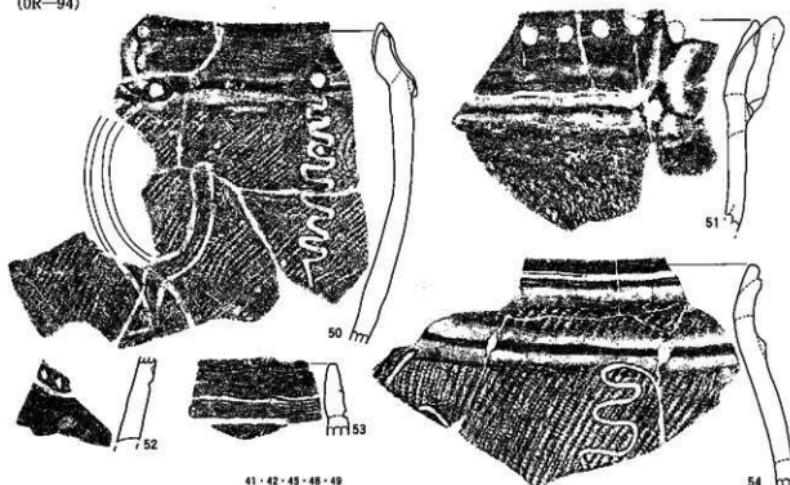
(OR-84)



(OR-85)



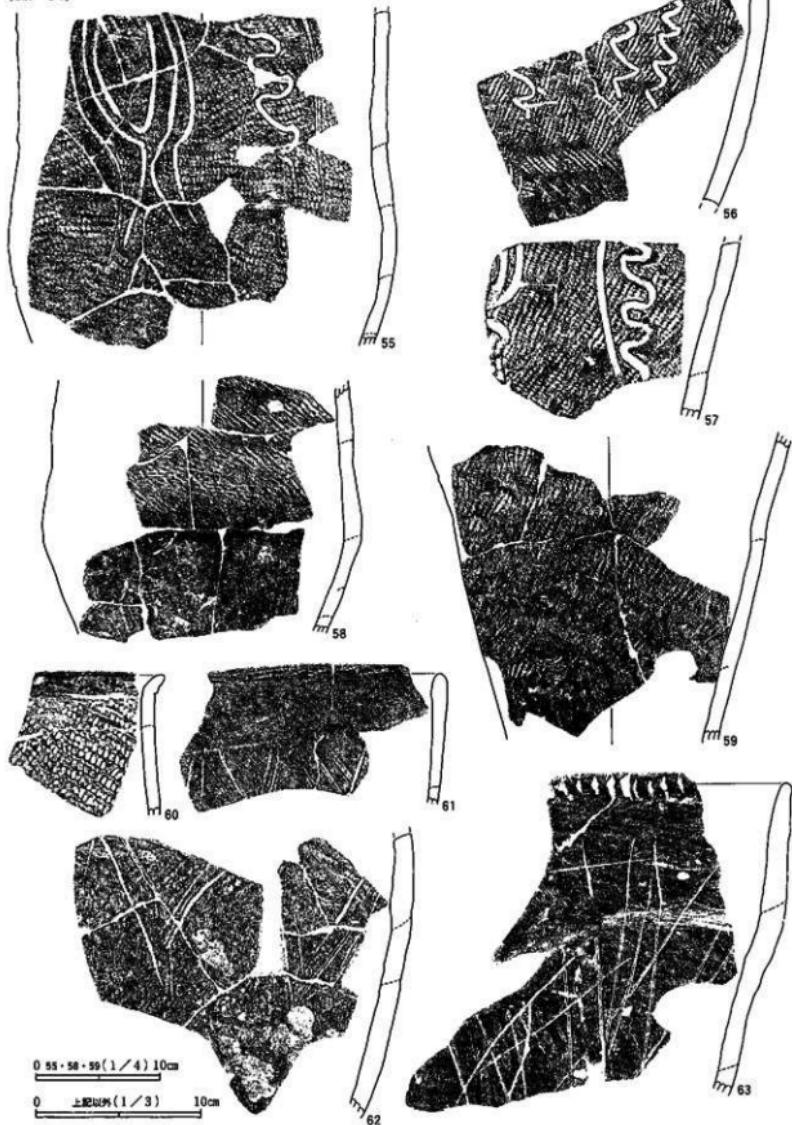
(OR-94)



0 軸記以外(1/3) 10cm 0 (1/4) 10cm

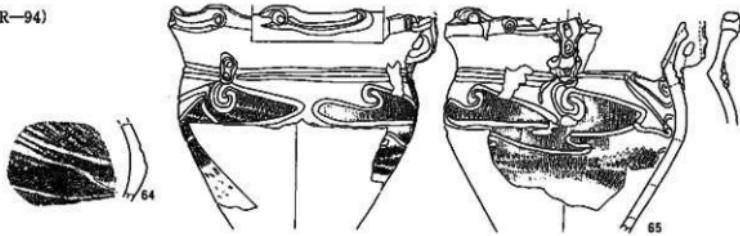
第19図 エリア①出土土器(5)

(OR-94)

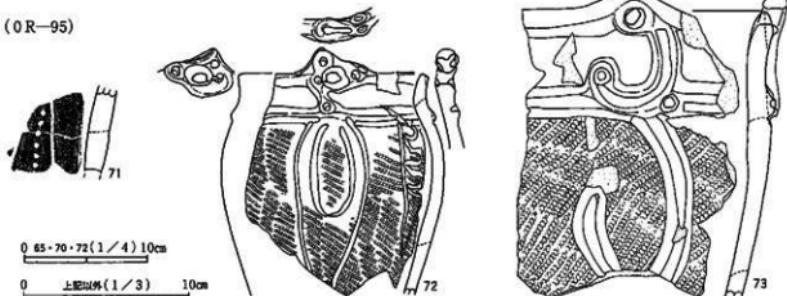


第20図 エリア①出土土器(6)

(0 R-94)

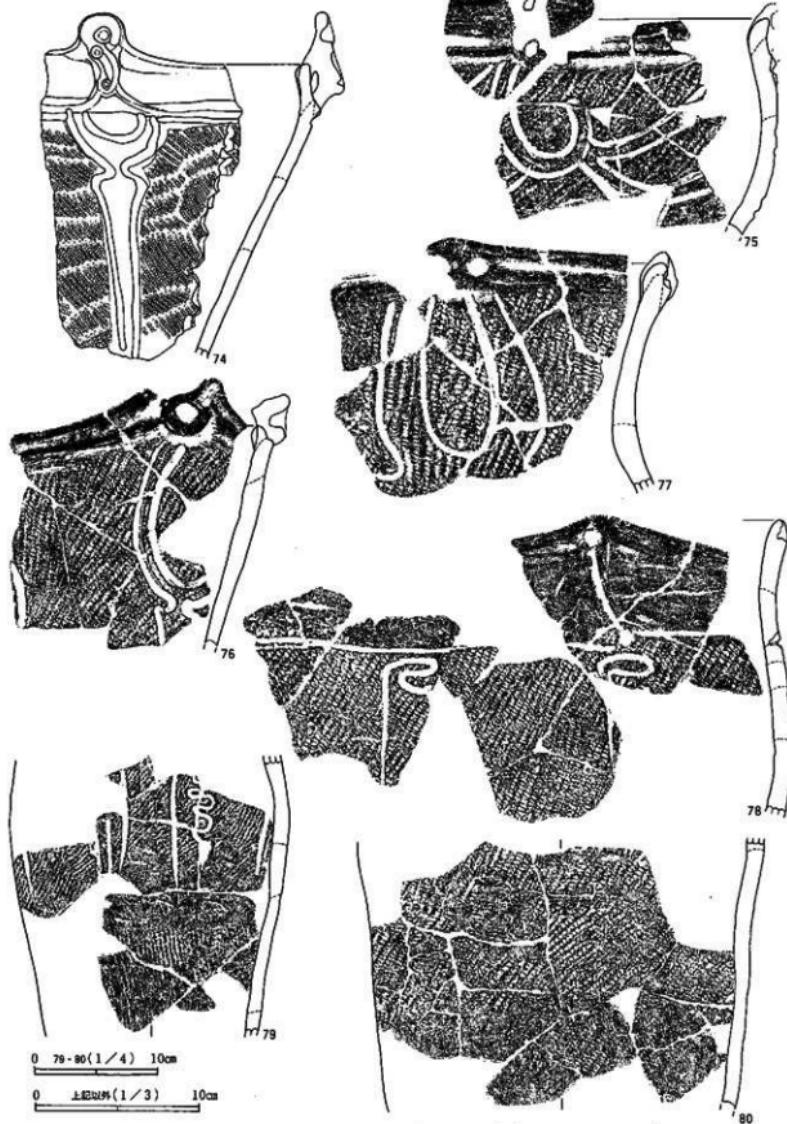


(0 R-95)

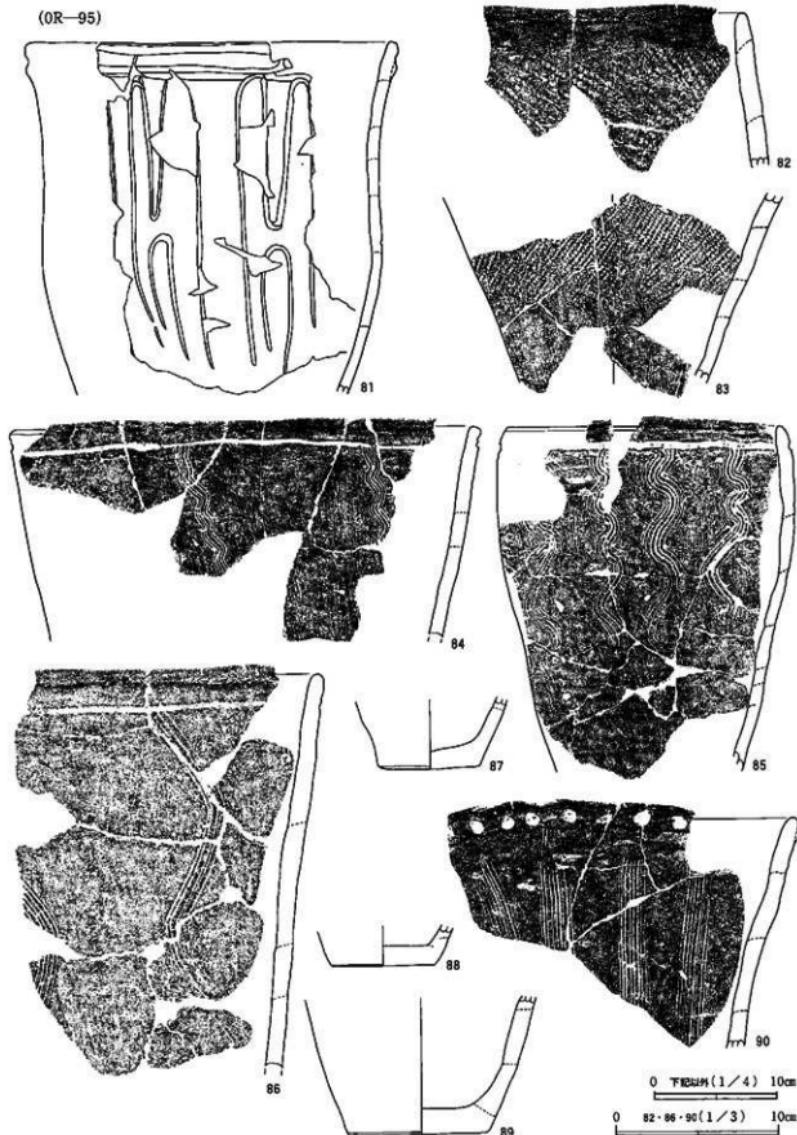


第21図 エリア①出土土器(7)

(OR-95)

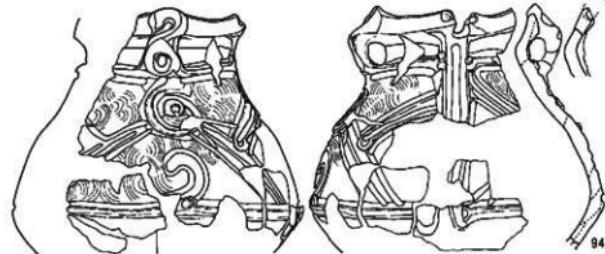
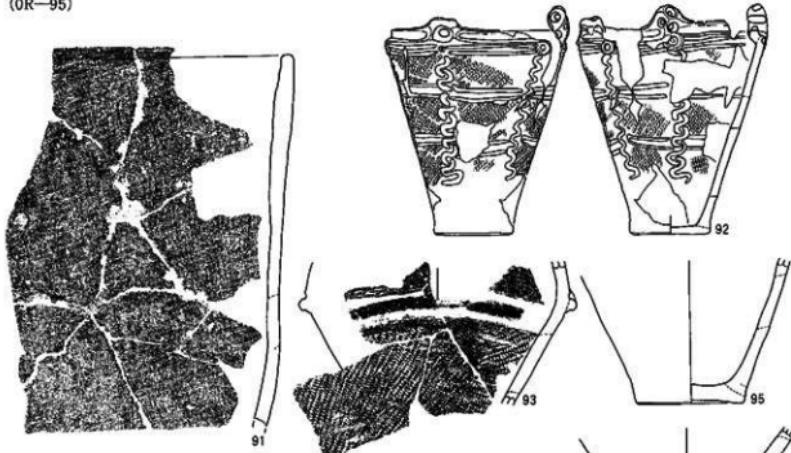


第22図 エリア①出土土器(8)

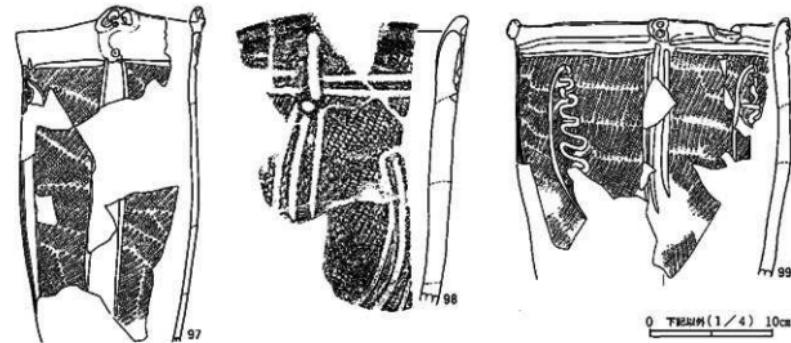


第23図 エリア①出土土器(9)

(OR-95)



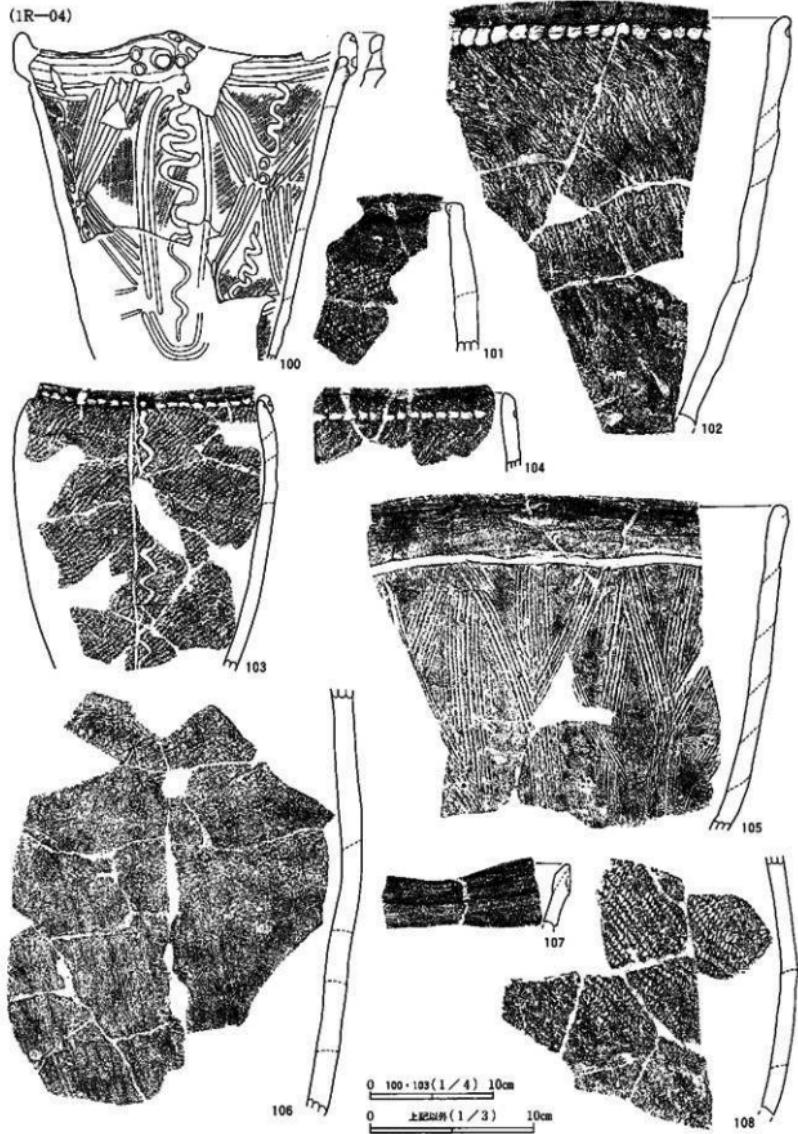
(IR-04)



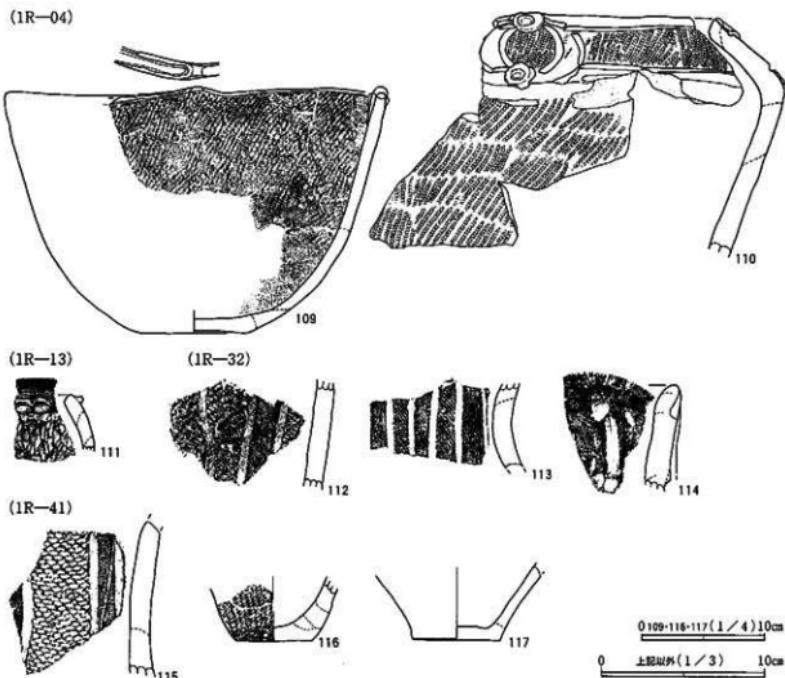
0 10cm (1/4)

0 10cm  
91-98 (1/3)

第24図 エリア①出土土器(10)



第25図 エリア①出土土器(11)



第26図 エリア①出土土器(12)

## 2 エリア②

エリア②からは竪穴住居跡6軒、土坑1基、ピット群1基が検出された。竪穴住居跡と土坑は北東側に位置し、ピット群は南西側に位置する。竪穴住居跡の所在するグリッドからは多量の遺物が出土している。しかし南西側のSH001ピット群周辺は遺物量も少なくなる。

### S1003 (第27図、図版1)

【位 置】 1Q - 86・87・96・97、2Q - 06

【標 高】 75.6m

【他遺構との重複関係】 なし。

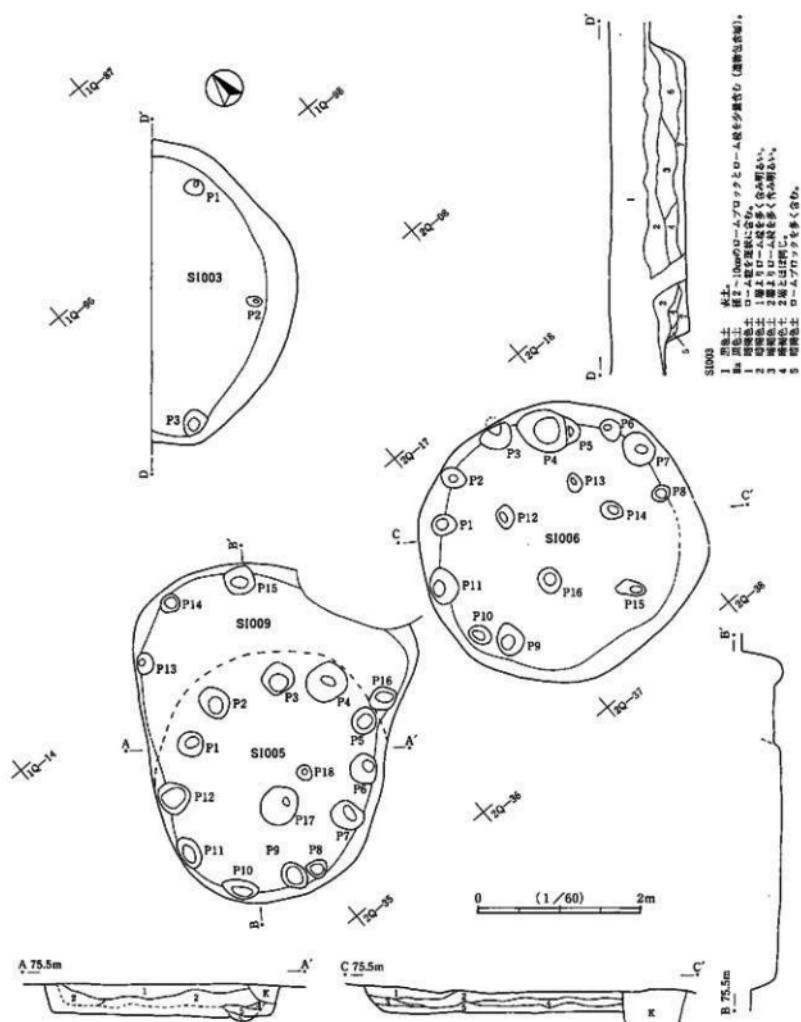
【形状と規模】 楕円形。長軸推定 370cm × 短軸推定 360cm × 深さ 35cm。

【断面形状と覆土】 逆台形。床面直上の土層はロームブロックを多量に含み、上層に行くにしたがって含有量が少なくなる。当遺構が埋まった後ローム粒・ブロックを少量含んだ褐色土が覆っている。

【床 面】 ほぼ平坦である。硬化面なし。

【 爐 】 検出されず。

【ピット】 3基が壁際から検出された。



SI005

- 1 砂褐色土 厚さ1-7cmのロームブロックをシート状に含み、しまりよい。
- 2 黄褐色土 細粒のローム粘土を若干含む。1層より薄い。
- 3 黄褐色土 ローム粒、ロームブロックが若干含み3層より明らかに1層より薄い。
- 4 棕褐色土 ローム粒を多く含み、粘性がある。
- 5 砂褐色土 褐色のローム粘土を含み、しまりよい。
- 6 (記録なし)

SI006

- 1 砂褐色土 厚さ2cm程度のロームブロックを若干、ローム粒を散在含む。
- 2 黄褐色土 厚さ3-10cmのローム粘土を含む。1層より薄い。
- 3 黄褐色土 ローム粒を散在含み2層より薄い。
- 4 棕褐色土 ローム粒を散在含み2層より薄い。
- 5 砂褐色土 ロームブロック、ローム粘土体。

第27図 エリア②の造構(SI003・005・006・009)

ピット番号	P1	P2	P3
直径・長軸	25	21	32
短軸	-	12	25
深さ	16	17	14

〔出土遺物〕 総量は縄文土器 300g、石器・礫 1.130g である。図化できる遺物は出土しなかった。

#### S I 0 0 5 (第 27・30 図、図版 1・8)

〔位 置〕 2Q - 14・15・24・25

〔標 高〕 75.4m

〔他遺構との重複関係〕 S I 0 0 9 より新しい。

〔形状と規模〕 柱穴列より推定した形状は梢円形。長軸推定 310cm × 短軸 270cm × 深さ 27cm。

〔断面形状と覆土〕 逆台形。下層にローム粒子を若干含む暗褐色土が皿状に堆積し、上層にロームブロックを含む暗褐色土がレンズ状に堆積する。

〔床 面〕 ほぼ平坦である。硬化面なし。

〔 炉 〕 検出されず。

〔ピット〕 14基。そのうち12基は壁際である。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	
直径・長軸	32	41	42	51	31	37	39	28	38	46	39	
短軸	-	-	-	-	-	-	32	-	29	24	26	
深さ	22	20	15	23	9	40	28	10	8	12	24	
ピット番号	P12	P17	P18									
直径・長軸	40	51	20									
短軸	-	-	-									
深さ	13	30	19									

〔出土遺物〕 総量は縄文土器 440g、石器・礫 1.890g である。図化できた遺物は 1 点のみである。称名寺 I 式の口縁部で赤色に発色しており、文字通り異彩を放っている（赤彩ではない）。

#### S I 0 0 9 (第 27 図、図版 1)

〔位 置〕 2Q - 05・14・15・16・24・25・26

〔標 高〕 75.0m

〔他遺構との重複関係〕 S I 0 0 5 より古い。

〔形状と規模〕 はっきりしないが不整円形か。北西 - 南東方向軸長 340cm × 深さ 40cm。

〔断面形状〕 逆台形。

〔床 面〕 ほぼ平坦である。硬化面なし。

〔 炉 〕 検出されず。

〔ピット〕 4 基壁際から検出された。

ピット番号	P13	P14	P15	P16
直径・長軸	27	26	38	41
短軸	-	-	28	-
深さ	19	24	15	14

〔出土遺物〕 総量は縄文土器 380g である。図化できる遺物は出土しなかった。

## S 1006 (第 27・30 図、図版 1・8)

〔位 置〕 2Q - 16・17・18・26・27・28

〔標 高〕 75.5m

〔他遺構との重複関係〕 なし。

〔形状と規模〕 円形。直径 340cm × 深さ 33cm。

〔断面形状と覆土〕 皿形。床面直上にローム粒子・ブロックを主体とする褐色土が堆積するが、上層はローム粒子・ブロックを少量含む暗褐色土が水平に堆積する。

〔床 面〕 ほぼ平坦である。硬化面なし。

〔 爐 〕 検出されず。

〔ピット〕 16基。11基が壁際から検出された。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11
直径・長軸	30	33	43	(60)	31	29	43	23	41	30	45
短軸	-	25	31	50	(19)	-	-	-	31	19	34
深さ	11	10	34	34	13	23	30	7	16	37	18
ピット番号	P12	P13	P14	P15	P16						
直径・長軸	29	23	29	36	31						
短軸	21	18	-	18	-						
深さ	12	19	11	17	18						

〔出土遺物〕 総量は縄文土器 549g、石器・礫 1,364g である。図化できた遺物は 1 点のみであった。称名寺Ⅱ式であろう。

## S 1002 (第 28・30 図、図版 2・8)

〔位 置〕 1R - 81・91・92、2R - 01

〔標 高〕 75.7m

〔他遺構との重複関係〕 S 1007 より新しい。

〔形状と規模〕 楕円形。長軸と短軸は検出部が少ないため不明。深さ 29cm。

〔断面形状と覆土〕 逆台形。全体に水平堆積で、ピット覆土を除いてローム粒の混入は少ない。

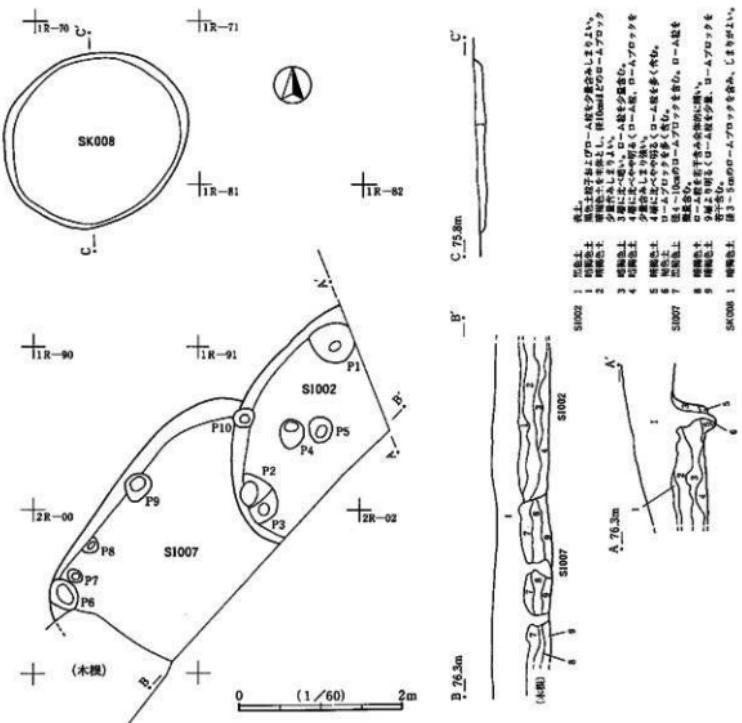
〔床 面〕 ほぼ平坦である。硬化面は調査範囲から検出されず。

〔 爐 〕 調査範囲からは検出されず。

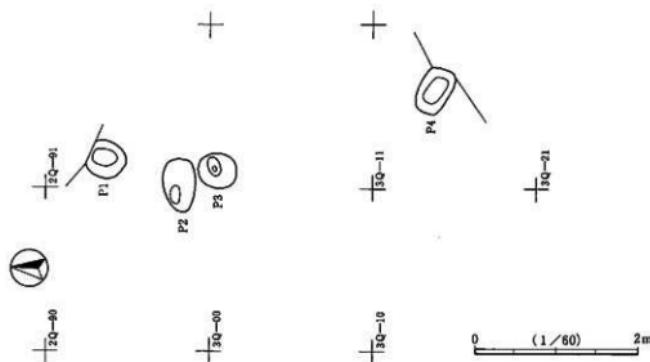
〔ピット〕 6 基検出された。4 基は壁際である。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5
直径・長軸	(58)	(43)	41	36	33
短軸	-	-	-	30	-
深さ	24	28	25	22	32

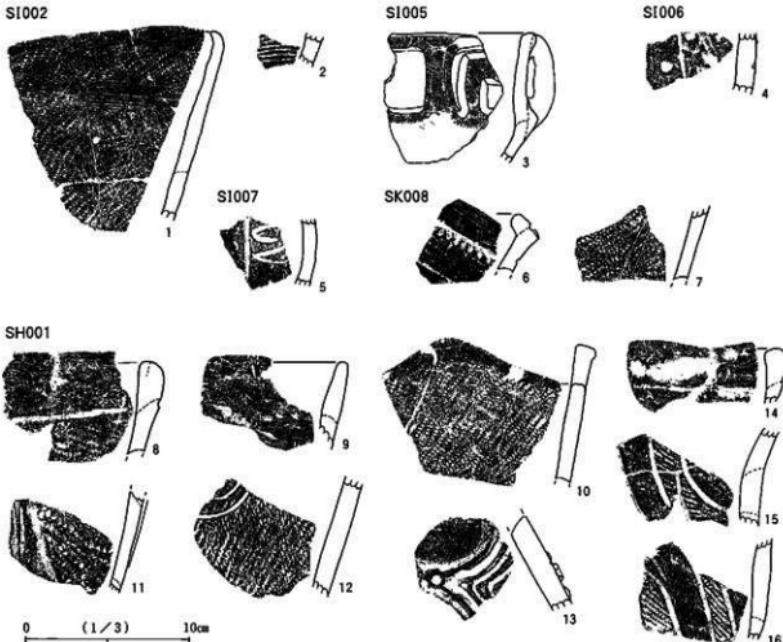
〔出土遺物〕 総量は縄文土器 386g、石器・礫 308g である。図化できた遺物はごく少ない。いざれも堀之内 2 式である。



第28図 エリア②の造構(SI002・007, SK008)



第29図 エリア②の造構(SH001)



第30図 エリア②出土土器(1)

S I 0 0 7 (第28・30図、図版2・8)

[位 置] 1R - 90・91、2R - 00・01

[標 高] 75.6m

[他遺構との重複関係] S I 0 0 2 より古い。

[形状と規模] 木根により破壊されているため不明であるが隅丸方形か。深さ31cm。

[断面形状と覆土] 逆台形。ローム粒子・ブロックを若干含む暗褐色土が30cm程度堆積し、上部にロームブロックを含んだ黒褐色土がレンズ状に堆積する。

[床 面] ほぼ平坦である。硬化面は調査範囲から検出されず。

[ 炉 ] 調査範囲からは検出されず。

[ピット] 5基いずれも壁際から検出された。P 10の位置はやや微妙であるが、規模や他のピットとの並び方から S I 0 0 7 に帰属するものとみなした。

ピット番号	P6	P7	P8	P9	P10
直径・長軸	43	19	21	36	27
短軸	37	—	—	—	—
深さ	24	13	17	18	17

[出土遺物] 総量は縄文土器128g、石器・礫756gである。図化できた遺物は1点のみ。壺之内1式である。

## SKO08 (第28・30図、図版2・8)

〔位置〕 1Q - 79・89、1R - 70・80

〔標高〕 75.8m

〔他遺構との重複関係〕なし。

〔形状と規模〕 楕円形。長軸 230cm × 短軸 205cm × 深さ 10cm。

〔断面形状と覆土〕 凧形。单一土層でロームブロックを多く含む。

〔床面〕 ほぼ平坦である。硬化面は調査範囲から検出されず。

〔炉〕 検出されず。

〔ピット〕 なし。

〔出土遺物〕 総量は縄文土器 610g で、石器・礫は出土しなかった。固化できた遺物は 2 点で、いずれも壺之内 1 式である。

## SHO01 (第29・30図、図版2・8)

〔位置〕 2Q - 90・91、3Q - 00・01・11

〔標高〕 74.8m

〔他遺構との重複関係〕なし。

〔形状と規模〕 ピットは全部で 4 基検出されている。並び方に規則性はみられない。

ピット番号	P1	P2	P3	P4
形状	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形
長軸	(54)	66	46	60
短軸	46	40	41	40
深さ	28	23	63	24

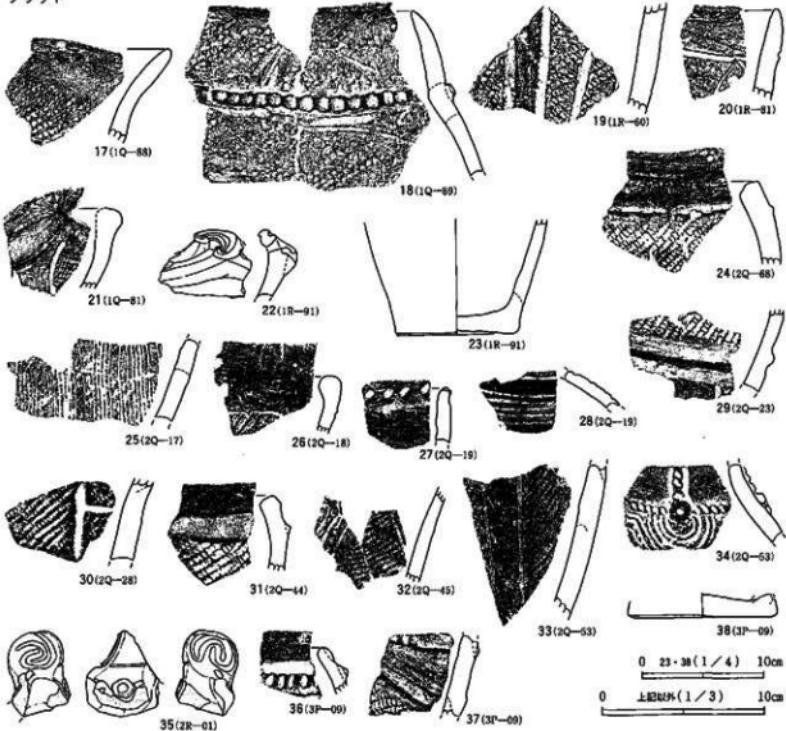
〔出土遺物〕 総量は縄文土器 1,370g、石器・礫 200g である。これらの遺物は SHO01 出土と記録されているが、どのピットから出土したかは不明である。中期末から後期前葉まで出土している。15～17 は称名寺 I 式の同一個体で、部位に対応するよう上下に並べたものである。焼成がやや悪く器表面が剥落している。

## グリッド (第31図、図版8)

グリッド番号	縄文土器	石器・礫	グリッド番号	縄文土器	石器・礫	グリッド番号	縄文土器	石器・礫
1Q - 69	80	590	1R - 90	20	70	2Q - 29	135	160
1Q - 78	0	210	1R - 91	620	460	2Q - 34	68	0
1Q - 79	130	200	2Q - 07	10	460	2Q - 36	390	427
1Q - 88	80	230	2Q - 08	70	0	2Q - 37	413	512
1Q - 89	500	140	2Q - 09	130	0	2Q - 42	203	40
1Q - 96	290	150	2Q - 14	148	160	2Q - 43	300	282
1Q - 97	170	0	2Q - 16	0	147	2Q - 44	191	320
1Q - 99	120	0	2Q - 17	402	576	2Q - 45	120	170
1R - 50	50	90	2Q - 18	380	245	2Q - 53	707	680
1R - 51	150	550	2Q - 19	210	234	2R - 00	126	53
1R - 60	220	0	2Q - 23	277	800	2R - 01	439	88
1R - 70	80	60	2Q - 24	100	99	2R - 10	88	161
1R - 80	120	250	2Q - 27	110	340	3P - 09	1,390	0
1R - 81	230	280	2Q - 28	400	215			

エリア①の南側とこのエリアは遺物が少ないが、もともと少ないので調査上の理由なのかは不明である。18は器形や口唇部の成型法がやや特異であるが、頸部の紐線文は加曾利B式の方式に則っていることや、遠部第3類との関連も可能性としては考えられるので加曾利B 2式に相当すると考えた。32は外面にススが付着する。35は器表面の摩耗が顕著である。

#### グリッド



第31図 エリア②出土土器(2)

### 3 エリア③

ここはSM001古墳の範囲に当たる。縄文時代にはもちろん古墳は存在していないため古墳の内外でエリア分けする必然性はないが、遺物の出土状況を見ると周溝の外側は比較的少なく内側には大量の出土がみられたため、便宜上古墳の範囲をエリア③と設定し作業を進めた。

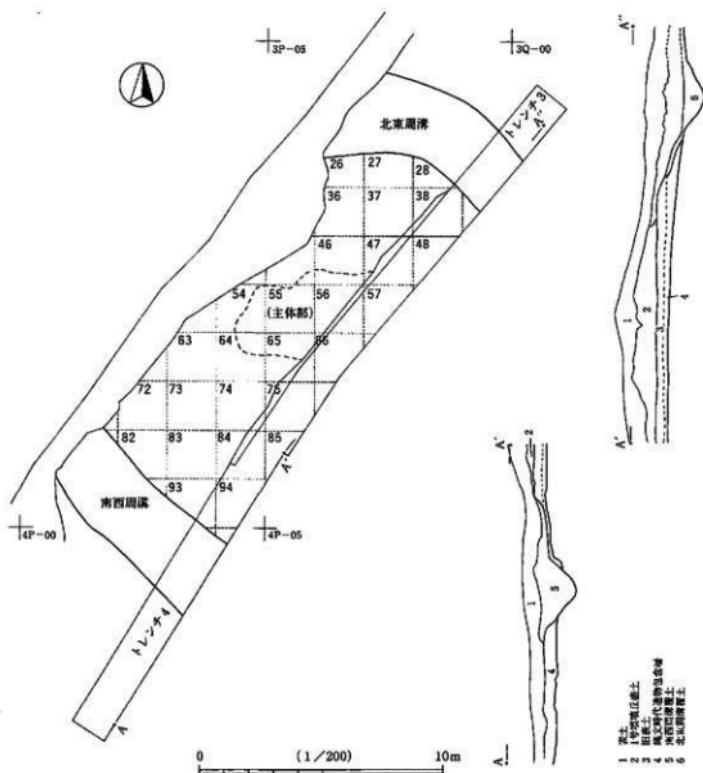
縄文時代の遺物は次の6種類の注記が付されていた。i)グリッド(各小グリッド番号)、ii)墳丘盛土中(SM001MH)、iii)墳頂部(SM001MT)、iv)埋葬施設(SM001SX)、v)南西周溝内(SM001SW)、vi)北東周溝内(SM001NE)。これらの注記が古墳の調査で残された記録のどこを示しているのか理解するのが、整理作業に当たって重要なポイントとなった。第32図は第4節に掲載している古墳の平面図および墳丘・周溝断面図をもとに作成した概況図である。断面図のうち4層が縄文時代の遺物包含層、5層が縄文時代以降古墳築造までに堆積した旧表土ということである。ただし古墳外の土層堆積状況と比べ旧表土のレベルが高すぎる(通常古墳築造後には土圧により表土が沈み込む)など、その認識には疑問も残される。とはいっても現状ではそれを追試する方法はないのでここでは現場の記録に従う。常識的に考えて旧表土は墳丘とは別とみなすはずであり、そこから出土した遺物はグリッド出土として扱うべきであろう。そこでi)のグリッドは4・5層出土遺物と推測した。ii)とiii)は墳丘の裾か頂部かという違いにならうが、具体的にどの位置でどのようにして区別したのか記録は残っていない。従って両者とも2層出土と推測したが、あるいはiii)は1層出土遺物を含んでいるかもしれない。iv)～vi)は平面図・断面図から容易にその位置は推測できる。

以上の状況を考えた上で、ここではある程度プライマリーな状況を保っていると考えられる包含層および旧表土中の遺物(グリッド出土遺物)をまず掲載し、次に墳丘中および周溝内から出土した遺物を掲載することとした。古墳から出土した遺物は基本的に「再堆積」であるため、大形品や重要な遺物のみに限定する。なお、手元に残された記録では遺構は検出されていないが、遺物の出土状況を観察すると旧表土すべてにまんべんなく遺物が散布しているのではなく、明らかに集中している部分とそうでない部分とに分けられる。調査時の所見によると堅穴状のプランも確認されており住居跡が存在した可能性が濃厚である。

グリッド(第33～43図、図版8～11)

グリッド番号	縄文土器	石器・礫	グリッド番号	縄文土器	石器・礫	グリッド番号	縄文土器	石器・礫
3P-36	4,610	10	3P-63	10,080	1,020	3P-82	280	0
3P-45	6,610	2,280	3P-64	5,550	370	3P-83	9,525	510
3P-46	830	20	3P-65	10,410	190	3P-84	7,200	10
3P-54	2,100	0	3P-72	1,270	670	3P-93	6,330	420
3P-55	3,710	610	3P-73	11,310	880	3P-94	1,250	0
3P-56	10,180	290	3P-74	5,860	100			

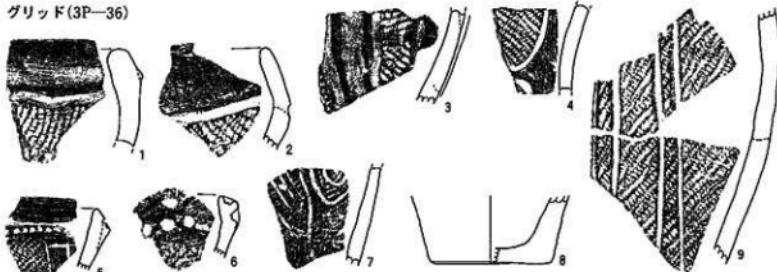
図はグリッド番号順にレイアウトしている。7・16は外面にススが付着する。14は縦位隆起線の口唇側が欠損している。18は部分的に熱を強く受けている。11は分かりにくいが微隆起線上にも縄文が施文される。24は土器片円盤の可能性がある。37は外面にススが付着する。42・43は接合しない同一個体で、器表面の摩耗が顕著でトロトロである。52は脣部上と下とで原体を違える。器表面は熱による劣化が目立つ。55・59・61・77・79は摩耗が顕著である。68・74は外面に炭化物が付着する。72は接合しない同一個体で文様構成を示すためこのようにレイアウトしたが、この個体同士がこの位置関係になるかは不明。



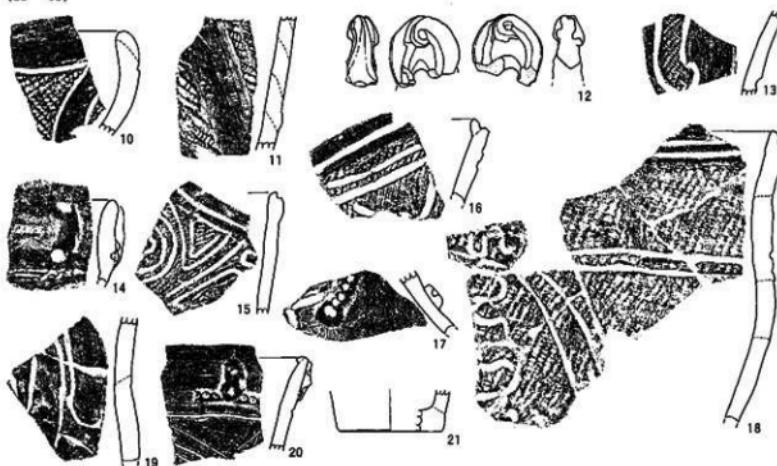
第32図 エリア③概況図

いずれも摩耗が顕著である。90は熱を強く受けている。91・102・108は外面が摩耗する。92は口縁直下にナゾリ状の横位沈線が配される。96は外面にススが付着する。98の下端部は割れ口が研磨されている。埋設されていたものであろう。103は直前段反撓り LLR 繩文である。時期は単節繩文を基本とする後期より複節繩文や0段多条原体を多用する中期と考えるのが妥当であろう。107はかなり大きな個体である。120の底部側は無文である。116と117は胎土や焼成が類似しており同一個体かも知れない。118の胎土には礫が多数混入する。124は丸底であるにもかかわらず底面はほとんど摩耗していない。125・132・135は摩耗が顕著である。136は古墳北東周溝から出土したものであるが、同一個体が3P-73グリッドから出土しているためこの位置に掲載した。134は162と同一個体の可能性がある。144の図示した拓本は全て古墳壇丘中出土で、接合しない同一個体に3P-73グリッド出土品がある。152は分かれにくいが条線に半截竹管を使用する。154は下端欠損部が研磨されており、埋設されていたものであろう。163・169は器表面の剥落が顕著である。167・173・188・195は全体に劣化しており器表面は不鮮明である。177は外面

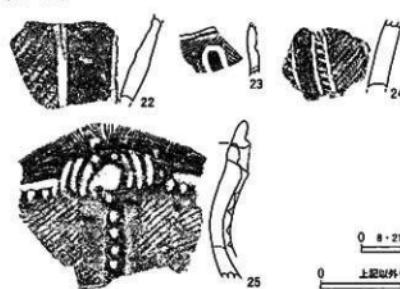
グリッド(3P-36)



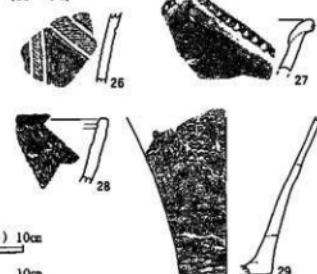
(3P-45)



(3P-46)



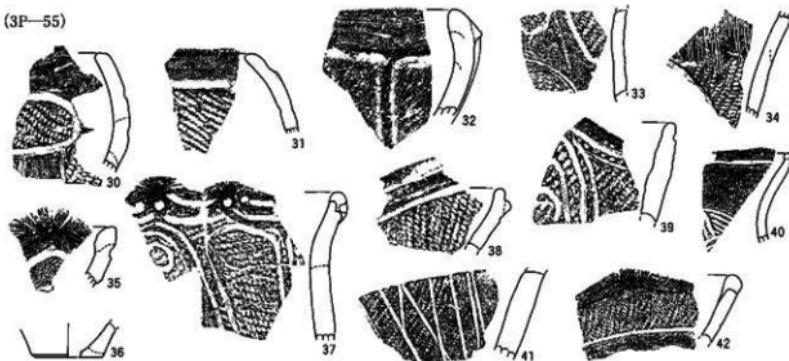
(3P-54)



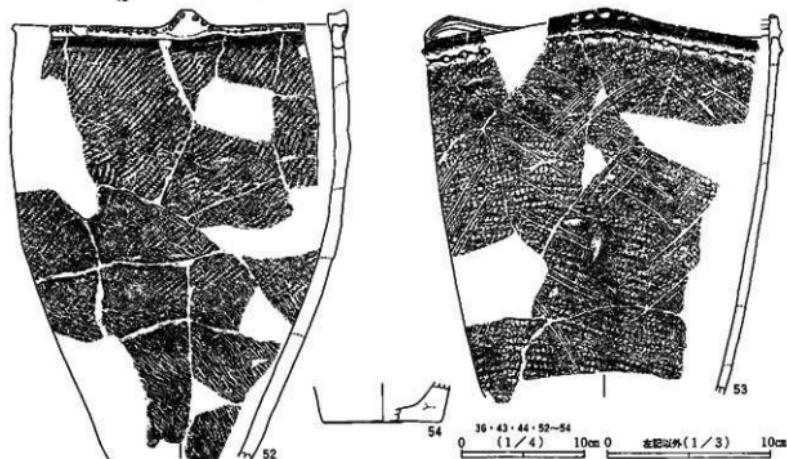
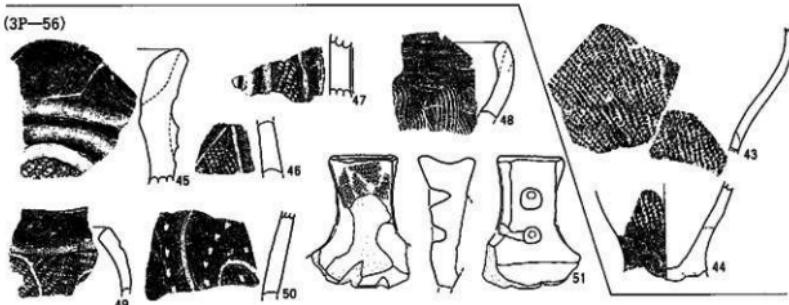
0 8-21-29 (1/4) 10cm  
上記以外 (1/3) 10cm

第33図 エリア③出土土器(1)

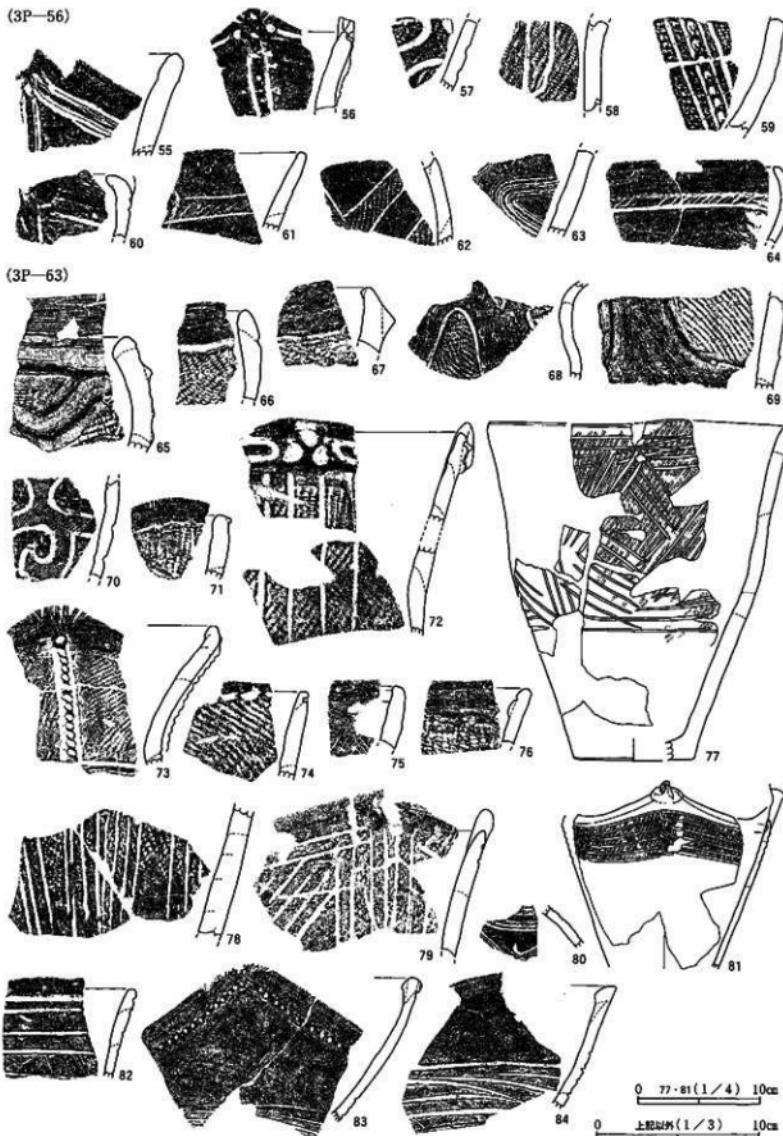
(3P-55)



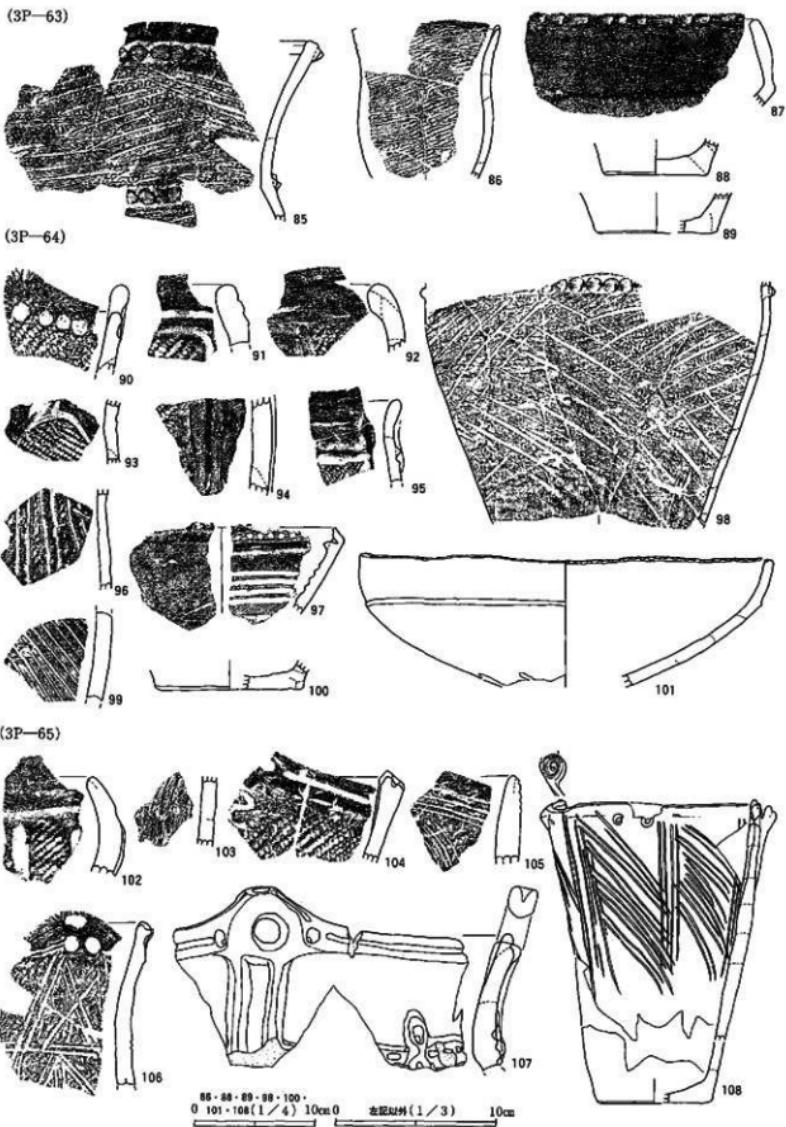
(3P-56)



第34図 エリア③出土土器(2)

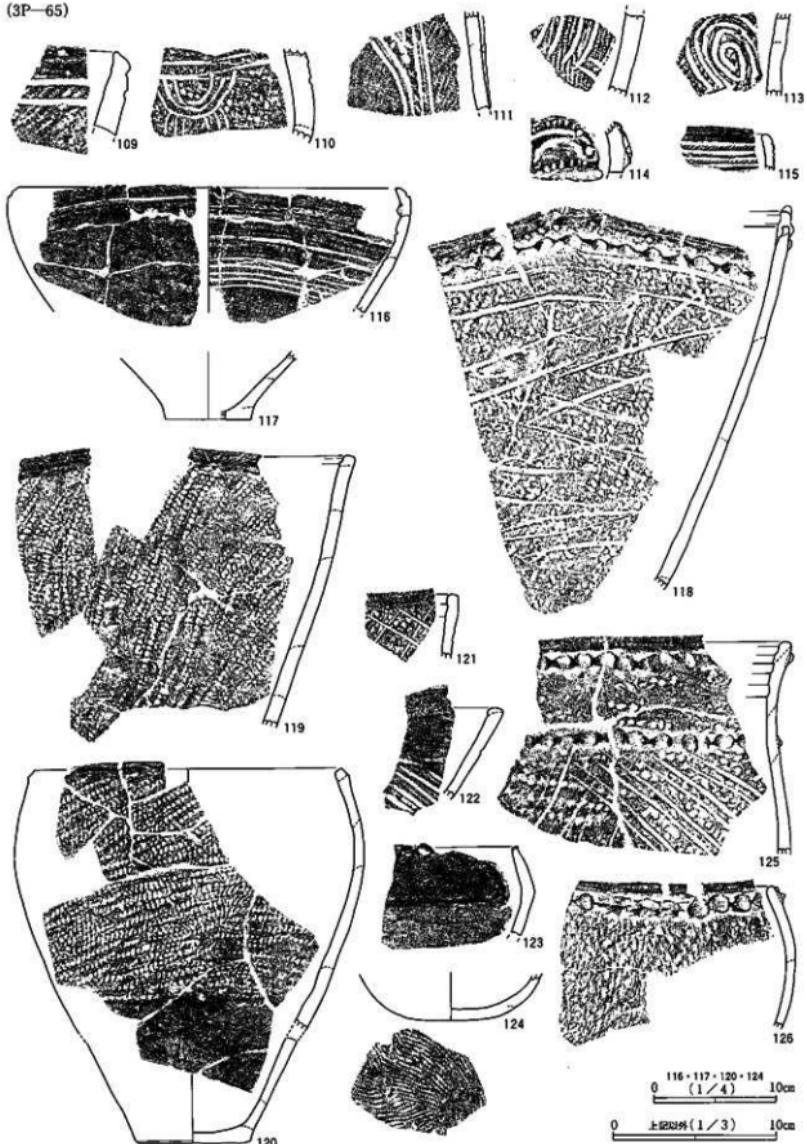


第35図 エリア③出土土器(3)



第36図 エリア③出土土器(4)

(3P-65)

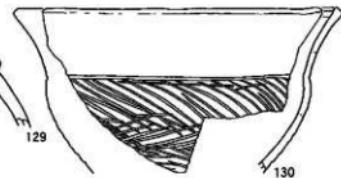


第37図 エリア③出土土器(5)

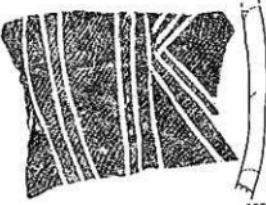
(3P—72)



(3P—73)



130



135



136



137



133



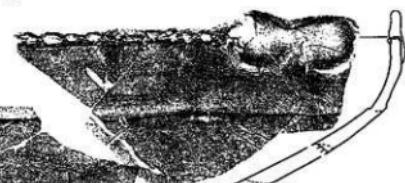
139



140



141



138



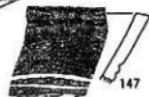
142



143



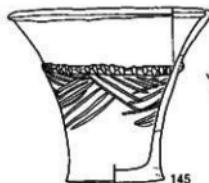
144



147



148



145

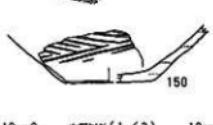


146



149

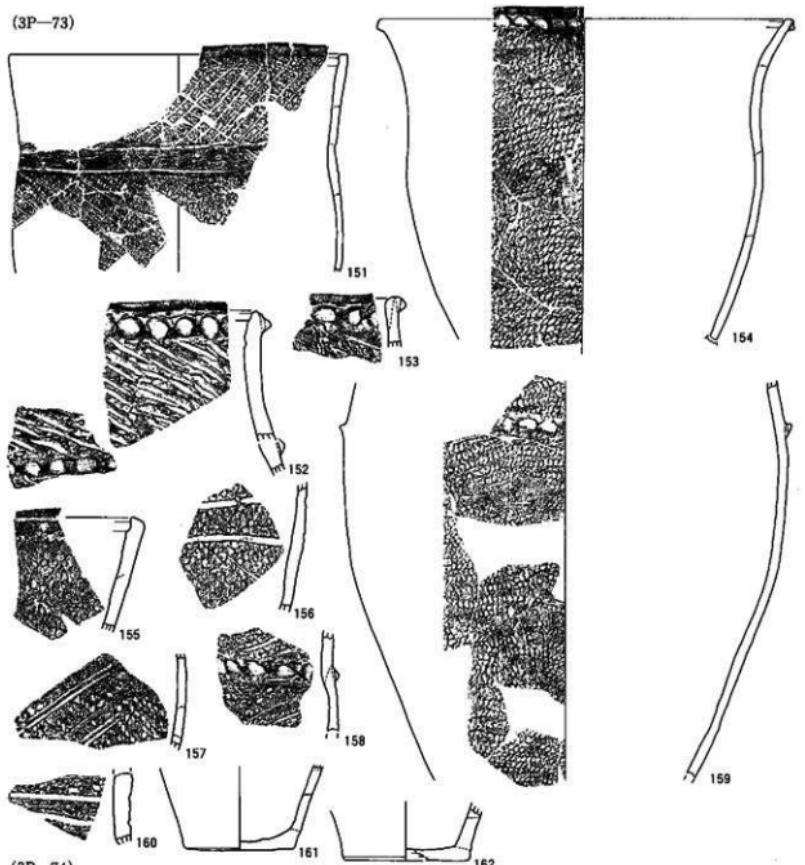
0 130 · 145 · 146 · 150  
(1 / 4) 10cm 0



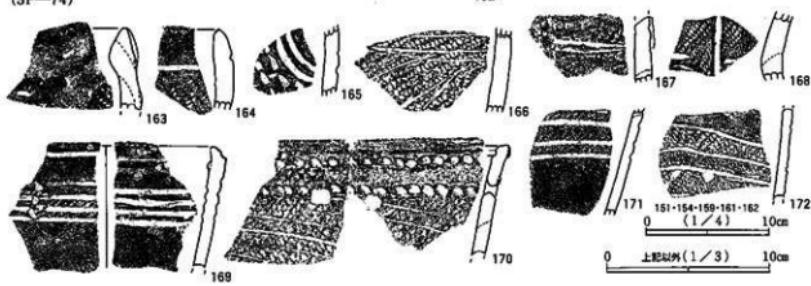
生記以外(1 / 3) 10cm

第38図 エリア③出土土器(6)

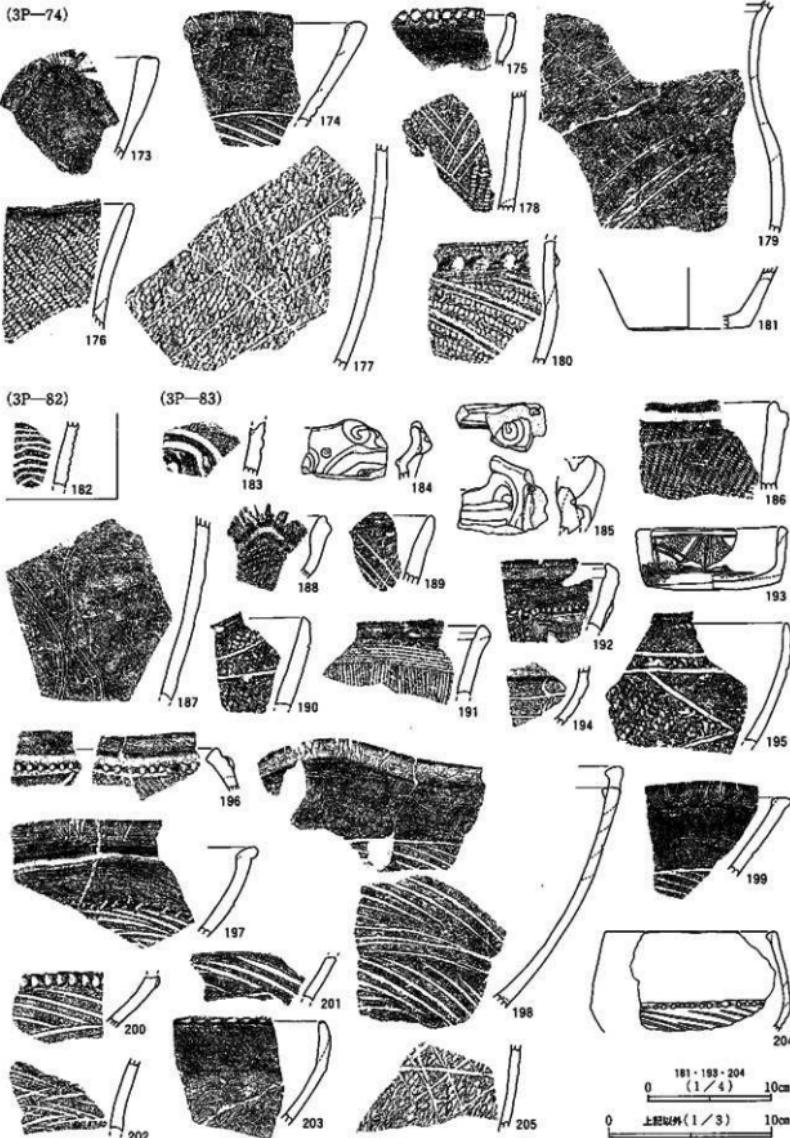
(3P—73)



(3P—74)

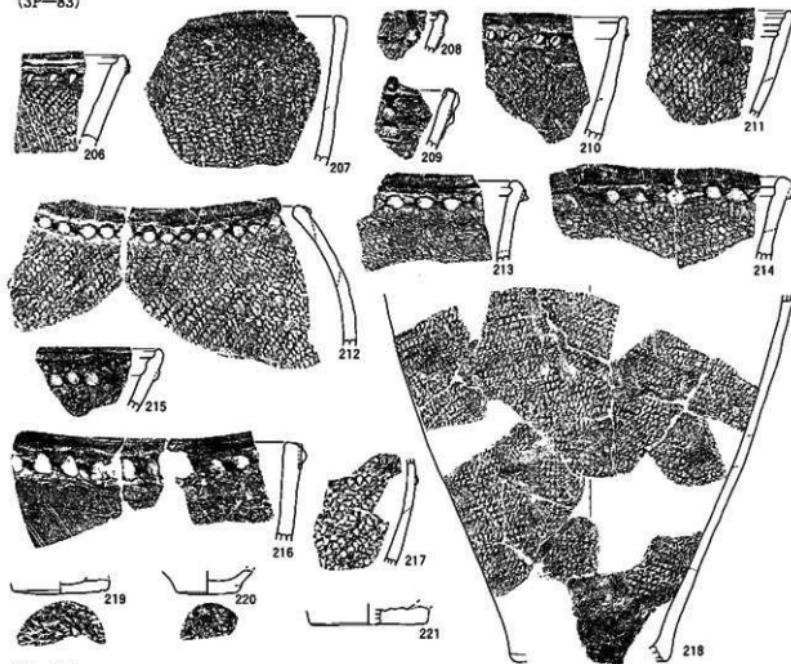


第39図 エリア③出土土器(7)

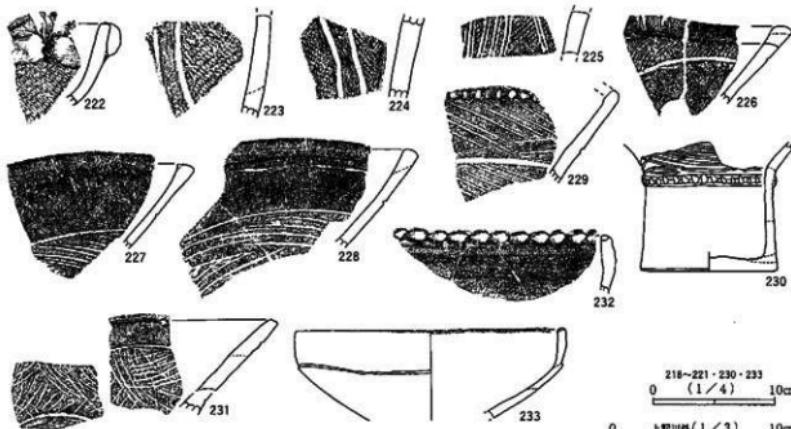


第40図 エリア③出土土器(8)

(3P-83)



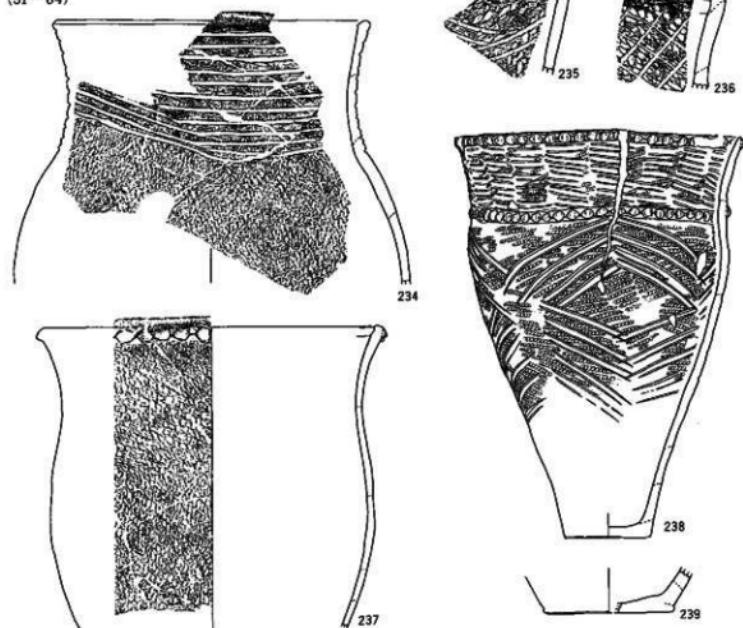
(3P-84)



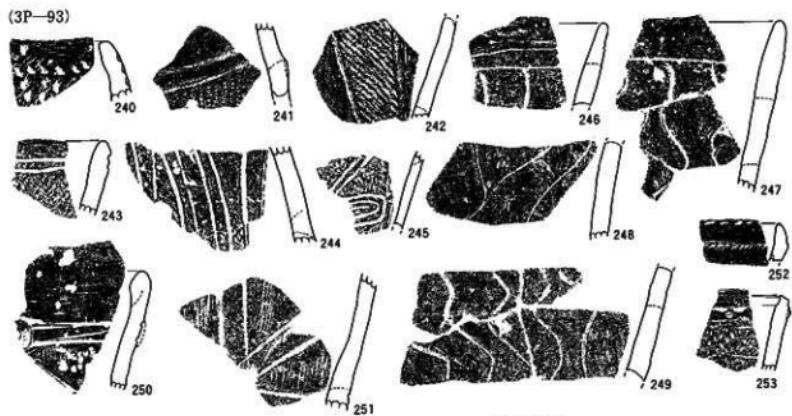
第41図 エリア③出土土器(9)

218~221・230・233  
0 (1/4) 10cm  
上記以外(1/3) 10cm

(3P-84)

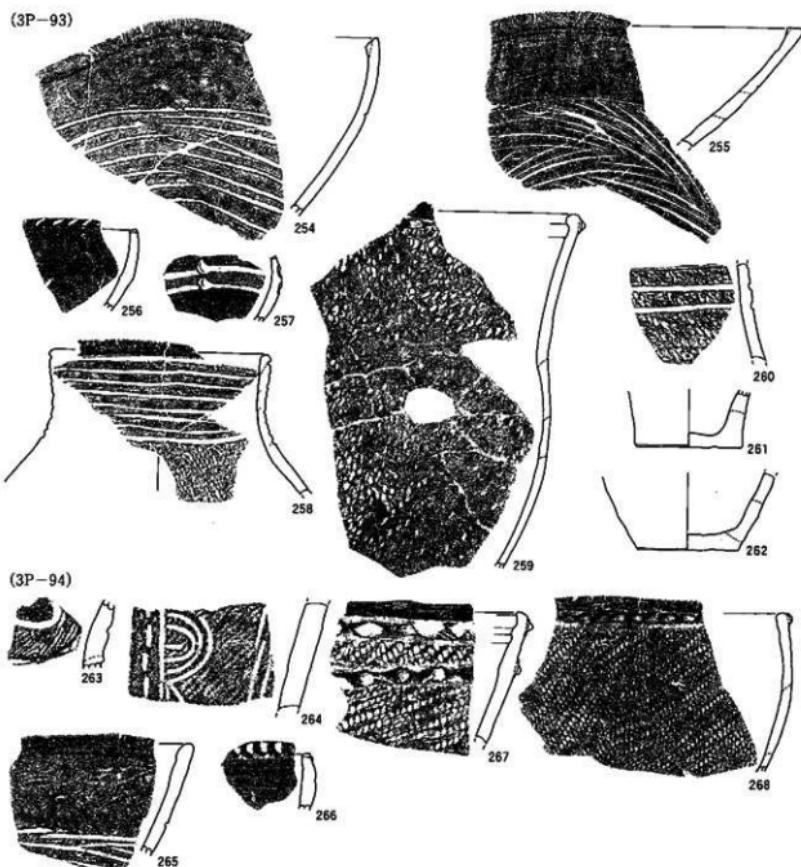


(3P-93)

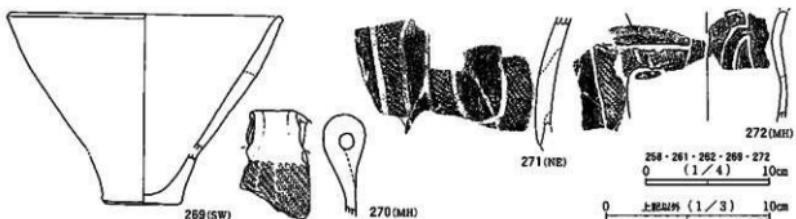


0 234・237・239  
(1/4) 10cm 0 実地以外(1/3) 10cm

第42図 エリア③出土土器(10)

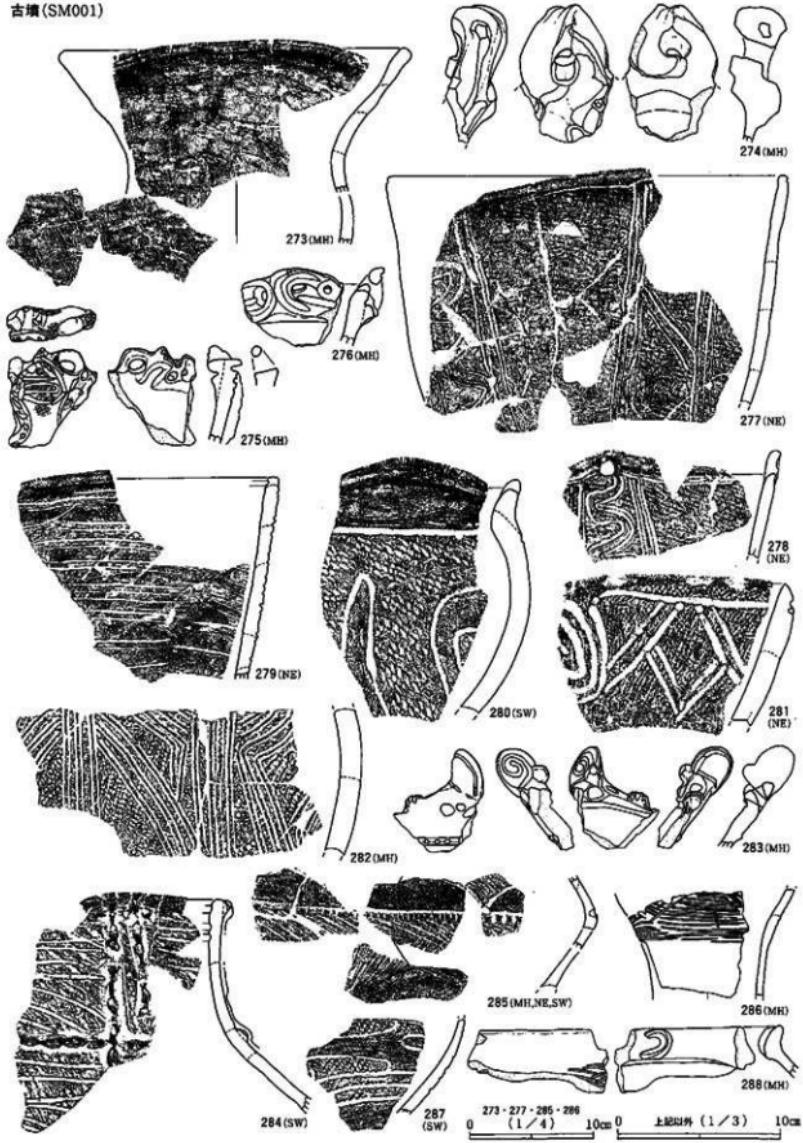


古墳(SM001)



第43図 エリア③出土土器(11)

古墳(SM001)



第44図 エリア③出土土器(12)

にススが付着する。196の図示した拓本は全て古墳墳丘中出土で、接合しない同一個体に3P - 83グリッド出土品がある。207は外面が摩耗している。216の口縁部は紐線文と呼ぶにはかなり大振りな隆帯が貼り付けられており、胴部も地文に繩文が施されない。在地の土器とはかなり違った印象を受ける。218はかろうじて底部が残存するが遺存度が極めて低いため形状の復元は見送った。下半分は熱による劣化が顕著である。231は接合しないが、対向弧線文の位置から上下の沈線間を約4.5cmとして復元した。244は外面の摩耗が目立つ。246 ~ 249は同一個体で、全体に焼成甘く器表面が剥落している。250と251も同一個体で、やはり器表面の剥落が目立つ。256は外面にススが付着する。259・263・268は全体に摩耗している。

#### 古墳出土（第43・44図）

出土した遺物量を場所ごとに示しておく（単位g）。墳丘盛土中（M H）=繩文土器119,631：石器・礫15,331（以下同）、墳頂部（M T）=7,405 : 217、埋葬施設（S X）=1,905 : 0、南西周溝内（S W）=55,878 : 15,336、北東周溝内（N E）=20,566 : 5,521、全体一括=0 : 43。全部合わせると200kgを超える量である。

269は胎土にスコリアを多量に含み、内外面ともケズリ調整が目立つ無文の鉢形土器で、底部の形状から中期末とみなした。271は全体に摩耗しておりトロトロである。273は器形から称名寺期とみなしたが断定は出来ない。274は網取式古段階にみられる鉤文をモチーフにした把手であろう。277・278は同一個体で、277左端の上は278のような意匠になると推察される。281は鉢形土器で下端の欠損部は底部直上でであろう。285はやや小振りであるが当遺跡では稀少なソロバン玉形を呈する土器である。下半分の沈線は刃先の鋭いナイフのような工具を使用している。287も当遺跡では稀少な磨消繩文系の浅鉢である。

#### 4 エリア④

エリア④からは竪穴住居跡5軒、土坑4基、ピット群1基が検出された。なお、S I O 2 0 は調査時S K 0 2 0として調査されたものだが、遺構の規模など他の住居跡と分別する必然性は認められなかつたため、竪穴住居跡とした。S H O O 3 のピットには規則性はみられないが、P 19からは埋設された土器が検出されたほか、周辺からは器形復元ができる時期的にもまとまっている土器群が出土しており、竪穴住居跡の柱穴である可能性が指摘できよう。このP 19についてはS H O O 3全体とは別に詳細に記載しておく。

#### S I O 1 8（第45・49図、図版2・12）

〔位置〕 4P - 31・32・41・42

〔標高〕 75.0m

〔他遺構との重複関係〕なし。

〔形状と規模〕 楕円形。擾乱が著しいため規模は不明。

〔断面形状〕 逆台形。

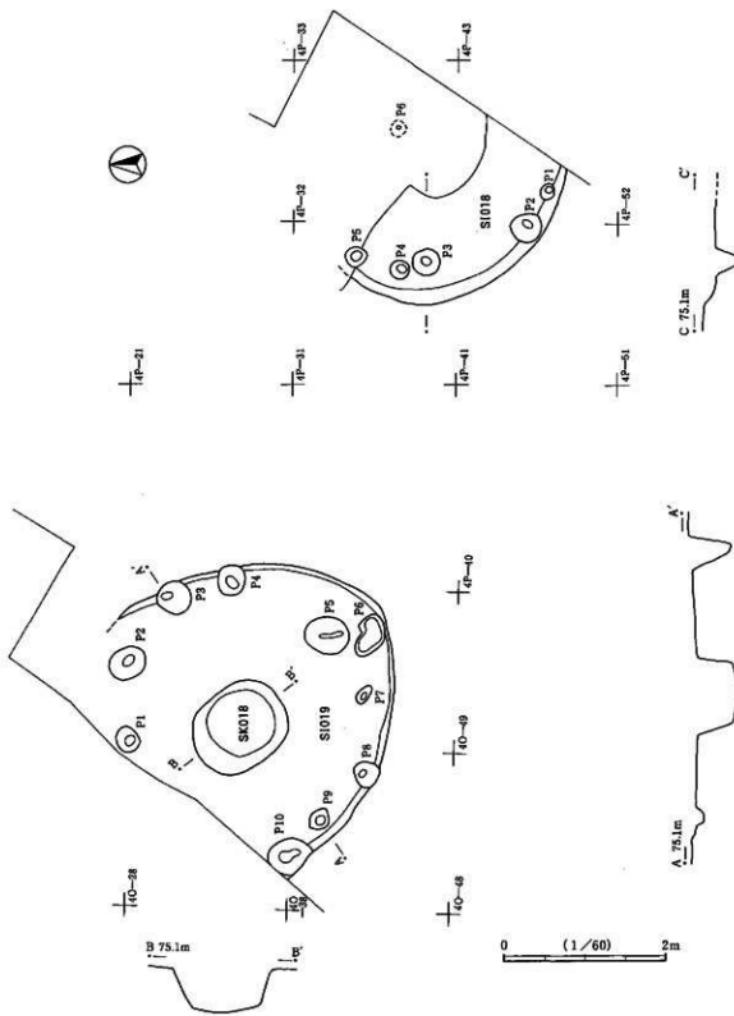
〔床面〕 ほぼ平坦である。硬化面は調査範囲から検出されず。

〔炉〕 調査範囲からは検出されず。

〔ピット〕 6基検出された。5基は壁際に並ぶ。P 6は擾乱中から坑底のみ検出。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6
直径	20	38	35	27	(28)	(20)
深さ	17	14	26	19	12	(11)

〔出土遺物〕 総量は繩文土器1,320g、石器・礫740gである。中期末から後期初頭が主体である。12と13は同一個体である。14の把手はこの時期にしてはやや異質で混入品かもしれない。



第45図 エリア④の遺構(SI018・019、SK018)

S I O 1 9 (第45・49図、図版2・12)

〔位 置〕 40-18・19・28・29・38・39、4P-20・30

〔標 高〕 74.7m

〔他遺構との重複関係〕 SKO18と切り合うが新旧不明。

〔形状と規模〕 橢円形。長軸推定500cm×短軸375cm×深さ4cm。

〔断面形状〕 逆台形。北東側の壁はほとんど残存せず。

〔床面〕 ほぼ平坦である。硬化面は調査範囲から検出されず。

〔炉〕 調査範囲からは検出されず。

〔ピット〕 10基検出された。8基は壁際に並ぶ。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
直径・長軸	31	46	44	38	55	58	26	22	24	49
短軸	—	—	—	—	—	36	13	—	—	—
深さ	13	19	50	15	25	10	10	13	28	21

〔出土遺物〕 総量は縄文土器790g、石器・礫17gである。加曾利E4式と堀之内1式が混在する。16は外面にススが付着する。18は区画された沈線内を丁寧に磨消しており、網取系土器の可能性もある。

SKO18 (第45・49図、図版2・12)

〔位置〕 40-28-29

〔標高〕 75.0m

〔他遺構との重複関係〕 SI019と切り合うが新旧不明。

〔形状と規模〕 橢円形。長軸125cm×短軸100cm×深さ53cm。

〔断面形状〕 逆台形。

〔床面〕 なだらかに窪む。

〔出土遺物〕 縄文土器が390g出土した。圓化した遺物はいずれも堀之内1式である。

SI020 (第46・50・51図、図版2・12)

〔位置〕 40-46・47・48・56・57・58・66・67・68

〔標高〕 75.1m

〔他遺構との重複関係〕 なし。

〔形状と規模〕 四角長方形。長軸440cm×短軸380cm×深さ35cm。

〔断面形状と覆土〕 皿形。壁際はローム粒を多量に含む黒褐色土で、中央部に土器を多量に含んだ黒色土がレンズ状に堆積する。

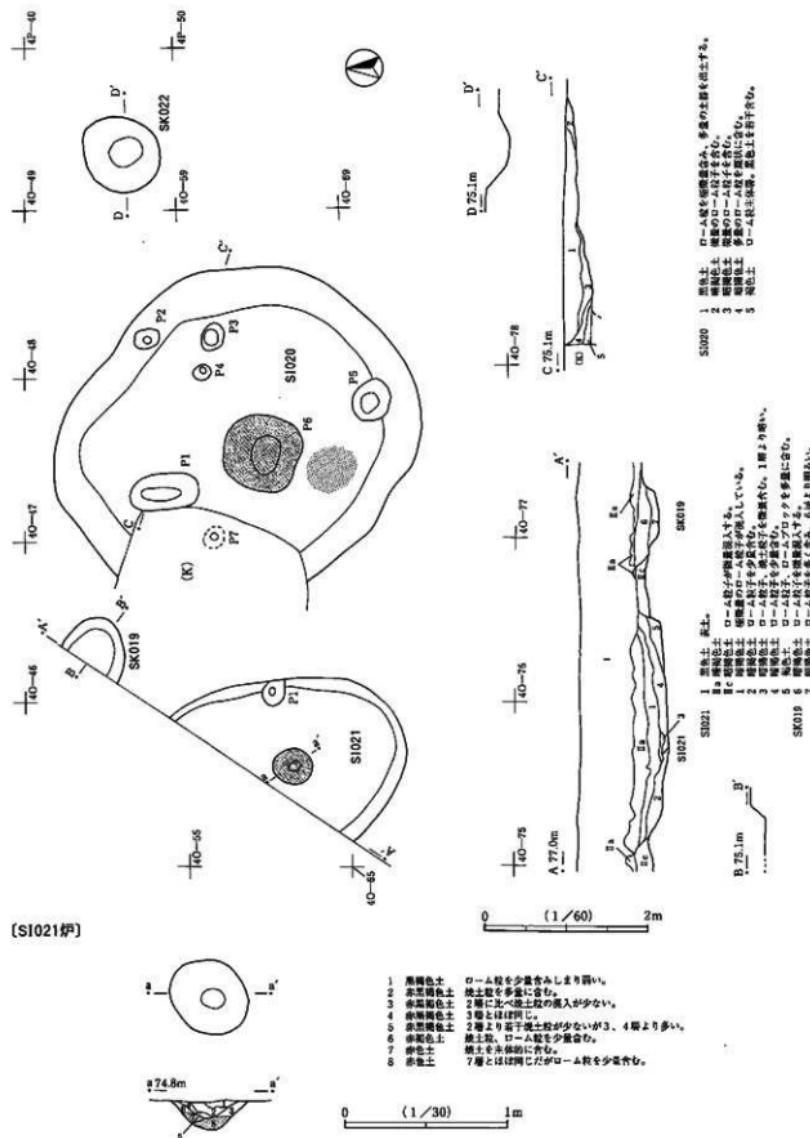
〔床面〕 凸凹あり中央部が窪む。硬化面は検出されず。

〔炉〕 燃土を多量に含むピットが中央にあり。炉の可能性があるが詳細不明。

〔ピット〕 7基検出された。中央のピットは燃土を含む。1基は擾乱中から坑底のみ検出。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
直径・長軸	85	31	36	21	51	97	(30)
短軸	44	—	—	—	—	—	—
深さ	36	9	8	20	17	8	(18)

〔出土遺物〕 遺物は多く縄文土器17,800g、石器・礫2,257gである。加曾利E3式から加曾利B2式まで混在するが、主体をなすのは加曾利E3式である。45の上端部は被熱が顕著であり、炉体土器であった可能性が強い。28・30・35・40・43・63・68は外面にススが付着する。31・44は全体にもろく器表面の剥落が顕著である。50と51は器形や文様構成がよく似るが胎土がかなり異なるため別個体とした。62は外面に炭化物が多量に付着しており文様が隠されるほどである。



第46図 エリア④の遺構(SI020・021, SK019・022)

### S I O 2 1 (第 46・51 図、図版 2・12)

〔位 置〕 40 - 45・46・55・56・65・66

〔標 高〕 74.8m

〔他遺構との重複関係〕 なし。

〔形状と規模〕 楕円形。長軸推定 350cm × 短軸推定 240cm × 深さ 40cm。

〔断面形状と覆土〕 逆台形。壁際にローム粒子・ブロックを多量に含む褐色土が堆積するほかは、ローム粒子を少量含む暗褐色土がレンズ状に堆積する。II 層が住居跡覆土を覆っている。

〔床 面〕 ゆるやかに窪む。硬化面は調査範囲から検出されず。

〔 炉 〕 長軸 51cm × 短軸 45cm × 深さ 18cm。底部に焼土層が堆積する。

〔 ピット 〕 1 基のみ検出された。直径 30cm × 深さ 32cm である。

〔出土遺物〕 総量は繩文土器 540g、石器・礫 1,140g である。加曾利 E 3 式～E 4 式が出土している。72・73 は不明瞭であるが口縁下に横位のナゾリ状沈線があり、中期末とみなした。76 は外面にススが付着する。

### S K O 1 9 (第 46・51 図、図版 2・12)

〔位 置〕 40 - 46

〔標 高〕 74.8m

〔他遺構との重複関係〕 なし。

〔形状と規模〕 楕円形。長軸推定 120cm × 短軸 80cm × 深さ 17cm。

〔断面形状と覆土〕 逆台形。ローム粒子を少量含む暗褐色土が水平堆積する。

〔床 面〕 ほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 繩文土器が 1,561g 出土した。加曾利 E 3 式が主体であるが堀之内 1 式も出土する。86 は縦位区画の磨消繩文帯を持つもので綱取系土器であろうか。

### S K O 2 2 (第 46 図、図版 3)

〔位 置〕 40 - 49

〔標 高〕 75.0m

〔他遺構との重複関係〕 なし。

〔形状と規模〕 楕円形。長軸 100cm × 短軸 92cm × 深さ 27cm。

〔断面形状〕 楠形。

〔床 面〕 なだらかに窪む。

〔出土遺物〕 なし。

### S I O 1 7 (第 47・52 図、図版 3・12・13)

〔位 置〕 40 - 79・88・89・99、4P - 70・80

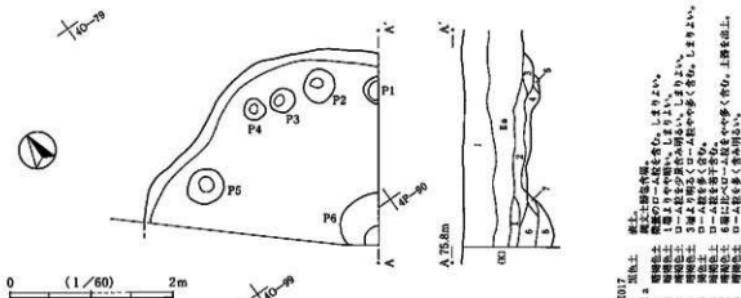
〔標 高〕 75.1m

〔他遺構との重複関係〕 なし。

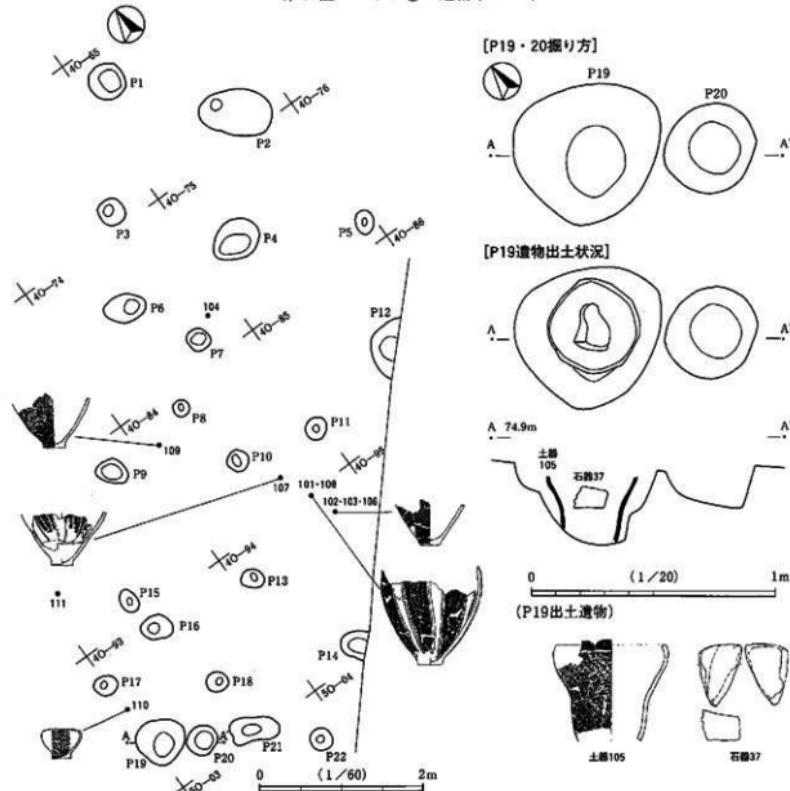
〔形状と規模〕 不整円形。3/4 以上破壊されているため平面規模は不明。深さ 20cm。

〔断面形状と覆土〕 不明。壁はなだらかに立ち上がっている。床面直上にローム粒子を多量に含む褐色土が堆積し、上部にローム粒子の少ない暗褐色土が水平堆積する。

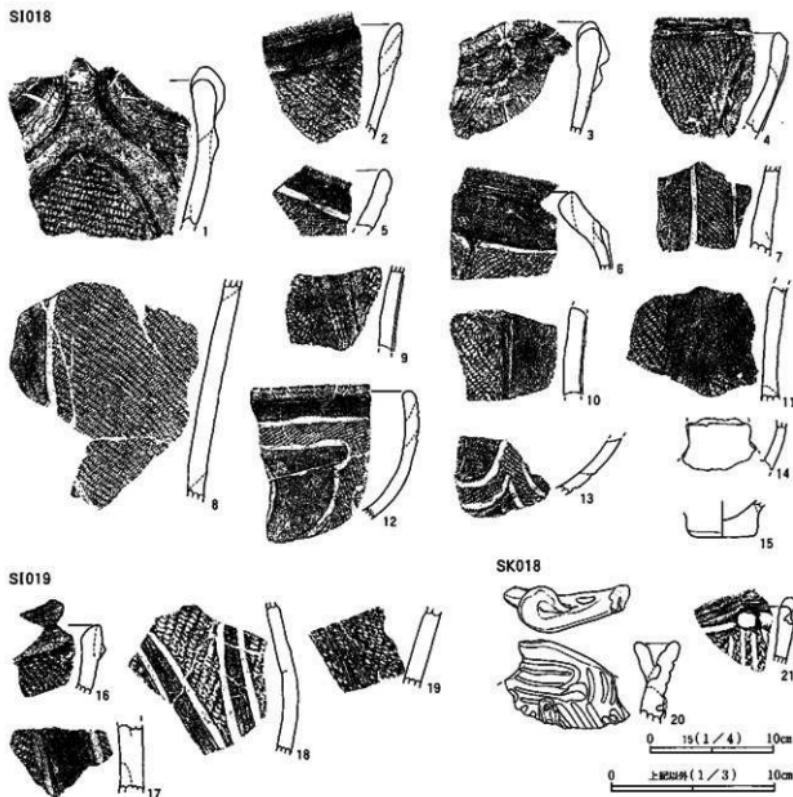
〔床 面〕 やや凸凹あり。硬化面は調査範囲から検出されず。



第47図 エリア④の遺構(SI017)



第48図 エリア④の遺構(SH003)



第49図 エリア④出土土器(1)

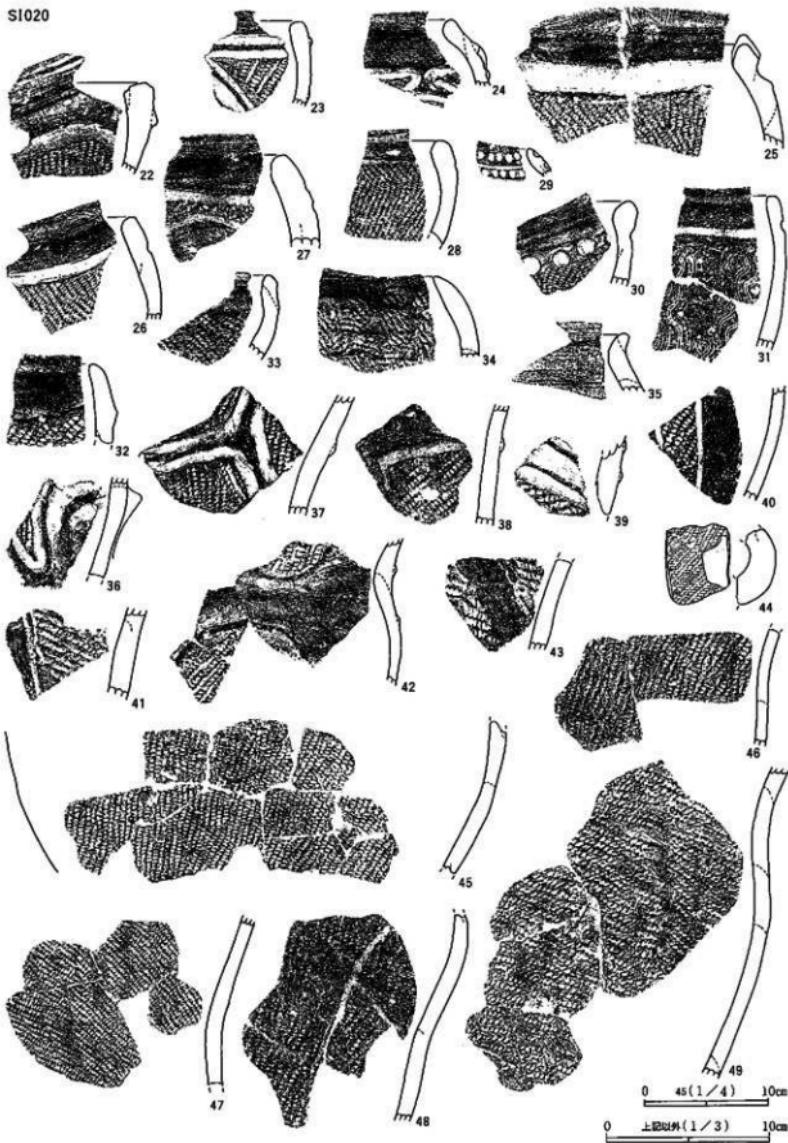
[ 炉 ] 調査範囲からは検出されず。

[ ピット ] 6基検出された。うち5基は壁際に位置する。中央のP6は炉であってもおかしくないが、覆土から焼土などは検出されていない。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6
直径	(33)	40	30	28	44	(68)
深さ	7	41	17	41	63	28

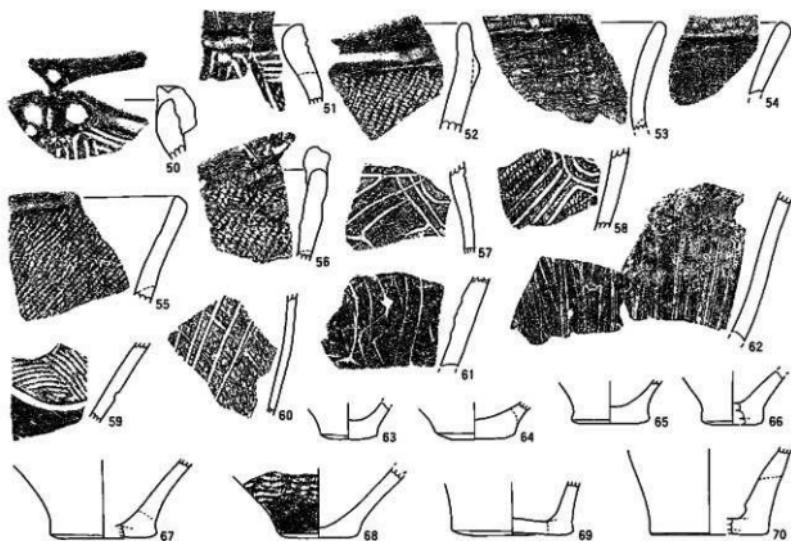
[出土遺物] 総量は繩文土器5,216g、石器・礫4gである。堀之内1式を主体として加曾利E3式、E4式が出土する。87は接合しない胴部と底部を図上で復元したもの。胴部は熱による劣化が顕著である。88も熱を受けており下半分は劣化している。94は厚みがかなり変化する。網取系土器に見られる口縁部隆起区画を持つ深鉢形土器に類するものとみなした。

SI020

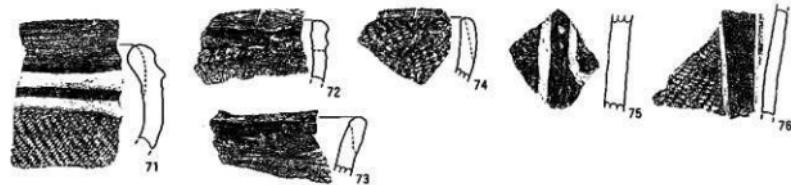


第50図 エリア④出土土器(2)

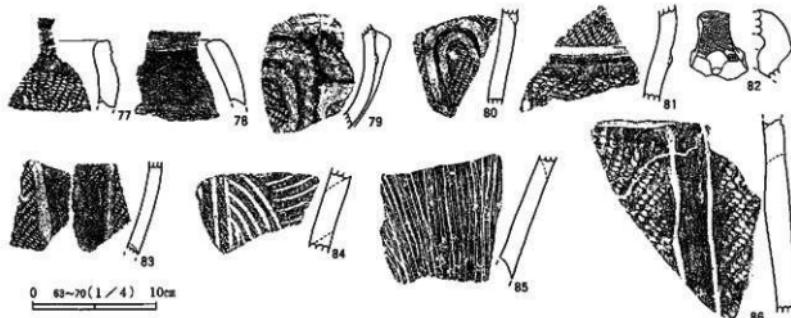
SI020



SI021



SK019

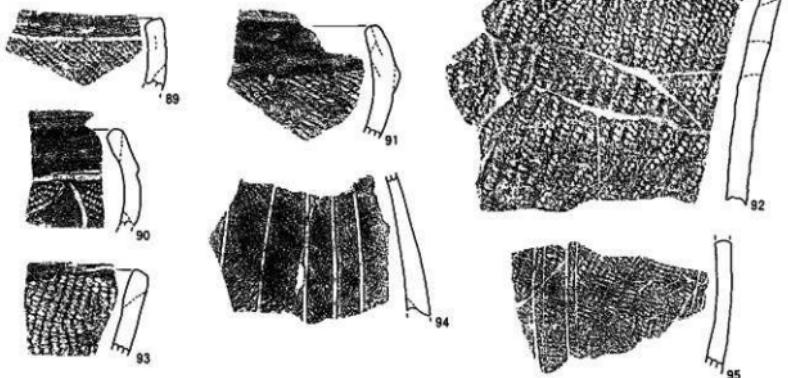
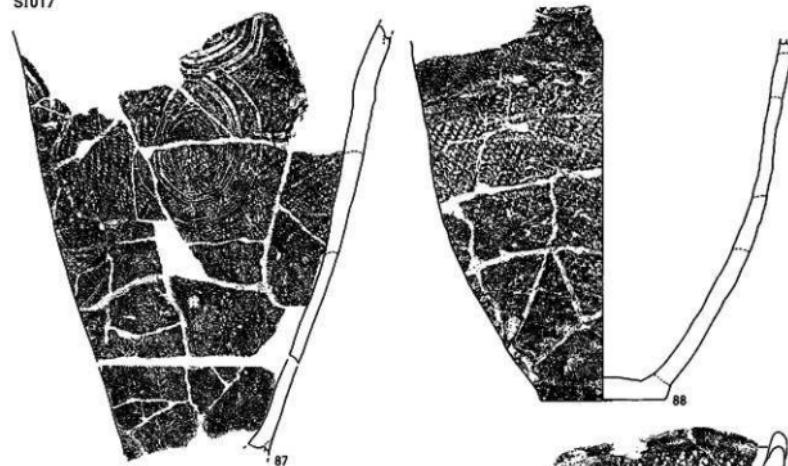


0 63~70(1/4) 10cm

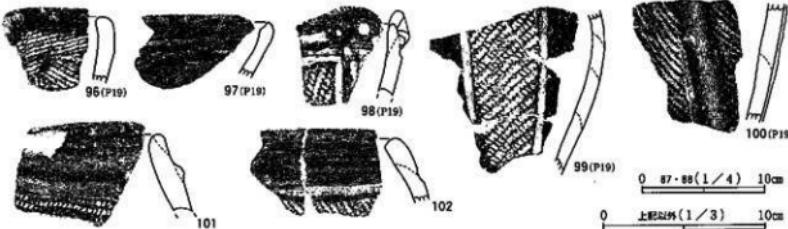
0 上記以外(1/3) 10cm

第51図 エリア④出土土器(3)

SI017



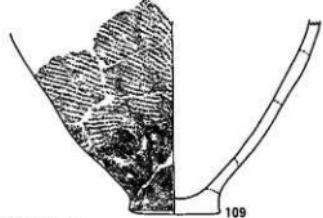
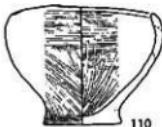
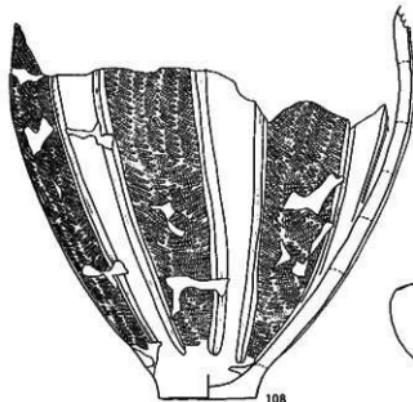
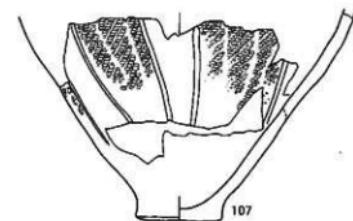
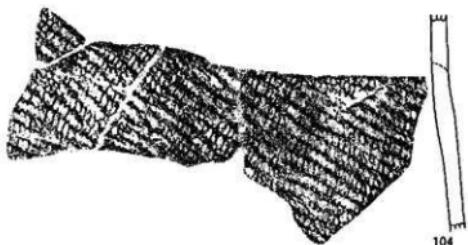
SH003



0 87-88(1/4) 10cm  
0 上記以外(1/3) 10cm

第52図 エリア④出土土器(4)

SH003

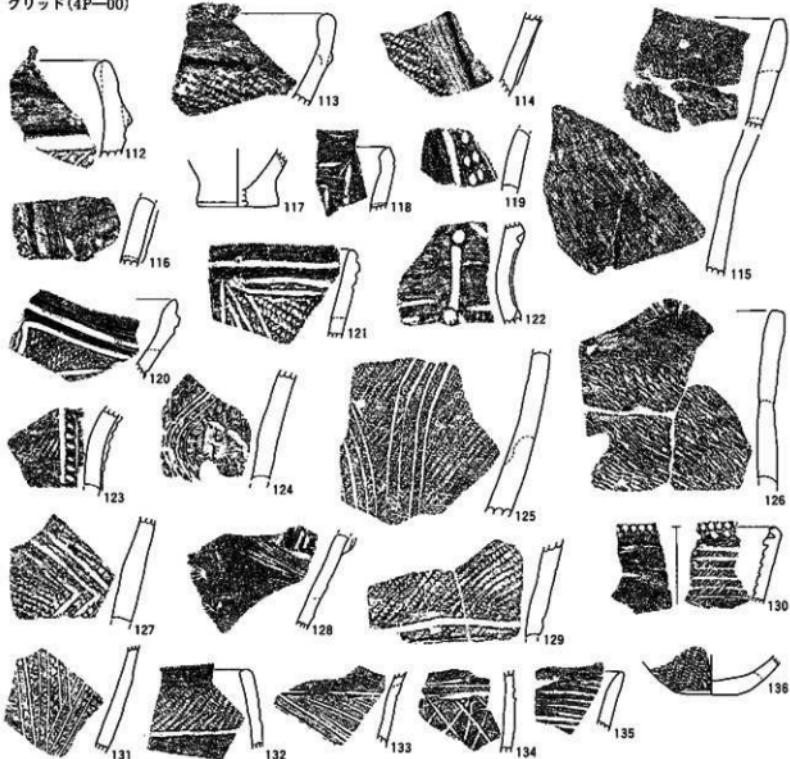


0 105-111 (1/4) 10cm

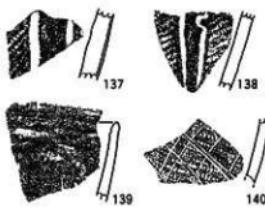
0 103 + 104 (1/3) 10cm

第53図 エリア④出土土器(5)

グリッド(4P-00)



(4P-40)



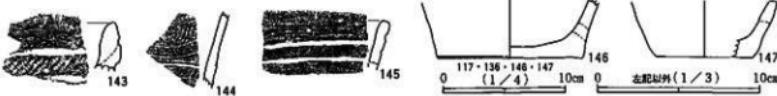
(4P-60)



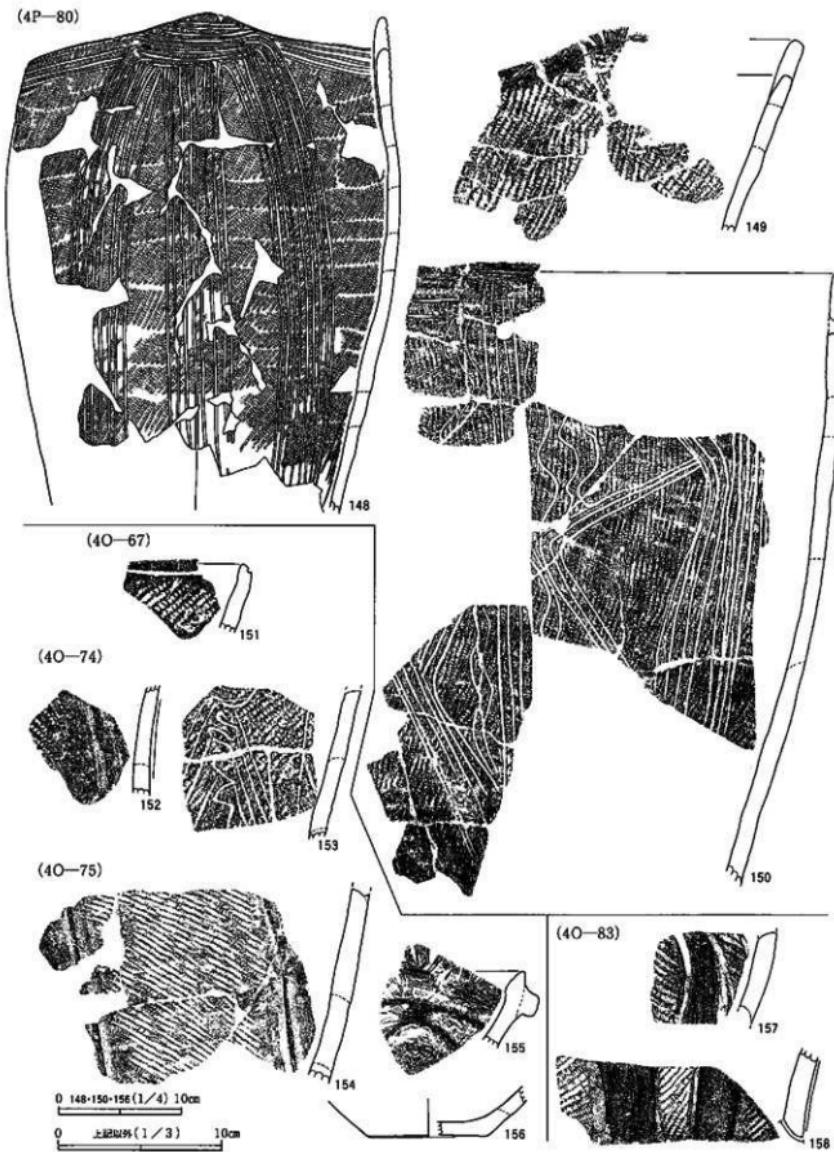
(4P-61)



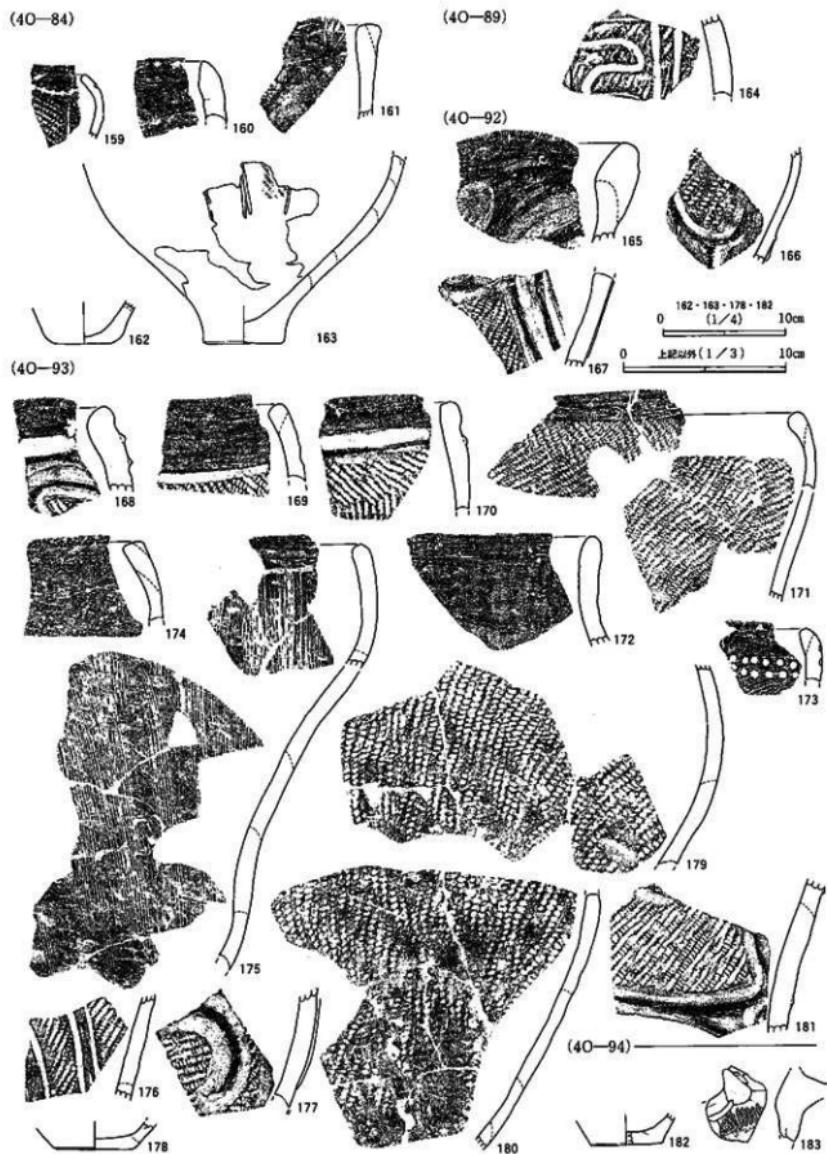
(4P-80)



第54図 エリア④出土土器(6)



第55図 エリア④出土土器(7)



第56図 エリア④出土土器(8)

## SHO03 (第48・52・53図、図版3・11~13)

〔位 置〕 40-64・65・74・75・83・84・85・92・93・94、50-03・04

〔標 高〕 74.8m

〔他造構との重複関係〕なし。

〔形状と規模〕 ピットは全部で22基検出されている。配置に規則性は見られないが、南西側のP19には土器が埋設されている。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11
形状	円形	楕円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	円形	楕円形	円形	円形
長軸	43	90	33	62	30	53	28	20	40	28	28
短軸	43	60	32	50	23	35	26	20	30	28	28
深さ	15	56	29	24	16	26	11	15	20	5	22
ピット番号	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P20	P21	P22	
形状	楕円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	
長軸	76	28	(54)	30	40	28	25	38	58	27	
短軸	(66)	25	34	22	30	24	23	36	30		
深さ	6	15	16	12	15	12	29	18	32	27	

〔出土遺物〕 総量は縄文土器3,164g、石器・礫は44gである(P19を除く)。ただしピット覆土中から出土したものはごく少なくピット2から縄文土器30gと石器・礫0.5gが、ピット4から石器・礫5.5gが出土したのみで、他は包含層出土である。加曾利E3式~E4式を主体とする。104・106は全体に熱を受けている。

## SHO03-P19 (第48・52・53図、図版3・11・13)

〔位 置〕 40-92・93

〔標 高〕 74.8m

〔他造構との重複関係〕なし。

〔形状と規模〕 楕円形。長軸60cm×短軸54cm×深さ35cm。

〔断面形状〕 橢鉢形。

〔床 面〕 崩む。

〔出土遺物〕 遺物総量は縄文土器5,100g、石器・礫4,280gである。105は埋設されていた土器である。胴部はほぼ全周するが口縁部は遺存率が悪い。口縁部は熱を顯著に受けており炉体として使用された可能性が高い。その他出土した土器のうち98は堀之内1式、97は無文であるが後期に属するものと考えられる。

グリッド (第54~56図、図版12)

グリッド番号	縄文土器	石器・礫	グリッド番号	縄文土器	石器・礫	グリッド番号	縄文土器	石器・礫
4P-00	11,712	0	40-67	280	0	40-89	532	0
4P-40	1,300	0	40-74	1,007	13	40-92	1,820	290
4P-60	320	0	40-75	1,996	34	40-93	4,080	2,230
4P-61	350	293	40-83	1,100	500	40-94	540	0
4P-70	82	0	40-84	2,070	114	50-03	120	0
4P-80	9,910	0	40-85	320	0	50-04	70	0
40-57	0	1,090						

エリア③に近い4P-00グリッドとS I 0 1 7住居跡のある4P-80グリッドから多量に出土しているのが目を引く。40-93グリッド出土遺物はSH003との関連を考慮する必要があろう。123・141・155は器面の摩耗が顕著である。135は浅い条線が施されるもので、加曾利B3式以降であろう。当遺跡では極めて少ない。142は太い沈線を押し引き状に描く。144は細くて鋭い棒状工具を使用する。壙之内2式とみなしたが、後期末の東北系土器の可能性もある。148は波状口縁であるが単位が不明であり残された破片も不十分で復元にかなり試行錯誤した。図は網取II式終末期の資料を基にしたもので、解釈の一例である。150は極めて大きな個体で接合しない同一個体が更に数点ある。それでも器形復元には至らなかった。158は下側破断面に研磨が加えられる。179と180は同一個体であろう。

## 5 エリア⑤

エリア⑥からは土坑1基、ピット群1基が検出された。配置に規則性は認められず、竪穴住居跡の柱穴の可能性は低い。また、ピット群中のP7・8・10は浅く平面皿形を呈しており、土坑と類似する遺構とみられる。

### SKO15 (第57図、図版3)

[位 置] 50-70-71

[標 高] 74.4m

[他遺構との重複関係] なし。

[形状と規模] 柄円形。長軸 85cm × 短軸 70cm × 深さ 20cm。

[断面形状] 皿形。

[床 面] なだらかに壅む。

[出土遺物] なし。

### SH002 (第57・58図、図版3・13)

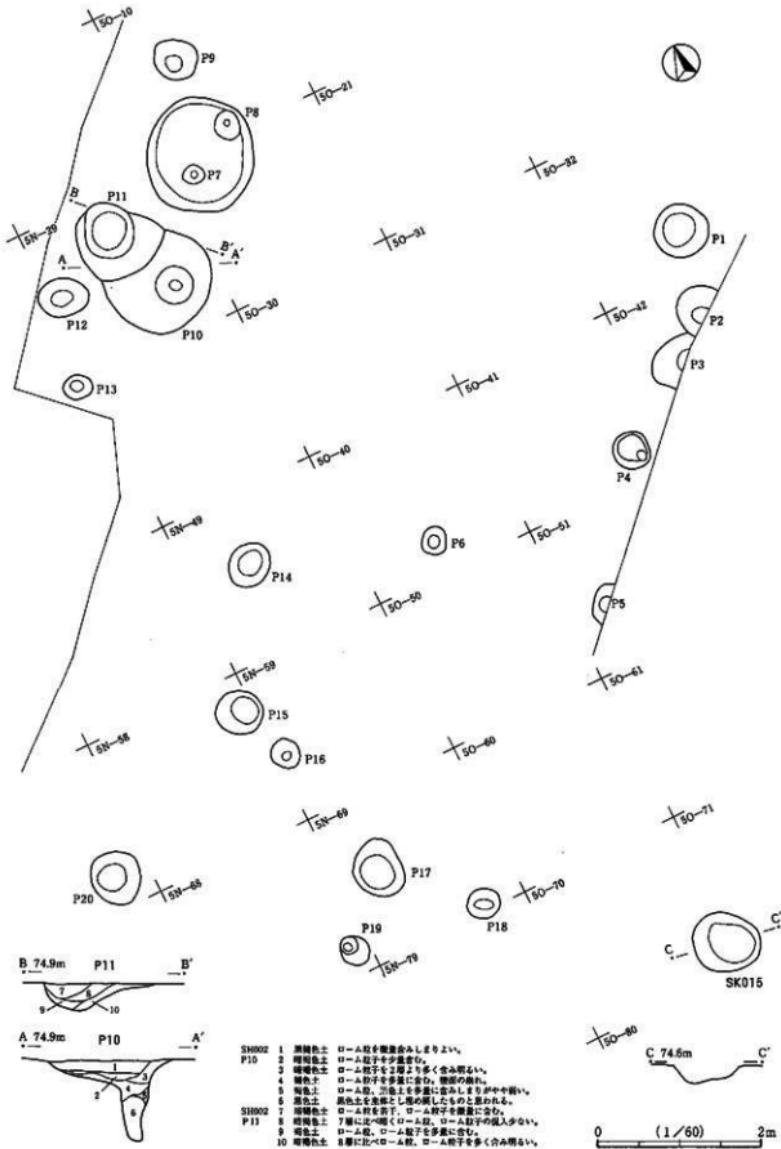
[位 置] 5N-19・28・29・38・39・49・57・58・59・68・69・79、50-10・20・32・40・41・42・51

[標 高] 74.8m

[他遺構との重複関係] なし。

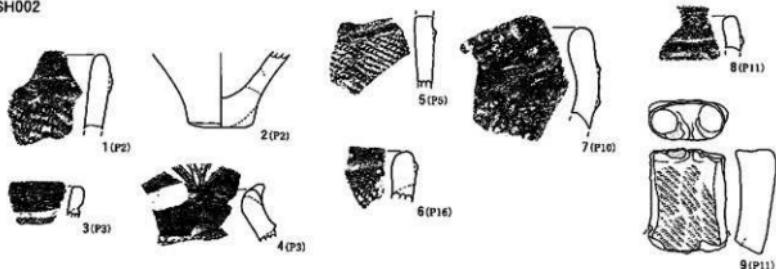
[形状と規模] ピットは20基検出されている。配置に規則性は認められない。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
形状	円形	楕円形	楕円形	円形	楕円形	円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形
長軸	66	(70)	(80)	46	50	34	25	37	57	50
短軸	63	58	(60)	46	(40)	30	22	30	50	44
深さ	29	33	28	16	32	42	22	19	37	100
純文土器重量(g)	0	242	37	6	45	0	13	0	0	215
石器・礫重量(g)	0	227	0	0	28	0	0	0	0	83
ピット番号	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20
形状	楕円形	楕円形	円形	楕円形	円形	円形	楕円形	円形	円形	円形
長軸	70	60	33	54	58	40	70	40	40	65
短軸	60	46	32	47	55	36	56	36	36	60
深さ	38	46	39	21	23	25	63	20	31	88
純文土器重量(g)	144	0	10	0	0	15	42	0	0	0
石器・礫重量(g)	12	0	60	0	0	0	0	0	0	0

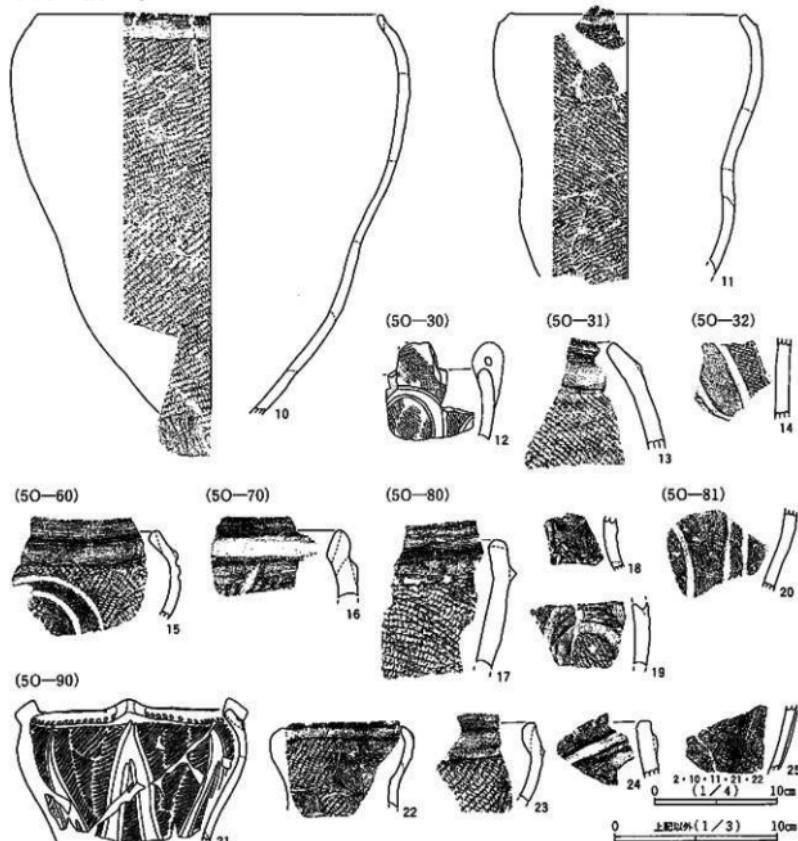


第57図 エリア⑤の造構 (SK015、SH002)

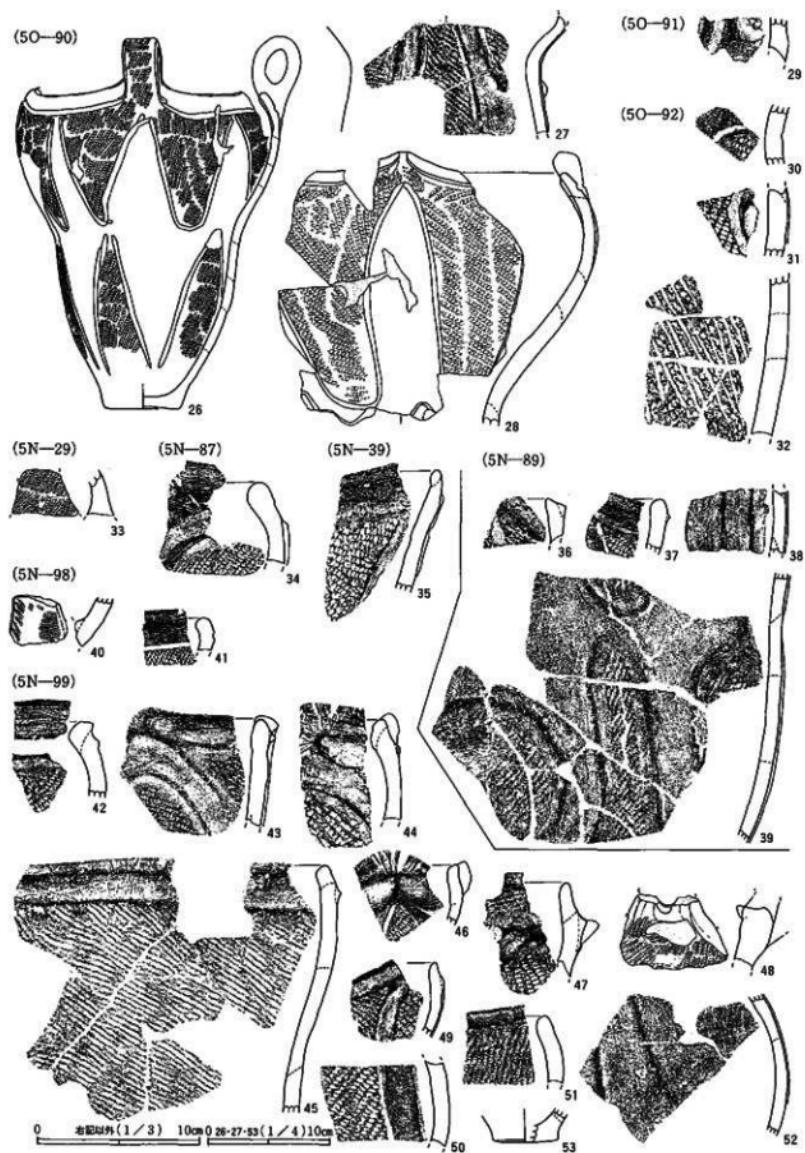
SH002



グリッド (50-21)



第58図 エリア⑤出土土器(1)



第59図 エリア⑤出土土器(2)

〔覆土〕P 10・11は覆土が記録されている。P 10はローム粒子を多量に含む褐色土とほとんど含まない黒色土とが交互に堆積する。P 11は床面直上にローム粒子を多量に含む褐色土が堆積し、上部にローム粒子の少ない暗褐色土が堆積する。

〔出土遺物〕遺物総量は縄文土器が768g、石器・礫が410gである。ピットごとの出土量は表に記載した。主体は加曾利E 4式である。1・2・7は器面が摩耗している。3は外面にススが付着する。

#### グリッド(第58・59図、図版14)

グリッド番号	縄文土器	石器・礫	グリッド番号	縄文土器	石器・礫	グリッド番号	縄文土器	石器・礫
5N-29	340	75	5N-98	450	0	50-60	123	0
5N-39	51	0	5N-99	4,750	720	50-70	750	449
5N-58	0	26	50-21	1,920	0	50-80	426	0
5N-59	46	0	50-30	80	0	50-81	332	0
5N-69	160	0	50-31	210	0	50-90	3,580	0
5N-87	380	0	50-32	30	0	50-91	88	0
5N-88	120	0	50-41	30	0	50-92	1,158	1,534
5N-89	820	0	50-50	20	0			

11は、胸部は半分近く残存しているものの口縁部は極めて残りが悪かった。図示した拓本以外はごく小破片のみである。12・27・39は器面の摩耗が顕著である。43・45は外面にススが付着する。49は内面に炭化物が付着する。52は熱を強く受けている。球形を呈する胸部破片で中期末から後期初頭であろう。

#### 6 エリア⑥

調査区南東側の路線からはみ出したエリアである。堅穴住居跡3軒と土坑2基が検出された。またそれとは別に陥穴と考えられる土坑が2基確認されている(S K 0 1 3・0 1 4)。陥穴からの出土遺物は流れ込んだと考えられる中期末から後期前葉の土器がほとんどを占めており、遺構自体の時期は明らかではない。

#### S I O 1 0 (第60・61図、図版3・13)

〔位 置〕60-23・24・25・33・34・35

〔標 高〕75.0m

〔他遺構との重複関係〕S I O 1 2より新しい。

〔形状と規模〕楕円形。長軸推定310cm×短軸275cm×深さ20cm。

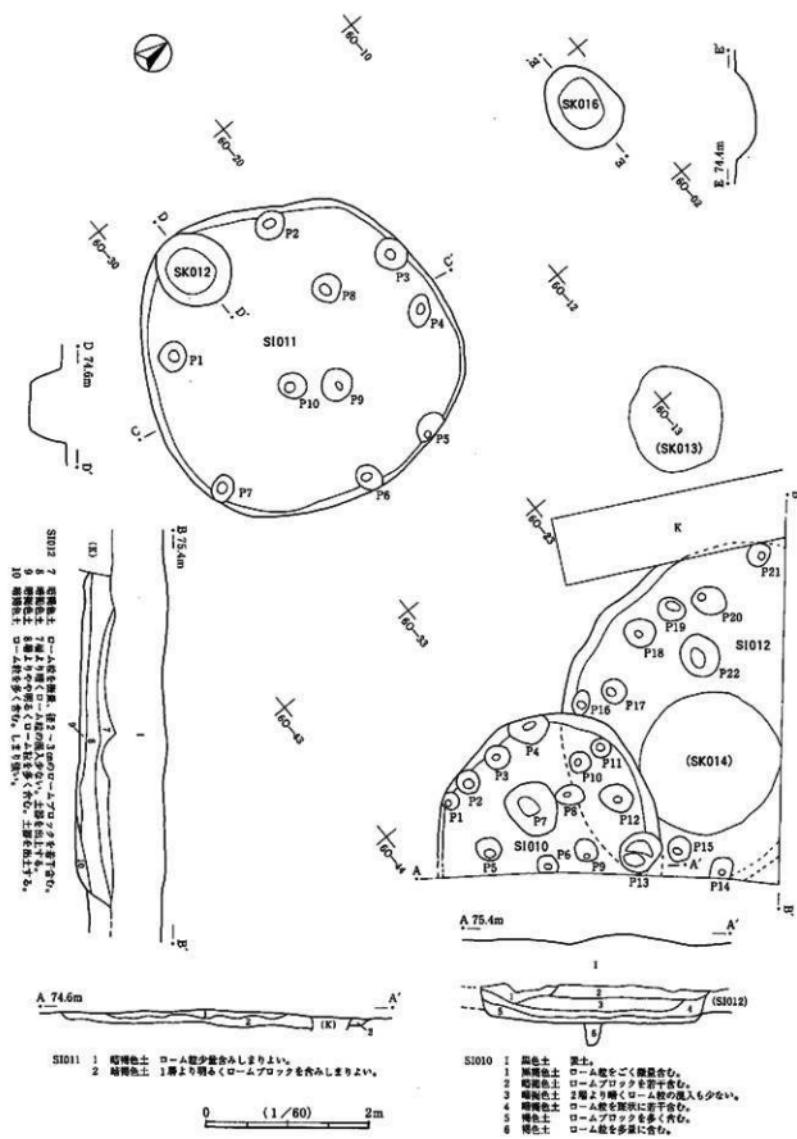
〔断面形状と覆土〕逆台形。床面直上にロームブロックを多量に含む褐色土が堆積し、上部はローム粒子が少量混入する暗褐色土がレンズ状に堆積する。

〔床 面〕ほぼ平坦である。硬化面は調査範囲から検出されず。

〔 爐 〕調査範囲からは検出されず。

〔ピット〕9基。S I O 1 2と重なる部分の帰属は、調査時の所見によりS I O 1 2に伴うものとみなしているが、プランから外れるものはS I O 1 0に移している。番号はS I O 1 2と通しにしている。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
直径・長軸	22	30	32	55	31	(25)	67	35	30
短軸	-	-	-	-	-	-	-	27	-
深さ	18	80	13	15	14	28	18	24	27



第60図 エリア⑥の遺構(SI010・011・012、SK012・016)

〔出土遺物〕総量は縄文土器760g、石器・礫320gである。加曾利E3式～E4式が主体である。量は少ないがS1012と区別できているかは疑問が残る。

S1012(第60～62図、図版3・13・14)

〔位置〕60-13・14・15・23・24・25

〔標高〕74.7m

〔他遺構との重複関係〕S1010より古い。SK014より新しいと推測される。

〔形状と規模〕橢円形。長軸推定420cm×短軸推定370cm×深さ44cm。

〔断面形状と覆土〕皿形。床面上直にローム粒子を多量に含む暗褐色土が堆積し、上部はローム粒子が少ない暗褐色土がレンズ状に堆積する。

〔床面〕ほぼ平坦である。硬化面は調査範囲から検出されず。

〔炉〕調査範囲からは検出されず。

〔ピット〕13基検出された。壁際に二重に並ぶ。S1012と重なる部分の帰属は、調査時の所見によりS1012に伴うものとみなしているが、プランから外れるものはS1010に移している。

ピット番号	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20	P21	P22
直径・長軸	27	25	41	55	(27)	33	30	31	37	32	41	30	53
短軸	-	-	35	46	-	-	22	-	-	-	-	-	-
深さ	12	7	23	55	28	18	11	17	15	19	15	14	27

〔出土遺物〕総量はきわめて多い。縄文土器9,704g、石器・礫127gが出土した。ほとんどが覆土上層の出土である。加曾利E3式から掘り之内2式まで出土しているが、S1010を切っているという調査時の所見からするとかなりの遺物が混入であると考えざるを得なくなる。切り合っているS1010に伴っていたものも存在すると考えるべきであろうか。23は摩滅が顕著である。38は赤彩土器である。41は底部縁辺が研磨されており変形著しい。

S1011(第60・61図、図版4・13)

〔位置〕60-10・11・12・20・21・22・30・31・32

〔標高〕75.0m

〔他遺構との重複関係〕SK012と切り合うが新旧不明。

〔形状と規模〕不整円形。長軸390cm×短軸375cm×深さ14cm。

〔断面形状と覆土〕皿形。ほとんどがロームブロックを多量に含む暗褐色土である。

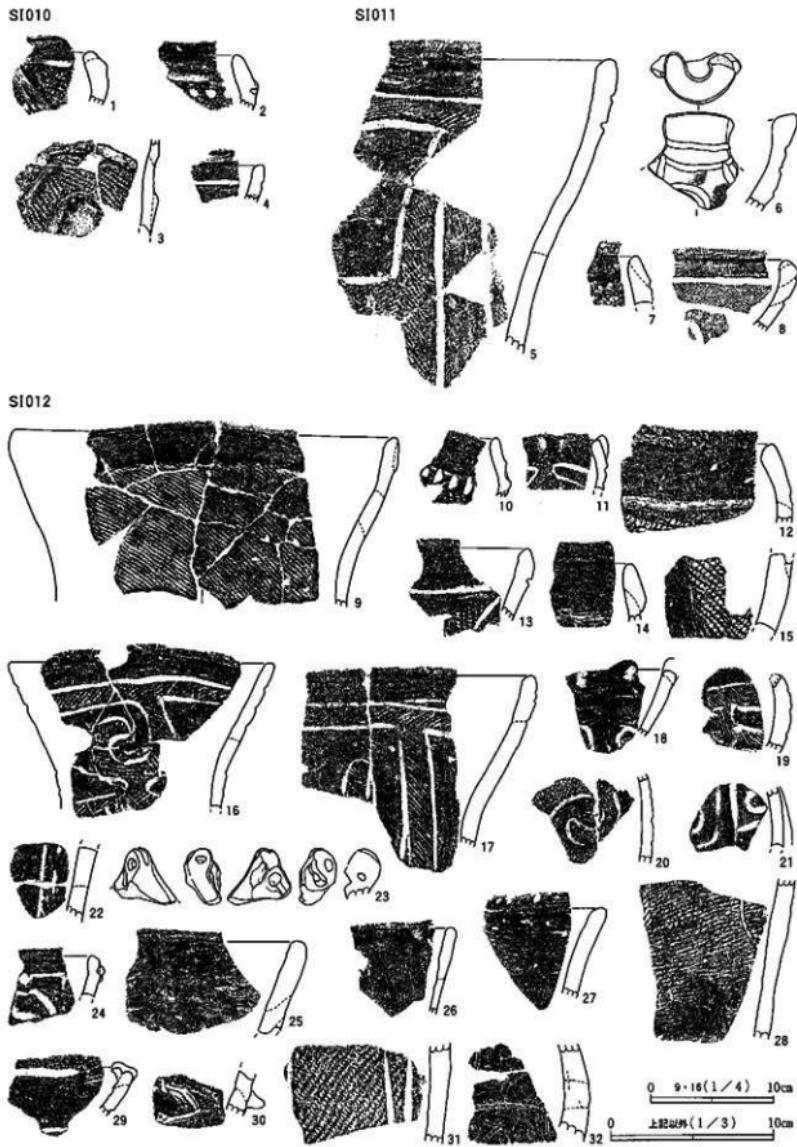
〔床面〕ほぼ平坦である。硬化面は検出されず。

〔炉〕検出されず。

〔ピット〕10基検出された。そのうち7基は壁際に位置する。

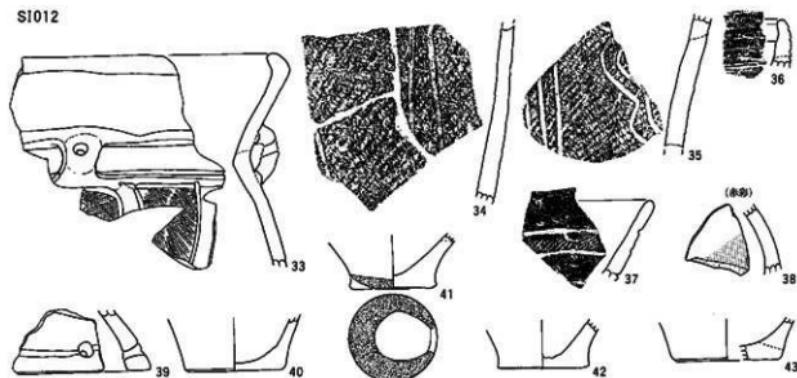
ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
直径・長軸	39	41	38	42	43	34	34	35	41	34
短軸	-	-	-	27	26	-	27	-	-	-
深さ	23	19	22	46	43	26	21	21	23	17

〔出土遺物〕総量は、縄文土器851g、石器・礫9gである。称名寺I式を主体とする。6は熱による劣化が顕著で、内面に炭化物が多量に付着する。

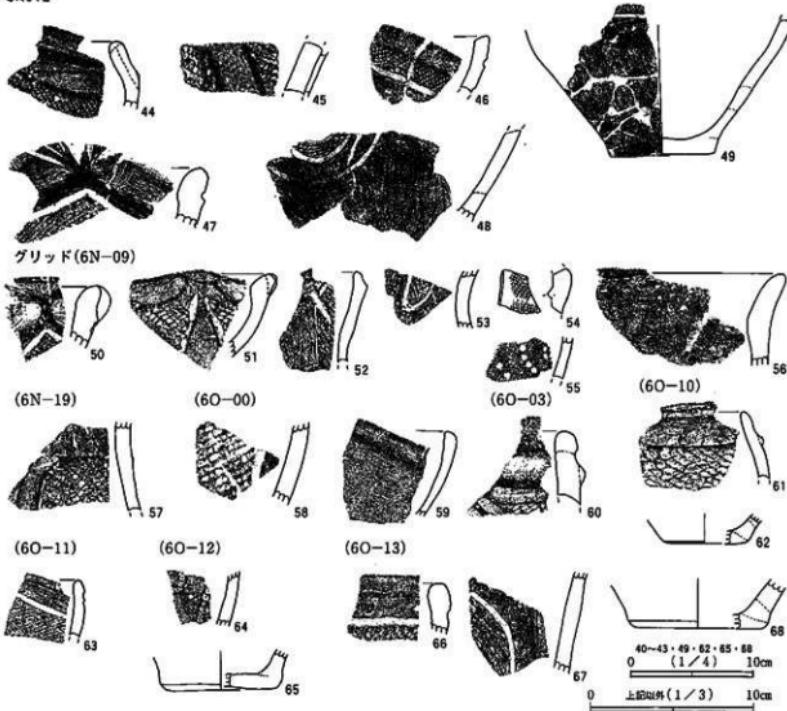


第61図 エリア⑥出土土器(1)

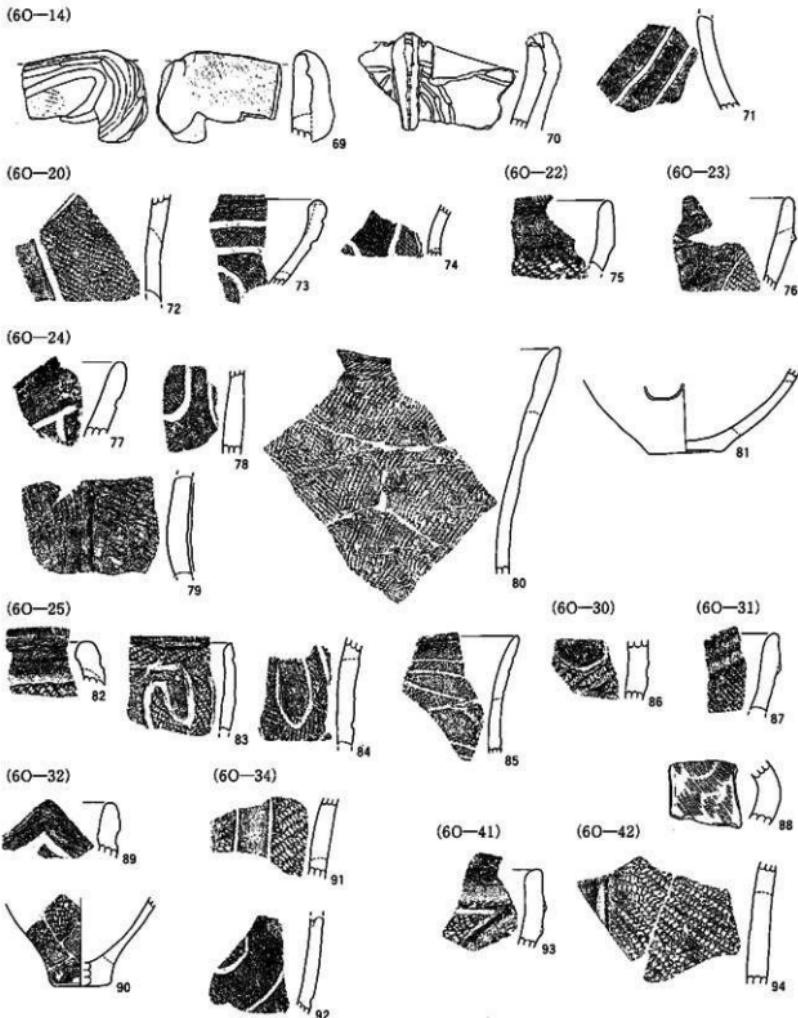
SI012



SK012



第62図 エリア⑥出土土器(2)



0 81・86 (1/4) 10cm  
0 上記以外 (1/3) 10cm

第63図 エリア⑥出土土器(3)

## SKO12 (第 60・62 図、図版 4・13)

〔位 置〕 60-20

〔標 高〕 74.6m

〔他遺構との重複関係〕 S I O 1 1 と切り合うが新旧不明。

〔形状と規模〕 楕円形。長軸 96cm × 短軸 86cm × 深さ 46cm。

〔断面形状〕 逆台形。

〔床 面〕 ほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 規模の割には大量である。縄文土器 1,370g、石器・礫 2,020g が出土した。称名寺 I 式を主体として加曾利 E 4 式が混入する。48 の右側の破片は S I O 1 1 出土である。50 は内面にススが付着する。

## SKO16 (第 60 図、図版 4)

〔位 置〕 60-01

〔標 高〕 74.4m

〔他遺構との重複関係〕 なし。

〔形状と規模〕 楕円形。長軸 110cm × 短軸 84cm × 深さ 26cm。

〔断面形状〕 血形。

〔床 面〕 なだらかに窪む。

〔出土遺物〕 なし。

## グリッド (第 62・63 図)

グリッド番号	縄文土器	石器・礫	グリッド番号	縄文土器	石器・礫	グリッド番号	縄文土器	石器・礫
6N-09	1,720	37	60-14	950	0	60-31	330	0
6N-19	126	0	60-20	570	170	60-32	170	6
6O-00	564	6	60-21	240	2	60-34	300	0
6O-02	170	250	60-22	187	23	60-41	100	610
6O-03	310	0	60-23	196	5	60-42	270	0
6O-10	574	0	60-24	1,100	0	60-43	110	0
6O-11	220	0	60-25	1,030	10	60-51	210	0
6O-12	180	0	60-30	80	10	60-52	130	0
6O-13	857	193						

55・62・77・78・85・93 は器面の摩耗が顕著である。63・73・83・90 は内面に炭化物が付着する。69・80 は口唇部内面側にも縄文が施文される。81 の沈線はごく浅い。

## SKO13 (第 64・65 図、図版 4・13)

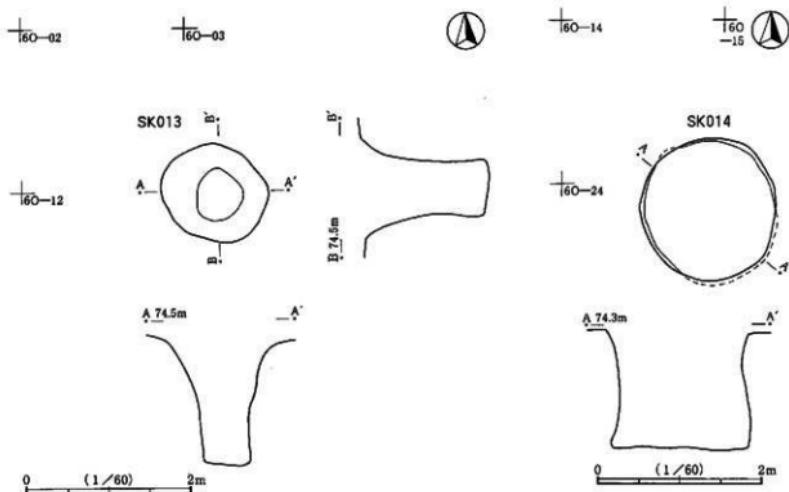
〔位 置〕 60-02・03・12・13

〔標 高〕 74.5m

〔他遺構との重複関係〕 なし。

〔形状と規模〕 楕円形。長軸 130cm × 短軸 115cm × 深さ 155cm。

〔断面形状〕 逆台形。



第64図 路穴(SK013・014)

〔床面〕ほぼ平坦である。

〔出土遺物〕縄文土器2,760g、石器・礫480g出土した。出土遺物は加曾利E3式から称名寺I式までであるが、主体は加曾利E3式と称名寺I式である。8と9は同一個体と考えられる。12は摩耗が顕著である。

#### SK014 (第64・65図、図版4・13)

〔位置〕60-14・15・24・25

〔標高〕74.3m

〔他造構との重複関係〕S1012より古い。

〔形状と規模〕正円に近い橢円形。長軸170cm×短軸165cm×深さ145cm。

〔断面形状〕箱形。

〔床面〕ほぼ平坦である。

〔出土遺物〕縄文土器1,780g、石器・礫1,048g出土した。出土遺物は加曾利E3式から称名寺II式までであるが、主体は加曾利E3式と称名寺I式である。

#### 7 エリア⑦

縄文集落の南西端部にあたる。竪穴住居跡4軒が検出された。包含層はほとんど残存しておらず遺構も遺存状況が悪かった。ここからはグリッド出土遺物は存在しない。

#### S1013 (第66・69図、図版4・14)

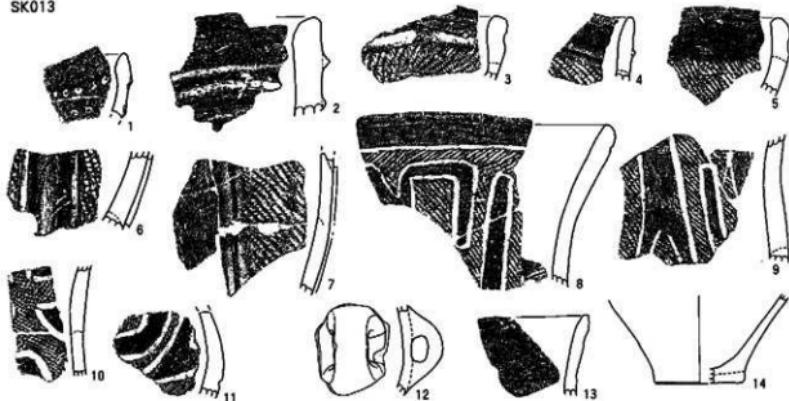
〔位置〕6M-54・55・63・64・65・74

〔標高〕74.8m

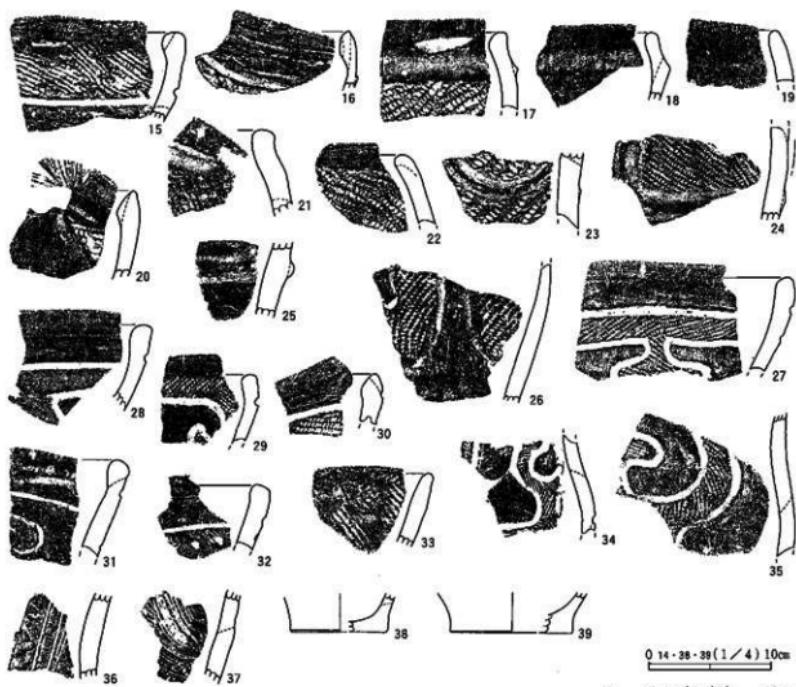
〔他造構との重複関係〕なし。

〔形状と規模〕柱穴のみ検出された。形状は橢円形と推測されるが規模は不明。

SK013



SK014



第65図 路穴出土土器

0 14・38-39(1/4) 10cm

0 上部以外(1/3) 10cm

〔断面形状と覆土〕 いずれも不明。

〔床 面〕 硬化面は調査範囲から検出されず。

〔 炉 〕 調査範囲からは検出されず。

〔ピット〕 7基検出された。壁に沿うものと思われる。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
直径・長軸	50	37	31	77	37	57	41
短軸	36	26	21	61	-	47	-
深さ	48	27	34	24	20	45	27

〔出土遺物〕ごく少ない。縄文土器80gのみである。固化できた土器は1点のみであった。

S I O 1 4 (第 67・69 図、図版 4・14)

〔位 置〕 6M - 19・29、6N - 10・20

〔標 高〕 75.3m

〔他遺構との重複関係〕 S I O 1 5 と切り合うが新旧不明。

〔形状と規模〕 楕円形。長軸推定 340cm × 短軸推定 260cm × 深さ 30cm。

〔断面形状と覆土〕 逆台形。北東側にローム粒子をやや多く含む暗褐色土が堆積し、南西側にローム粒子の少ない暗褐色土が水平に堆積する。

〔床 面〕 ほぼ平坦である。硬化面は調査範囲から検出されず。

〔 炉 〕 調査範囲からは検出されず。

〔ピット〕 3基検出された。プラン内からは他に2基検出されているが、規模から S I O 1 5 のものと推測される。番号は S I O 1 5 を含め通しとしている。

ピット番号	P1	P2	P3
直径	18	22	23
深さ	10	14	13

〔出土遺物〕 総量は少なく縄文土器300g、石器・礫20gである。覆土上層からの出土が多い。2は器表面の剥落が顕著で、口縁部下の微隆起線はほとんど剥落している。

S I O 1 5 (第 67・69 図、図版 4・14)

〔位 置〕 6M - 19・29・39、6N - 10・20・30

〔標 高〕 75.3m

〔他遺構との重複関係〕 S I O 1 4 と切り合うが新旧不明。

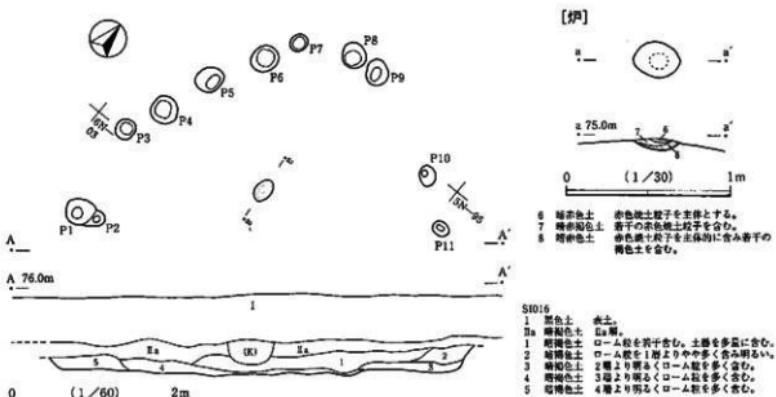
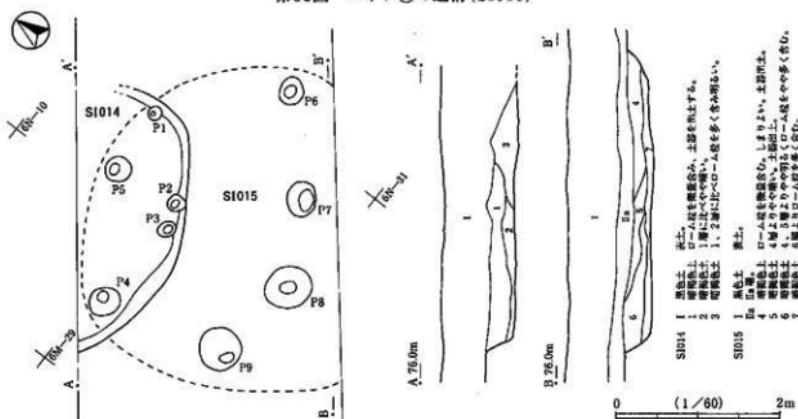
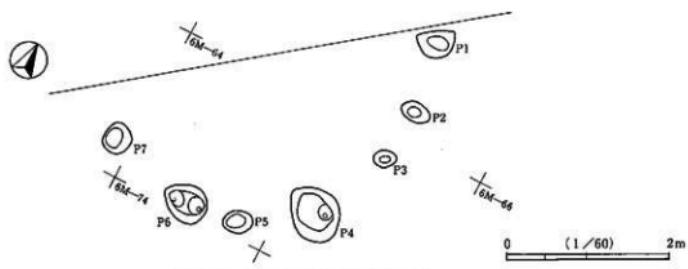
〔形状と規模〕 床面がソフトローム中のため壁が確認できず。形状は不整円形と推測されるが規模は不明。

〔断面形状と覆土〕 セクションを観察する限りは逆台形とみなされる。床面直上と壁際にローム粒子をや多く含む暗褐色土が堆積し、中央部にローム粒子の少ない暗褐色土がレンズ状に堆積する。

〔床 面〕 ほぼ平坦である。硬化面は調査範囲から検出されず。

〔 炉 〕 調査範囲からは検出されず。

〔ピット〕 6基検出された。P 4・5・6・9は壁柱穴と考えられる。



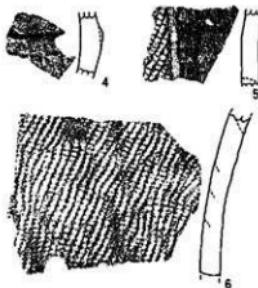
SI013



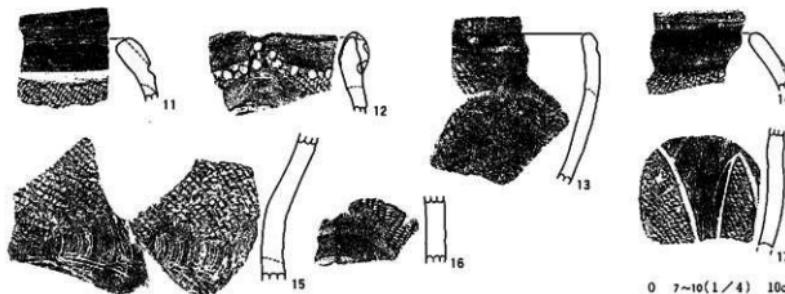
SI014



SI015



SI016



0 7~10(1/4) 10cm

0 上限界(1/3) 10cm

第69図 エリア⑦出土土器

ピット番号	P4	P5	P6	P7	P8	P9
直径	41	33	37	45	58	54
深さ	22	24	51	9	15	37

〔出土遺物〕縄文土器が420g出土した。覆土上層からの出土が多い。加曾利E4式を主体とする。

S I O 1 6 (第68・69図、図版4・14)

〔位置〕5N-83・84・93・94・95、6N-03

〔標高〕75.0m

〔他遺構との重複関係〕なし。

〔形状と規模〕床面がソフトローム中のため壁が確認できず。形状は楕円形と推測されるが規模は不明。

〔断面形状と覆土〕セクションを観察する限りは逆台形とみなされる。床面直上と壁際にローム粒子をやや多く含む暗褐色土が堆積し、中央部にローム粒子の少ない暗褐色土がレンズ状に堆積する。

〔床面〕中央部がやや窪む。

〔炉〕長軸28cm×短軸21cm×深さ7cm。断面皿形で全体に焼土が堆積する。

〔ピット〕11基検出された。壁に沿うものと思われる。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11
直径	39	(23)	27	33	38	35	24	33	33	26	20
深さ	23	29	11	10	8	5	13	18	15	13	11

〔出土遺物〕縄文土器が3,447g出土した。覆土中央のレンズ状堆積土からの出土が多い。時期は加曾利E3式～E4式が主体である。10は縄文施文のみであるが器形などから他の土器とはほぼ同時期であろう。

## 8 エリア外

### グリッド(第70図)

エリア外の遺物のデータは大グリッドごとに表示する。

グリッド番号	縄文土器	石器・礫	グリッド番号	縄文土器	石器・礫	グリッド番号	縄文土器	石器・礫
0R-03-04	1,012	0	9I	324	112	11G	2	9
1Q-34	0	150	10G	54	2,825	12E	12	0
6L	290	370	10H	220	557	12F	29	0
9H	53	0	11F	28	15	13C	42	0

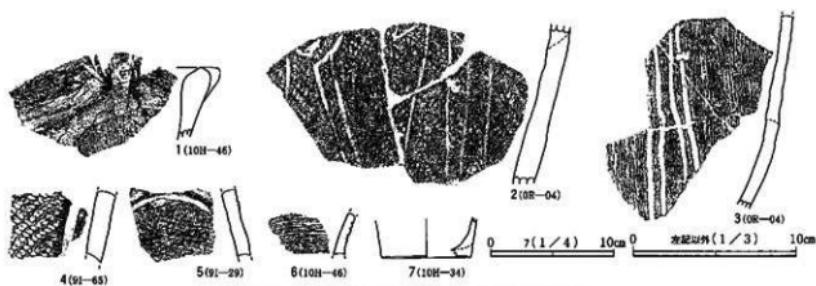
2・3はエリア①から道路をはさんで反対側に位置するグリッドから出土したもので、エリア①でも主體を占める壙之内1式である。他は平成17年度調査区から出土したもの。1は外面に炭化物が付着する。

なお、参考のために縄文時代以外の遺構から出土した縄文土器、石器・礫の重量も掲載しておく。

遺構番号	縄文土器	石器・礫	遺構番号	縄文土器	石器・礫	遺構番号	縄文土器	石器・礫
SK001	129	88	SK003	61	0	SD002	0	268
SK002	97	2	SD001	26	0	SD003	23	1,771

### トレンチ(第71図、図版14)

トレンチのデータは平成18年度調査区のみ個別に提示する。平成17年度調査区は遺物の総量が少なく良好な資料もほとんど無かったため、全体で一括する。



第70図 エリア外出土中期後半～後期中葉土器



第71図 トレンチ出土中期後半～後期中葉土器

トレンチ番号	縄文土器	石器・環	トレンチ番号	縄文土器	石器・環	トレンチ番号	縄文土器	石器・環
1	236	44	6	3,733	1,267	9	3,120	980
2	17,800	340	7	7,764	2,366	10	27	0
3・4	43,612	3,208	8	6,736	1,154	H17調査区	4,422	22,456
5	9,489	521						

平成18年度調査区に設定したトレンチからは遺物が多数出土した。最初に述べたとおり遺構の覆土を含む良好な包含層が存在したためであろう。特にエリア①に設定した2トレンチと③に設定した3・4トレンチからは良好な資料が多数出土している。なお、3・4トレンチはつながった状態となっているが、当初どのような意図で設定したのか、今となってはよく分からぬ。出土した遺物も大部分はどちらのトレンチから出土したのか分からなくなっている。

1トレンチの2点はいずれも加曾利B1式である。2トレンチから出土した4点は網取式の影響を受けたと考えられるもの、あるいは網取式と堀之内1式とのキメラ土器とでも言うべきものである。8は堀之内2式あるいは加曾利B1式浅鉢の把手であろう。10は当遺跡出土の加曾利B2式の中でも最も優品というべきものである。浅鉢形であるが文様構成はソロバン玉形土器とほぼ同一である。

#### 9 縄文時代中期後半から後期中葉以外の時期（第72図）

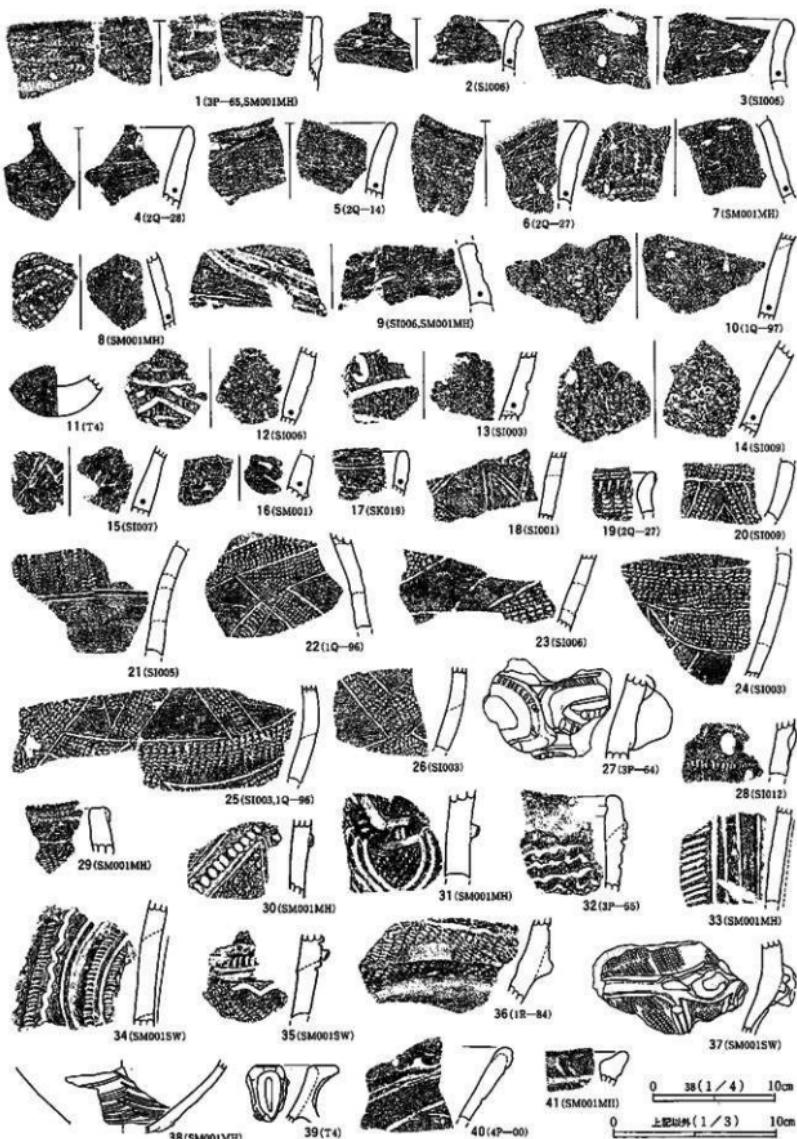
ここでは集落に帰属すると考えられる中期後半から後期中葉にかけての遺物以外を掲載する。時期は早期沈線文から条痕文にかけて、前期中葉から後葉、中期中葉、後期後葉などである。特に注目すべきは前期後葉の興津式がまとまっていることである。

1は熱糸文末期から沈線文期にかけて出現する、粗い胎土を使用し器表面のケズリ調整が顕著な無文土器である。2～10は田戸上層式と考えられるもので、胎土に植物纖維を含む。11は沈線文期と思われる尖底であるが胎土に植物纖維を含まない。12～16は表裏に貝殻条痕が施されるもので、条痕文土器であろう。15は摩耗が著しく不鮮明であるが、縄文地文に半截竹管による沈線が配されており黒浜式であろう。16も不鮮明であるが半截竹管による押し引き文が施されるもので、諸磯a式と思われる。19～26は沈線区画に貝殻腹縁文を充填するもので、興津式である。胴部が球形を呈する深鉢である。27・28は中期前半の阿玉台式に属するもの。29～35は同じく勝板式に属するものと考えられる。若干の時期差がありそうである。36・37は中期中葉の加曾利E1式と考えられるもの。38・39は後期後葉の安行1式で、38は台付浅鉢である。40は安行3bないしは3c式と考えられる浅鉢である。41は摩耗著しく分かりにくいが、口縁部の形状などから前浦式と考えられる。

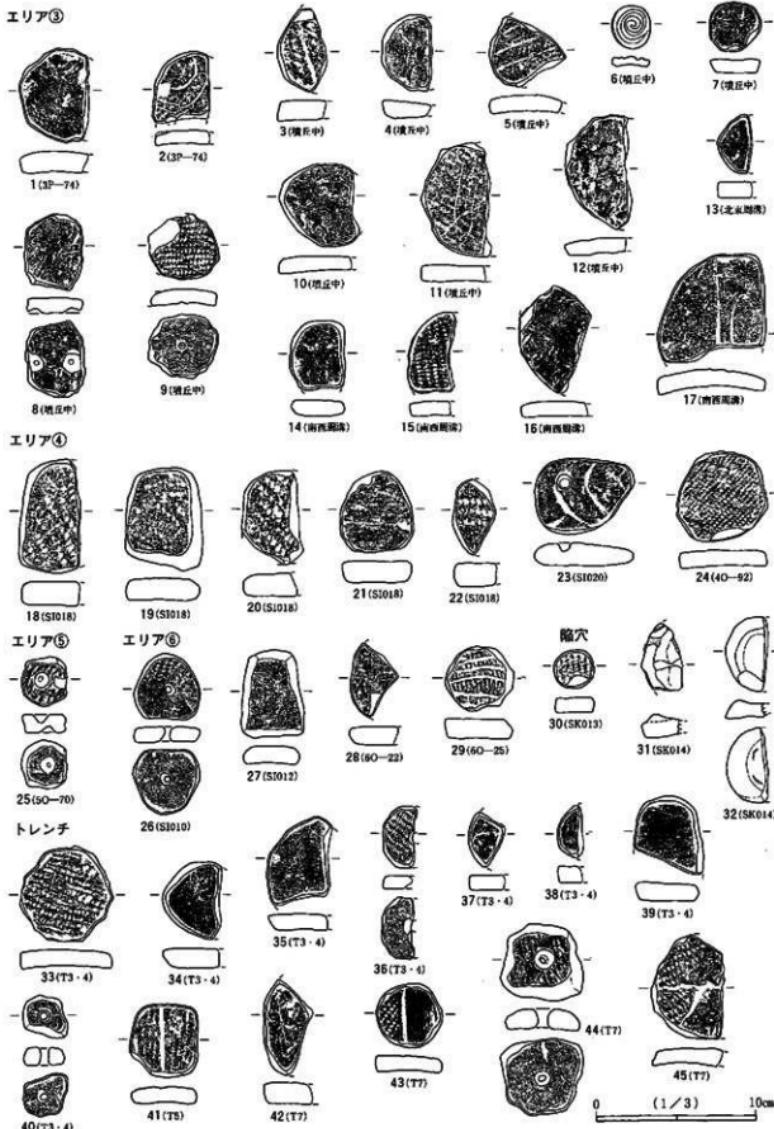
#### 10 土器以外の遺物（第73～80図、図版14～16）

土器以外の土製品、石器類をここで扱う。各エリアに分けてレイアウトするという考え方もあったが、作業が繁雑になること、各資料の相互比較が容易であるということを考慮して、まとめて掲載することとした。

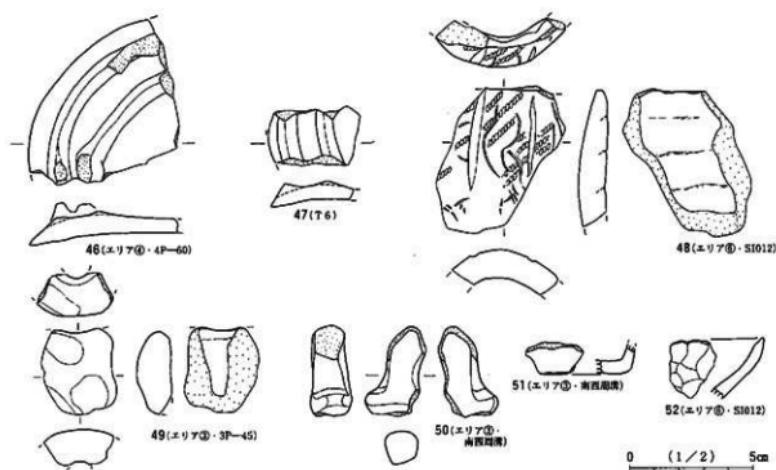
第73・74図は土製品である。1～45は土器片円盤、有孔土器片円盤などをまとめた。土器片円盤を扱う場合注意すべき点は、形状だけで判断するとただの破片との区別がつかなくなるという事態が起こることである。もちろん意図的に粗加工した破片もあるが、それらとただの破片とを区別する術は残念ながら持ち合せていない。そこで今回は明確な加工痕があるものを意識して選別するよう留意した。側面に研磨加工が施されていること、あるいは連続した打ち欠き加工が施されているもののみを抽出した。ただ



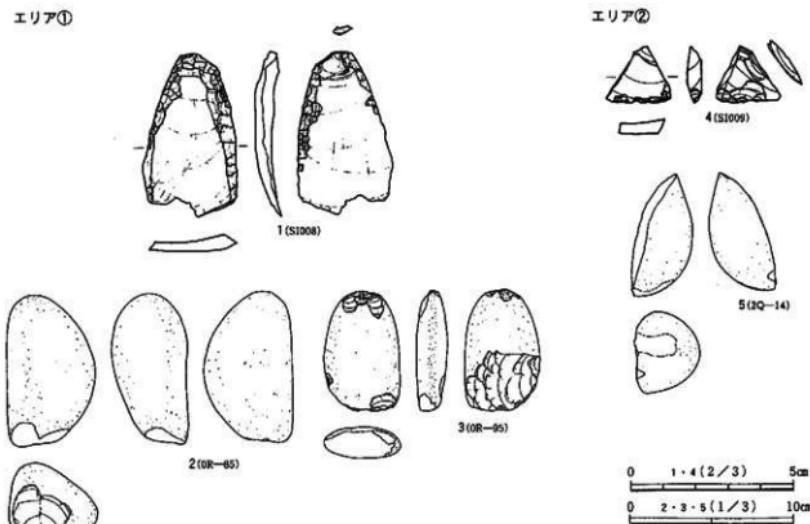
第72図 出土その他の時期の土器



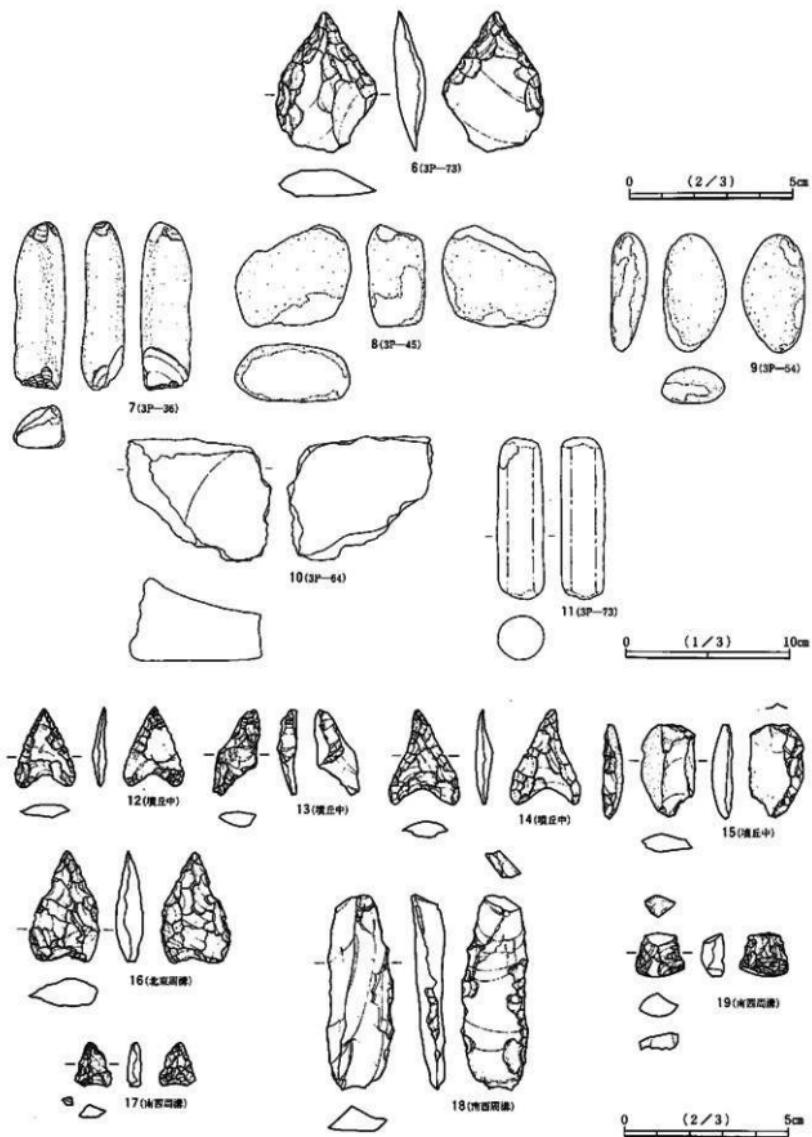
第73図 出土縄文時代土製品(1)



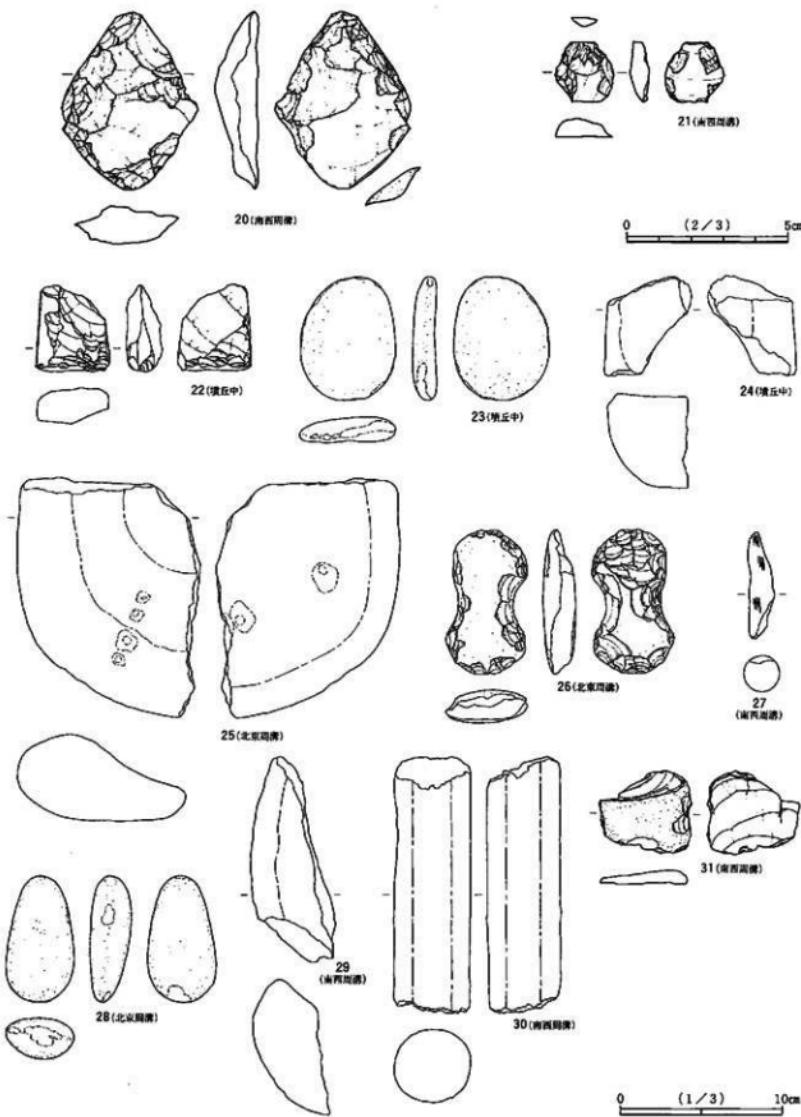
第74図 出土縄文時代土製品(2)



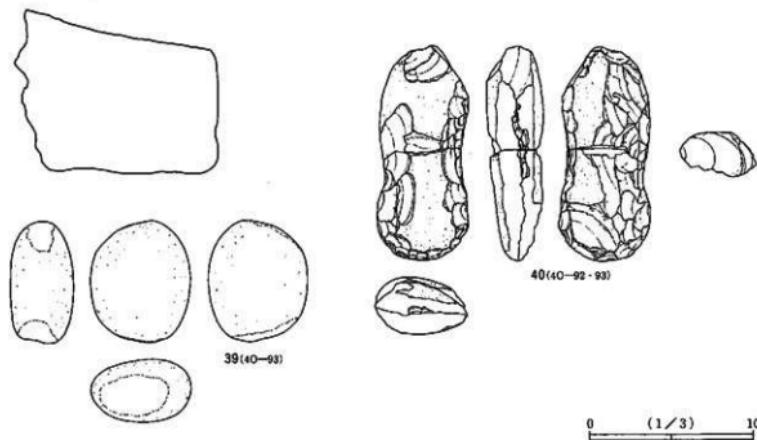
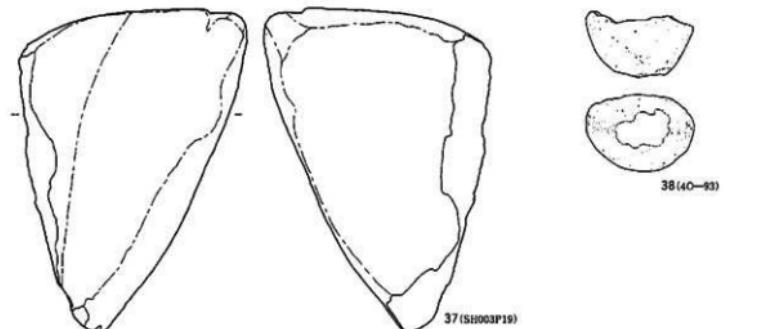
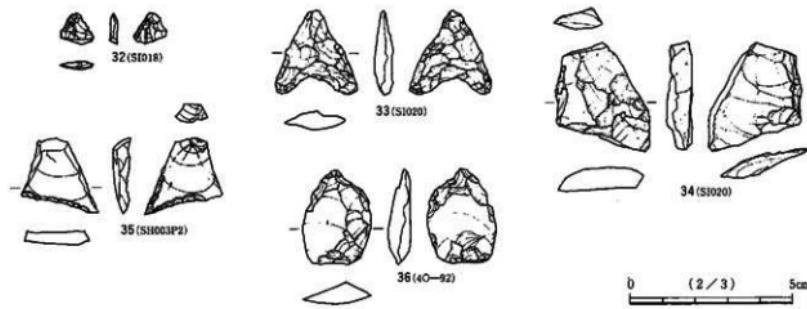
第75図 出土縄文時代石器(1)



第76図 出土縄文時代石器(2)

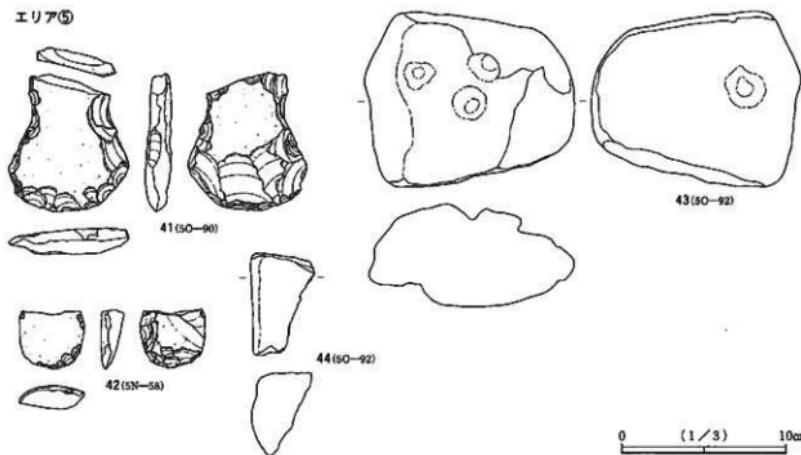


第77図 出土縄文時代石器(3)

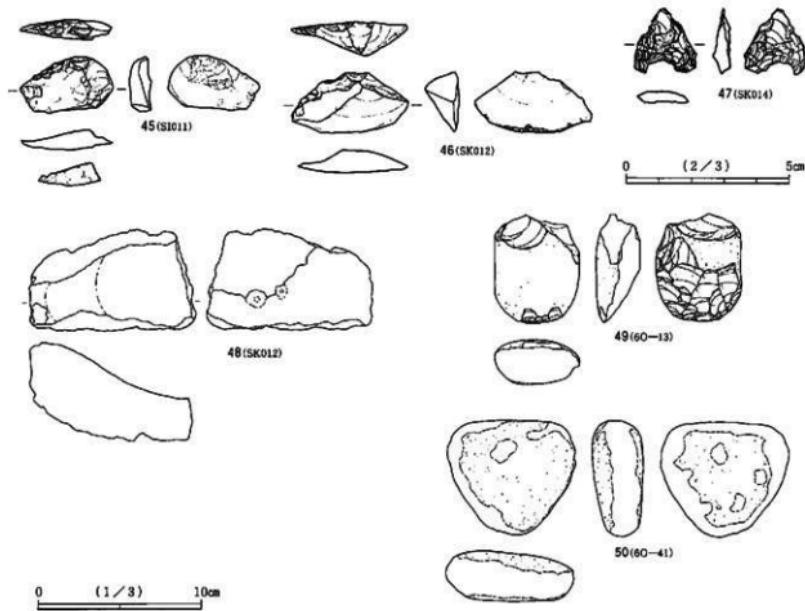


第78図 出土縄文時代石器(4)

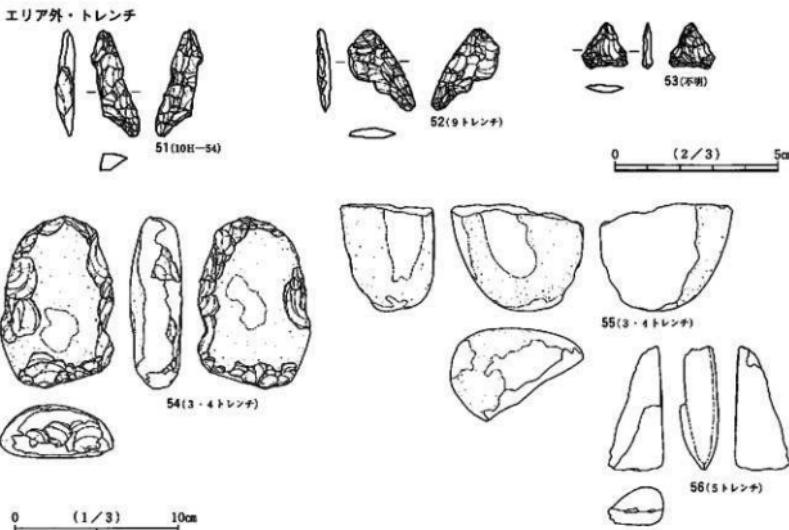
エリア⑤



エリア⑥



第79図 出土縄文時代石器(5)



第80図 出土縄文時代石器(6)

し例えば熱を受けて摩耗した破片など判断が難しいものも存在した。それが人為的なものか否かを判断するのは難しく、最終的に形状で決めたものもある。これらの遺物は縄文時代の集落では必ずと言っていいほど出土するものであるが、残念ながら分析法は進展しているとは言えず今後の課題であろう。

6は土器へ貼り付けられた装飾が剥落したものであろうか。9は裏面にごく浅い穿孔が認められる。18・19は被熟土器片を利用したもの。31・32は台付土器の台を転用したもの。31には透かし孔も認められる。

46・47は蓋形土製品である。いずれも焼成はやや甘く器表面はもろい。48は筒形の土製品で用途は不明である。表面に認められる「S」字状の沈線はごく細い棒状工具を使用する。全体に摩耗が顕著でトロトロである。49はやはり筒形の土製品で、(縄文時代でない可能性も含め)土錐に類似する。50は土偶の足と思われる土製品である。つま先を外側に広げる形状は後期のものとみなされる。ただし足の下に欠損部があり、土器の把手の可能性もある。51・52はミニチュア土器である。いずれも浅鉢形で、粘土板を指頭成形している。

第75～80図は石器である。詳細な属性は第2表に掲載した。製作途上の産物とみられる調整痕を伴う剥片類が多数出土しているが、明白な集中域などは調査では確認されなかった。調査区外に製作跡が存在する可能性を指摘しておく。37はSH003P19に埋設されていた土器の中から出土したもの。部分的に研磨痕が認められ、砥石としての用途が想定される。

第2表 山小川遺跡石器属性表

番号	遺物番号	エリア	遺物・グリッド番号	注記番号	部種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
12	1	-	SM001 MH	002	ナイフ形石器	灰岩	4.45	1.61	0.68	4.00	田石器
12	2	-	SM001 MH	002	ナイフ形石器	灰岩	2.10	1.17	0.49	2.00	田石器
12	3	-	SM001 MH	002	ナイフ形石器	チャート	3.97	2.51	0.69	7.00	田石器
75	1	①	SM006	001	刀器	チャート	5.00	2.90	0.55	7.00	
75	2	①	G2-85	001	敲石	砂岩	9.33	5.40	4.47	309.40	
75	3	①	G2-95	001	敲石	安山岩	7.43	4.62	1.91	82.80	
-	-	①	SM001	001	刮片	チャート	2.34	2.88	0.46	1.80	
-	-	①	SM001	001	刮片	頁岩	1.56	1.53	0.37	0.90	
-	-	①	SM001	002	刮片	頁岩	4.26	4.52	1.68	38.20	
-	-	①	SM001	003	刮片	チャート	3.43	3.15	1.55	19.40	
-	-	①	SM002	001	刮片	灰岩	2.15	2.15	0.79	5.75	
-	-	①	SM002	001	刮片	チャート	2.40	2.00	0.70	3.60	
-	-	①	SM002	001	刮片	チャート	2.49	2.53	0.54	3.00	
-	-	①	SM002	003	刮片	安山岩	2.44	2.36	0.38	1.30	
-	-	①	SM004	002	刮片	チャート	2.32	2.93	0.87	6.10	
-	-	①	SM004	002	刮片	黒曜石	1.82	2.06	1.03	3.80	
-	-	①	SM004	002	刮片	頁岩	2.38	2.02	0.37	1.60	
-	-	①	SM004	003	刮片	頁岩	1.54	1.81	0.39	0.80	
-	-	①	SM004	002	刮片	チャート	1.65	1.52	0.22	0.40	
-	-	①	SM004	001	刮片	チャート	1.70	1.70	0.21	0.40	
-	-	①	SM004	001	刮片	頁岩	2.06	2.04	0.37	0.90	
-	-	①	SM004	001	刮片	灰岩	2.05	2.30	0.46	1.80	
75	4	②	SM009	002	磨削器	黒曜石	1.67	1.96	0.40	1.10	
75	5	②	SQ2-14	002	敲石	砂岩	6.14	4.76	4.86	152.80	
-	-	②	SM003	001	刮片	頁岩	2.32	2.61	0.72	1.40	
-	-	②	SM005	002	刮片	チャート	2.59	1.52	0.41	1.30	
-	-	②	SM006	001	刮片	頁岩	3.40	2.46	0.79	4.70	
-	-	②	SM009	002	刮片	頁岩	3.16	2.33	0.48	4.00	
-	-	②	SM009	002	刮片	頁岩	2.20	1.98	0.41	0.70	
-	-	②	SM009	001	刮片	頁岩	2.14	2.70	0.79	4.60	
-	-	②	SM009	001	刮片	チャート	2.04	1.66	0.67	2.50	
-	-	②	SM009	001	刮片	安山岩	4.37	3.33	1.01	12.40	
-	-	②	SQ2-23	001	刮片	チャート	3.34	1.37	0.36	1.30	
-	-	②	SM001	001	刮片	チャート	3.19	2.81	1.17	12.20	
76	7	③	SQ-36	001	鉋	鈍化尖端	10.24	3.06	2.44	107.10	
76	8	③	SQ-45	001	鉋	石炭化頁岩	6.11	6.99	3.45	217.50	
76	9	③	SQ-54	001	鉋	鉋	7.22	3.87	2.18	79.70	
76	10	③	SQ-55	001	鉋	鉋	7.00	8.32	3.14	218.60	
76	11	③	SQ-73	002	鉋	安山岩	10.22	2.65	2.66	119.60	
76	6	③	SQ-73	002	鉋	安山岩	6.57	3.11	0.99	10.40	
-	-	③	SQ-36	001	石器	石器	2.04	2.30	0.92	5.10	
-	-	③	SQ-36	001	石器	黒曜石	2.35	1.45	0.79	3.10	
-	-	③	SQ-36	001	石器	黒曜石	1.91	1.75	0.39	1.30	
-	-	③	SQ-35	001	石器	頁岩	3.71	3.36	0.80	6.60	
-	-	③	SQ-56	001	石器	チャート	2.82	2.78	0.76	7.50	
-	-	③	SQ-45	001	石器	チャート	4.20	2.03	1.67	14.20	
-	-	③	SQ-45	001	石器	頁岩	2.23	2.35	0.45	1.60	
-	-	③	SQ-45	001	石器	頁岩	2.26	1.12	0.39	1.00	
78	12	④	SM001 MH	002	刮片	黒曜石	2.39	1.63	0.41	1.20	
78	13	④	SM001 MH	002	刮片	黒曜石	2.54	0.95	0.56	1.20	
78	14	④	SM001 MH	002	刮片	黒曜石	2.96	2.13	0.52	1.90	
78	15	④	SM001 MH	001	刮片	黒曜石	2.84	1.72	0.58	3.20	
78	16	④	SM001 NE	002	石器	チャート	3.40	2.16	0.85	5.20	
78	17	④	SM001 SW	002	石器	黒曜石	1.35	1.09	0.41	0.50	
78	18	④	SM001 SW	002	前鋸	チャート	5.97	1.93	0.86	11.40	
78	19	④	SM001 SW	002	前鋸	黒曜石	1.34	1.46	0.71	1.50	
78	20	④	SM002 SW	002	前鋸	チャート	5.47	4.20	1.29	36.40	
77	3	⑤	SM001 SW	002	前鋸	黒曜石	2.54	1.13	0.58	1.40	
77	22	⑤	SM001 MH	002	刮片	砂岩	5.35	4.53	2.16	66.70	
77	23	⑤	SM001 MH	002	刮片	黒曜石	7.69	5.91	1.29	95.90	
77	24	⑤	SM001 MH	002	刮片	黒曜石	5.98	5.11	6.13	197.90	
77	25	⑤	SM001 KE	002	刮片	安山岩	14.46	11.45	5.82	1187.80	
77	26	⑤	SM001 KE	002	打削石斧	安山岩	8.91	4.98	2.00	109.80	
77	28	⑤	SM001 NE	002	刮片	砂岩	7.83	4.26	2.31	114.70	
77	27	⑤	SM001 SW	002	石器	新風岩	5.59	1.64	0.56	4.50	
77	29	⑤	SM001 SW	002	石器	安山岩	13.12	5.29	8.78	466.40	
77	30	⑤	SM001 SW	002	石器	鈍化尖端	15.72	4.52	4.10	310.60	
77	31	⑤	SM001 SW	002	石器	黒曜石	5.16	4.71	0.92	24.00	
-	-	⑤	SM001 MH	001	刮片	黒曜石	1.97	1.92	0.94	2.60	
-	-	⑤	SM001 MH	001	刮片	黒曜石	2.07	2.65	0.76	2.70	
-	-	⑤	SM001 MH	001	刮片	チャート	3.33	4.77	1.97	12.60	
-	-	⑤	SM001 MH	002	刮片	チャート	2.38	3.65	0.91	7.50	
-	-	⑤	SM001 MH	002	刮片	チャート	3.02	2.72	0.84	5.20	
-	-	⑤	SM001 MH	002	刮片	チャート	2.80	3.66	0.74	7.50	
-	-	⑤	SM001 MH	002	刮片	チャート	1.88	1.77	0.37	1.30	
-	-	⑤	SM001 MH	002	刮片	黒曜石	2.69	2.02	0.49	1.60	
-	-	⑤	SM001 MH	002	刮片	黒曜石	2.49	0.53	1.45	1.60	
-	-	⑤	SM001 MH	002	刮片	黒曜石	1.50	2.10	0.61	2.10	
-	-	⑤	SM001 MH	002	刮片	黒曜石	1.92	1.70	0.44	1.10	
-	-	⑤	SM001 MH	002	刮片	黒曜石	2.07	1.80	0.47	0.80	
-	-	⑤	SM001 MH	002	刮片	頁岩	1.59	2.40	0.33	1.70	
-	-	⑤	SM001 MH	002	刮片	黒曜石	1.46	0.95	0.18	0.20	
-	-	⑤	SM001 MH	002	刮片	黒曜石	1.46	0.64	0.34	0.20	
-	-	⑤	SM001 MH	002	刮片	黒曜石	0.99	1.10	0.35	0.30	
-	-	⑤	SM001 MH	002	刮片	黒曜石	0.71	1.15	0.31	0.20	
-	-	⑤	SM001 MH	002	刮片	黒曜石	0.66	0.99	0.30	0.10	
-	-	⑤	SM001 MH	002	刮片	黒曜石	1.06	0.94	0.13	0.10	
-	-	⑤	SM001 NE	001	刮片	黒曜石	1.61	1.70	1.06	2.00	
-	-	⑤	SM001 NE	002	刮片	黒曜石	2.69	1.87	0.36	1.50	

番号	地物 番号	エリア	地図・グリッド番号	登記番号	標識	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (kg)	備考
-	-	(3)	SM001 NE	002	金剛石原片	砂岩	1.94	1.82	0.45	1.70	
-	-	(3)	SM001 SW	001	金剛石原片	チャート	0.85	2.25	0.24	1.50	
-	-	(3)	SM001 SW	001	金剛石原片	砂岩	1.24	1.49	0.49	1.00	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	3.43	2.68	1.02	5.90	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	2.58	1.80	1.06	6.10	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	1.85	1.58	1.06	3.70	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	2.43	2.13	0.79	3.00	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	2.13	2.89	1.02	5.30	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	2.14	2.46	0.90	2.50	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	2.48	1.78	1.26	3.20	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	1.79	2.25	0.63	1.60	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	1.61	1.18	0.67	1.80	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	1.34	2.42	0.54	1.80	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	1.57	1.58	0.59	1.00	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	1.69	0.90	0.35	0.60	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	頁岩	2.21	1.30	0.51	1.60	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	チャート	1.07	1.10	0.51	0.60	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	瓦礫岩	1.37	1.41	0.21	0.40	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	1.29	1.31	0.23	0.30	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	1.17	1.57	0.23	0.30	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	1.35	1.71	0.16	0.30	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	1.37	0.85	0.49	0.90	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	0.81	1.55	0.57	0.90	
-	-	(3)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	1.16	1.12	0.24	0.30	
-	-	(2)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	0.95	1.43	0.18	0.20	
-	-	(2)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	1.42	0.83	0.26	0.20	
-	-	(2)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	1.58	0.59	0.10	0.10	
-	-	(2)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	1.00	0.80	0.15	0.10	
-	-	(2)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	0.75	0.80	0.10	0.10	
-	-	(2)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	0.59	0.86	0.27	0.10	
-	-	(2)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	0.64	0.58	0.10	0.08	
-	-	(2)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	1.06	0.39	0.10	0.10	
-	-	(2)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	0.76	0.47	0.10	0.08	
-	-	(2)	SM001 SW	002	金剛石原片	瓦礫岩	0.62	0.61	0.08	0.03	
-	-	(4)	SM001 SW	002	金剛石原片	砂岩	0.63	0.41	0.05	0.02	
-	-	(4)	SM001 ?		金剛石原片	砂岩	2.23	1.51	0.94	2.60	
-	-	(4)	SM001 ?		金剛石原片	砂岩	1.51	1.28	0.61	0.90	
-	-	(4)	SM001 ?		金剛石原片	砂岩	1.17	1.40	0.56	0.90	
-	-	(2)	SM001 ?		金剛石原片	砂岩	1.20	1.40	0.50	0.90	
-	-	(2)	SM001 ?		金剛石原片	砂岩	1.13	0.58	0.34	0.30	
-	-	(2)	SM001 ?		金剛石原片	砂岩	0.84	0.92	0.45	0.30	
-	-	(4)	SM001 ?		金剛石原片	砂岩	0.69	0.83	0.42	0.20	
-	-	(4)	SM001 ?		金剛石原片	砂岩	2.07	1.22	0.43	1.00	
78	32	(4)	SK018	001	石墨	漂砾石	0.91	0.99	0.22	0.20	
78	33	(4)	SK019	001	石墨	チャート	2.98	2.51	0.57	2.70	
78	34	(6)	SK020	001	調節板原片	チャート	3.49	2.80	0.65	5.30	
78	35	(3)	SK020	009	調節板原片	頁岩	2.15	2.31	0.52	2.10	Pt出土
78	37	(2)	SK020	006	調節板原片	頁岩	1.97	1.95	1.96	3.600	Pt出土
78	38	(2)	SK020	006	調節板原片	頁岩	2.59	2.11	0.50	2.60	
78	39	(6)	SK020	001	調節板原片	頁岩	3.82	2.64	1.78	1.50	
78	40	(6)	SK020	002	調節板原片	頁岩	7.40	6.05	3.83	26.50	
78	40	(6)	SK020	002	調節板原片	頁岩	7.33	5.37	3.42	16.90	複合
78	40	(6)	SK020	002	調節板原片	頁岩	6.98	5.67	2.67	14.30	複合
-	-	(6)	SK017	001	調節板原片	頁岩	1.46	2.56	0.84	2.30	
-	-	(4)	SK017	001	調節板原片	頁岩	1.88	1.61	0.37	0.60	
-	-	(6)	SK017	001	調節板原片	頁岩	1.58	1.16	0.27	0.40	
-	-	(6)	SK017	001	調節板原片	頁岩	1.63	0.72	0.17	0.10	
-	-	(6)	SK017	001	調節板原片	頁岩	0.59	0.49	0.17	0.05	
-	-	(6)	SK017	001	調節板原片	頁岩	0.13	0.23	0.12	0.05	
-	-	(6)	SK017	001	調節板原片	頁岩	0.43	0.39	0.05	0.05	
-	-	(5)	SK018	001	調節板原片	頁岩	1.83	4.16	0.96	4.50	
-	-	(6)	SK018	001	調節板原片	頁岩	1.84	2.21	0.47	1.40	
-	-	(6)	SK018	001	調節板原片	頁岩	1.46	1.72	0.28	0.60	
-	-	(6)	SK018	001	調節板原片	頁岩	1.38	0.72	0.17	0.20	
-	-	(6)	SK020	001	調節板原片	チャート	1.61	2.11	0.67	2.10	
-	-	(6)	SK020	001	調節板原片	チャート	2.20	1.43	0.34	0.90	
-	-	(6)	SK020	001	調節板原片	チャート	1.06	0.68	0.36	0.60	
-	-	(6)	SK020	001	調節板原片	チャート	2.47	2.58	0.53	2.00	
-	-	(6)	SK020	001	調節板原片	チャート	2.36	3.14	0.87	5.50	
-	-	(2)	SK020	003	調節板原片	チャート	2.73	2.20	0.44	2.10	
-	-	(2)	SK020	003	調節板原片	チャート	1.52	2.25	0.57	1.90	
-	-	(1)	SK020	003	調節板原片	チャート	1.68	1.32	0.42	0.90	
-	-	(4)	SK020	003	調節板原片	チャート	2.08	2.45	0.84	3.70	
-	-	(4)	SK020	003	調節板原片	チャート	2.43	1.46	0.77	2.20	
-	-	(4)	SK020	003	調節板原片	チャート	1.87	2.03	0.30	0.80	
-	-	(6)	SK020	003	調節板原片	頁岩	2.90	1.04	0.62	1.20	
-	-	(5)	SK020	003	調節板原片	頁岩	0.80	0.95	0.17	0.10	
-	-	(6)	SK020	003	調節板原片	頁岩	2.13	1.65	0.28	0.50	
-	-	(6)	SK020	003	調節板原片	頁岩	1.95	1.24	0.40	0.60	
-	-	(6)	SK020	003	調節板原片	頁岩	1.84	0.66	0.47	0.40	
-	-	(6)	SK020	003	調節板原片	頁岩	1.92	1.43	0.49	0.80	
-	-	(6)	SK020	003	調節板原片	頁岩	1.34	1.70	0.19	0.30	
-	-	(6)	SK020	003	調節板原片	頁岩	1.13	0.99	0.13	0.20	
-	-	(6)	SK020	003	調節板原片	頁岩	1.19	1.05	0.15	0.10	
-	-	(1)	SK020	003	調節板原片	頁岩	1.00	1.17	0.17	0.20	
-	-	(4)	SK020	003	調節板原片	頁岩	0.85	0.86	0.11	0.10	
-	-	(4)	SK020	003	調節板原片	頁岩	0.61	0.78	0.15	0.08	
-	-	(2)	SK020	003	調節板原片	頁岩	0.66	0.98	0.14	0.10	

標示番号	地物番号	エリア	道構・グリッド番号	注記番号	基盤	石材	最大長(m)	最大幅(m)	最大厚(m)	重量(t)	備考
-	-	(6)	SK029	003	碎片	黒曜石	0.80	0.66	0.19	0.10	
-	-	(6)	SK029	003	碎片	黒曜石	0.58	0.67	0.11	0.05	
-	-	(6)	SK003	009	碎片	黒曜石	0.95	1.61	0.38	0.43	
-	-	(6)	40446	003	圓片	黒曜石	1.97	2.74	1.43	3.60	
-	-	(6)	40445	002	碎片	黒曜石	1.85	1.88	0.67	1.10	
-	-	(6)	40444	003	碎片	黒曜石	1.18	0.60	0.37	0.45	
-	-	(6)	40444	003	碎片	黒曜石	0.15	1.12	0.16	0.22	
79	42	(5)	SK448	003	打撲石片	黒成岩	3.90	4.02	1.39	74.90	
79	41	(5)	SK449	003	打撲石片	安山岩	8.41	7.30	1.51	105.00	
79	43	(5)	SK449	002	石礫	砂岩	10.71	12.65	6.29	81.50	
79	44	(5)	SK449	001	石礫	安山岩	6.67	3.25	5.52	89.20	
-	-	(5)	SK002	002	碎片	チート	2.19	2.18	0.63	2.60	PjO番士
-	-	(5)	SK002	002	碎片	黒曜石	2.25	1.61	0.75	2.20	PjO番士
-	-	(5)	SK002	001	碎片	黒曜石	1.46	1.53	0.48	1.30	
-	-	(5)	SK447	002	碎片	黒曜石	1.47	1.39	0.48	0.70	
-	-	(5)	SK447	001	碎片	黒曜石	1.20	0.77	0.29	0.30	
-	-	(5)	SK447	001	碎片	黒曜石	1.00	0.81	0.42	0.30	
-	-	(5)	SK447	001	碎片	黒曜石	0.71	1.01	0.34	0.20	
-	-	(5)	SK447	001	碎片	黒曜石	0.71	0.68	0.25	0.10	
-	-	(5)	SK447	001	碎片	黒曜石	0.67	0.93	0.14	0.10	
-	-	(5)	SK447	001	碎片	黒曜石	0.69	0.49	0.07	0.07	
79	45	(5)	SK011	001	両面削り調片	黒曜石	1.73	2.30	0.83	2.90	
79	46	(5)	SK011	002	両面削り調片	チート	1.81	2.57	1.02	4.60	
79	48	(5)	SK014	002	碎片	安山岩	10.02	15.1	8.1	111.90	
79	47	(5)	SK014	002	碎片	黒曜石	1.96	1.86	0.50	1.10	
79	49	(5)	60-13	002	打撲石片	安山岩	6.67	5.28	2.70	10.20	
79	50	(5)	60-41	001	碎片	砂岩	6.59	7.92	3.00	244.90	
-	-	(5)	SK010	001	碎片	黒曜石	1.13	0.90	0.24	0.20	
-	-	(5)	SK011	001	側片	黒曜石	3.90	2.61	1.02	9.20	
-	-	(5)	SK012	002	側片	黒曜石	2.20	1.61	0.55	2.00	
-	-	(5)	SK012	002	側片	黒曜石	2.04	0.61	0.51	1.50	
-	-	(5)	SK012	002	側片	黒曜石	1.80	0.98	0.44	0.70	
-	-	(5)	SK012	002	側片	黒曜石	1.61	0.96	0.29	0.60	
-	-	(5)	SK012	002	側片	黒曜石	0.99	1.68	0.26	0.30	
-	-	(5)	SK012	002	側片	黒曜石	1.00	1.81	0.26	0.26	
-	-	(5)	SK012	002	側片	黒曜石	1.15	0.71	0.39	0.39	
-	-	(5)	SK012	002	側片	黒曜石	0.83	1.14	0.26	0.26	
-	-	(5)	SK012	002	側片	黒曜石	1.17	0.90	0.35	0.20	
-	-	(5)	SK012	002	側片	黒曜石	1.01	0.94	0.30	0.20	
-	-	(5)	SK012	002	側片	黒曜石	0.96	0.81	0.15	0.10	
-	-	(5)	SK012	002	側片	黒曜石	0.90	0.65	0.16	0.16	
-	-	(5)	SK012	002	側片	黒曜石	0.74	0.80	0.10	0.08	
-	-	(5)	SK012	002	側片	黒曜石	0.78	0.69	0.18	0.05	
-	-	(5)	SK013	002	側片	黒曜石	1.51	1.23	0.26	0.26	
-	-	(5)	SK013	002	側片	黒曜石	0.83	1.04	0.21	0.16	
-	-	(5)	SK014	002	側片	黒曜石	0.83	0.66	0.23	0.08	
-	-	(5)	SK014	002	側片	黒曜石	1.39	3.10	1.02	4.10	
-	-	(5)	SK014	002	側片	黒曜石	1.55	1.92	0.31	0.70	
-	-	(5)	SK014	002	側片	黒曜石	1.07	1.92	0.42	0.60	
-	-	(5)	SK014	002	側片	黒曜石	1.08	1.14	0.27	0.30	
-	-	(5)	SK014	002	側片	チート	1.92	2.19	0.37	1.60	
-	-	(5)	60-09	001	側片	安山岩	1.56	3.58	1.20	12.60	
-	-	(5)	60-13	002	側片	安山岩	2.00	2.29	2.31	17.60	
-	-	(5)	60-13	002	側片	黒曜石	1.57	1.92	0.31	0.70	
-	-	(5)	60-13	002	側片	黒曜石	0.76	0.84	0.17	0.16	
-	-	(5)	60-13	002	側片	黒曜石	0.72	0.57	0.10	0.16	
-	-	(5)	60-13	002	側片	黒曜石	0.52	0.52	0.10	0.06	
-	-	(5)	60-13	002	側片	黒曜石	0.49	0.61	0.14	0.06	
-	-	(5)	60-23	002	側片	黒曜石	1.75	1.19	0.21	0.30	
-	-	(5)	SK013	001	側片	黒曜石	2.18	2.70	1.08	3.90	
80	51	-	100-54	001	石礫	安山岩	3.31	1.83	0.62	1.80	
80	54	-	117-79	001	側片	安山岩	3.31	3.63	1.18	12.60	
80	55	-	T4-4	001	打撲石片	砂岩	7.11	8.00	5.67	327.60	
-	-	-	T4	001	側片	黒曜石	2.52	1.65	1.09	2.90	
-	-	-	T4	001	側片	黒曜石	1.28	1.42	0.85	1.30	
-	-	-	T4	001	側片	黒曜石	1.62	1.30	0.32	0.66	
80	56	-	T5	002	電気石片	砂岩	7.61	3.35	2.33	70.60	
-	-	-	T5	001	側片	黒曜石	3.11	3.41	1.61	6.90	
-	-	-	T5	001	側片	チート	2.40	3.09	0.83	7.40	
-	-	-	T5	001	側片	黒曜石	2.00	2.02	0.49	1.60	
-	-	-	T5	001	側片	黒曜石	1.50	2.22	0.49	1.40	
-	-	-	T5	001	側片	黒曜石	2.27	1.15	0.92	0.60	
-	-	-	T5	001	側片	黒曜石	1.76	1.01	0.63	0.70	
-	-	-	T5	001	側片	黒曜石	0.97	1.15	0.28	0.30	
-	-	-	T5	001	側片	黒曜石	0.87	0.87	0.19	0.16	
-	-	-	T5	002	側片	黒曜石	1.61	2.05	0.65	1.80	
-	-	-	T5	002	側片	黒曜石	1.67	1.78	0.34	0.80	
-	-	-	T5	001	側片	黒曜石	1.58	2.06	0.83	3.40	
-	-	-	T5	001	側片	黒曜石	2.29	1.82	0.76	3.10	
-	-	-	T5	001	側片	黒曜石	1.95	2.06	0.54	2.00	
-	-	-	T5	001	側片	黒曜石	1.19	1.63	0.53	1.00	
-	-	-	T5	001	側片	黒曜石	0.93	1.26	0.28	0.40	
80	52	-	T9	001	右角	チート	2.64	2.06	0.34	1.30	
80	53	-	注記なし	右角	黒曜石	1.36	1.33	0.28	0.45		
-	-	-	注記なし	側片	チート	2.68	3.62	1.09	8.50		

## 第4節 古墳時代

### 1 山小川古墳群と周辺の古墳

山小川古墳群は、養老川中流域で東側から合流する平蔵川の上流域に位置している。周辺の古墳はほとんど未確認で、本古墳群も新発見である。今回発掘調査の対象となった円墳を1号墳、県道鶴舞馬来田線を挟んで北側に位置する古墳を2号墳とした。付近では約50m南西の竹林に2~3基の墳丘があり、1基は径20m・高さ15mの規模をもつ。さらに、500mほど南の柏野遺跡で円墳(柏野1号墳)が確認されており、既に宅地造成や道路施設によって削平された古墳が少なくないと思われる。また、900m西の永田・不入窓跡群に接して永田行人塚と称される塚が2基あり、円墳を転用したものと考えられているが詳細は不明である。

今年度(平成20年度)調査中の柏野1号墳は墳丘径27m、見かけの高さ25~45mの円墳で、墳丘表土から中期末~後期初頭と推定される須恵器高坏蓋や壺の破片が出土している。周辺の調査例では、1.8km西の市原市大和田の緑岡古墳群がある。緑岡古墳群は養老川本流の右岸に位置するが、本例に最も近い調査例で、円墳1基と方墳2基が検出された。円墳は墳丘長径14mのやや東西に長い墳丘をもち、墳丘南側の斜面には6世紀後半~7世紀前半の横穴墓群が存在したため、横穴墓に伴う墳丘かと推定されるが時期の判る遺物は出土していない。方墳はいずれも周溝の一部が残るのみで規模・溝の形態とも不確定であるが、1基は墳丘1辺10m以上の規模をもち、周溝中央部が幅広くなるようである。遺物は出土していない。方墳の墳丘南側の斜面にも横穴墓が造られているが、主軸方向が異なり、両者の関連は希薄である。

緑岡古墳群の西800mには番後台遺跡があり、99棟にのぼる古墳時代の竪穴住居跡が調査された。そのうち79棟はカマドをもたない前期~中期前半の住居跡で、中期前半と判断できる5棟を除く大半は前期に属すると見られる。緑岡古墳群の方墳が前期に遡る可能性を示しているといえよう。また、中期後半に捉えられる住居跡は3棟あり、山小川古墳群の築造背景を考える上でも注目される遺跡である。

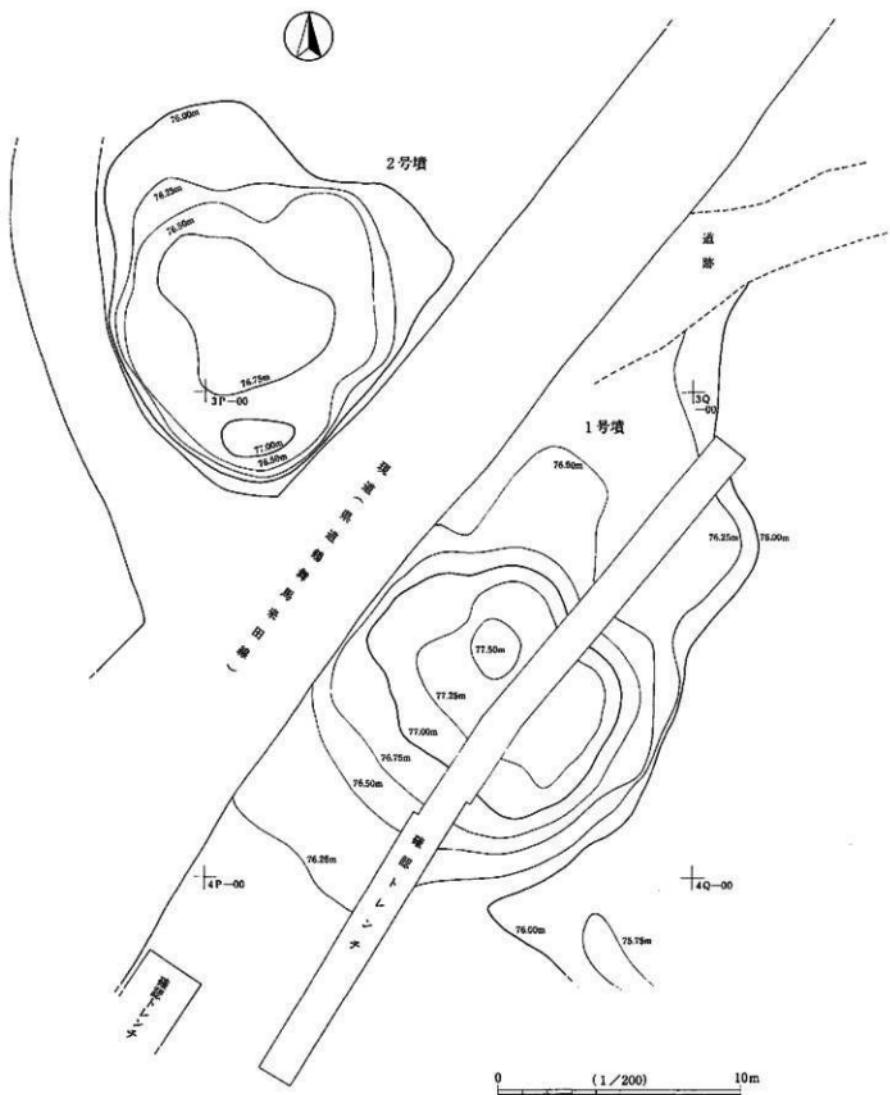
一方、平蔵川と養老川本流の合流地点から1.7km下った右岸の台地上には江子田古墳群がある。これは養老川中流域最大の古墳群で、墳丘長45mの前方後円墳金環塚古墳をはじめ、前方後円墳4基・円墳15基・方墳21基・墳形不明古墳6基の46基が確認されている。金環塚古墳は盾形の二重周溝をめぐらし、金製耳環のほか金銅装馬具一式・鉄製鍛冶具など充実した副葬品をもつ前方後円墳で、養老川流域の大型古墳では唯一後期初頭に位置づけられる例である。古墳群の造営は前期前半の方墳群に始まり、中期~後期の円墳群、後・終末期の方墳まで続いている。また、群中最大の前方後円墳(墳丘長55.5mの富士台古墳)も盾形周溝をめぐらしており、金環塚古墳より古く中期後半に遡る首長墓が存在する可能性もある。本古墳群はこれらの調査例によりさらに奥まった河岸段丘上に位置しており、養老川流域最奥部の古墳群といえる。

### 2 山小川1号墳(SM001)

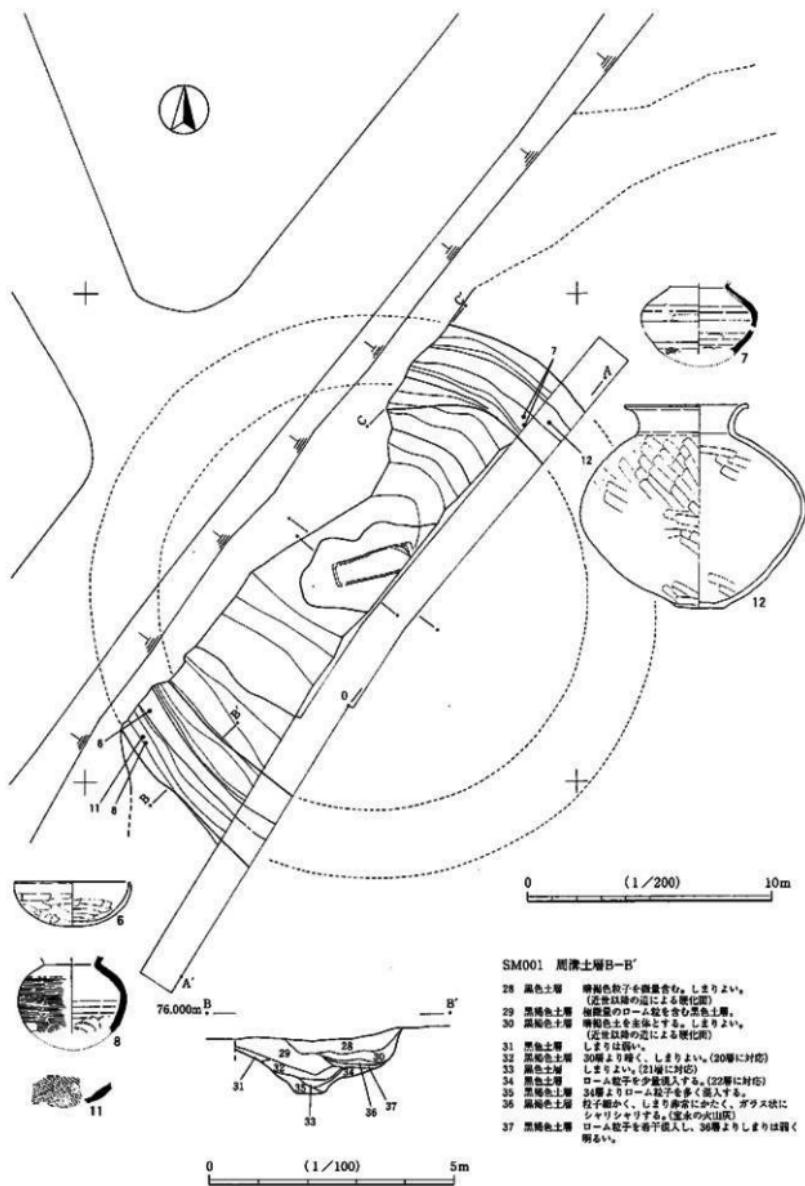
#### 墳丘と周溝(第81~83図、図版17・18)

調査前の地形図を見ると、1号墳は2号墳と共に台地の北東縁辺に立地し、眼下に平蔵川の開析谷が見える。台地の南西側に位置する前掲の柏野1号墳も、やはり平蔵川の開析谷に隣んでいる。1号墳は当初径約17m・高さ1.3mほどの円丘状の高まりで、調査前の現況測量図では北東側に低い張り出し状の等高線が見える。墳頂部の標高は77.63m、墳裾部の標高は76.30mである。西側裾部は現道の鶴舞馬来田線によつて切られている。また、墳丘の東側は調査区外にあり、調査の対象となった墳丘はおよそ半分に限られる。

確認調査の際、調査区東側に幅1.5m・長さ32mのトレンチが設定され、周溝検出面まで掘削された。



第81図 山小川1号墳(SM001)・2号墳現況図



第82図 1号墳(SM001)全体図

このため、墳頂の中央部にあった埋葬施設の一部が失われた。また、1号墳の墳丘表土を除去すると、西側の墳丘は現道のり面工事によって約半分が削平されていることが判明した。実際に調査できた墳丘は、全体の1/4弱ということになる。

調査区内の周溝は弧状にめぐっており、北東側に張り出しが存在しないことが分かった。また、調査区内に墳丘の中心部分が残存することも明らかになった。推定される墳丘の規模は径19.6～20.0m（周溝内側の下端間）で、墳頂部には径7m前後の平坦面が存在した。墳丘は半球形で、裾部にテラス等の施設は認められない。

北東側の周溝は上端幅28～33m、下端幅0.7～0.8m、深さ0.8～1.4m、南西側の周溝は上端幅2.9～3.3m、下端幅0.6～0.8m、深さ1.3～1.4mで、断面形は逆三角形に近い。周溝内には腐植土を主体とした黒色土・黒褐色土が堆積する。また、周溝が縄文土器の包含層に掘り込まれているため覆土中には多量の縄文土器が混入している。

墳丘の基盤となる整地層は厚さ28～40cmの黒色土層で、その直下に縄文土器の包含層が堆積している。残存する盛土は旧表土から1.7mに及んでおり、流出した土量を勘案すると当初の盛土は2m前後に達していたと考えられる。墳丘の土層断面からその構築課程を推定すると、整地した墳丘の外縁部にドーナツ状の土手を築き、次いで中心部を充填する。ここで一旦墳丘を平らに整地し、さらに上段の周縁にドーナツ状の盛り土を行い、中心部を高く盛り上げている。この第2段階の盛り土上面は旧表土から約1mの高さにあり、埋葬施設の底面付近に相当している。第2段階の盛り土上面で埋葬施設の構築を行ったことが推定される。これより上の墳丘盛土は草根等の擾乱によって表土化し、分層が困難になっている。

最初の土手状盛り土には主に黒色土が用いられ、中心部は暗褐色土が主体である。上段の外周部にはロームを主体とした明褐色土、その内側には黒褐色土が用いられている。これは、墳丘の盛り土と周溝の掘削を並行して行った結果と思われ、最初の黒色土は墳丘裾部の削り出しによって得られた土砂であろう。

#### 周溝内の遺物出土状況（第82図、図版17・18）

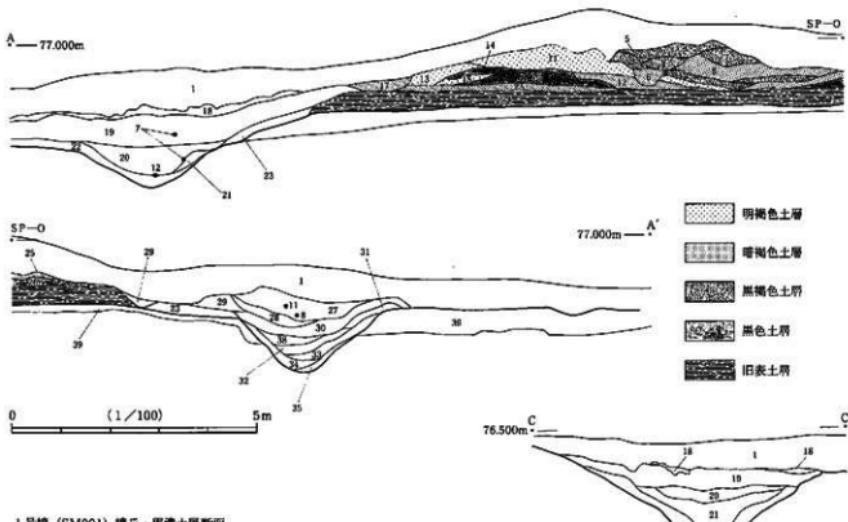
周溝内には多量の縄文土器に混じって、本古墳に伴う土器類が出土した。北東の周溝では須恵器の小型壺〔鷹〕(7)と土師器の大型壺(12)が出土している。いずれも墳丘側で出土しており、破損していた。特に、土師器大型壺は周溝底近くにまとまって出土し、かなり細かく割れている（図版18）。おそらく、墳丘構築後の早い段階で墳丘に置かれていたものが転落したか、周溝内で意図的に破碎されたものであろう。須恵器小型壺は覆土中層で出土した碎片で、口縁部と底部の破片を欠くことから未調査区にも散在しているものと思われる。

南西の周溝内では土師器壺(6)・須恵器壺(8～11)が出土している。土師器壺は2つにひび割れていたが、完形で周溝底に置かれたような状態で出土した（図版17）。須恵器壺(8～11)は覆土上層で出土した碎片で、同一個体であるが接合しなかった。これも口縁部がほとんど出土していないため残りの碎片が未調査区に及んでいる可能性が高い。

#### 埋葬施設（第84図、図版18）

墳丘中央部で木棺直葬の埋葬施設が1基検出された。草根によって擾乱された墳丘表土層を25cmほど掘り下げた所で鐵錆の塊が出土し、鐵製品を副葬した埋葬施設が存在することが分かった。

木棺痕は長さ2.3m・幅75～90cmの範囲に残存し、長さ5m以上・幅3m前後の掘り方内に納められていたと推定される。木棺の固定や裏ごめに粘土を使用した痕跡がないため木棺の覆土と盛土の判別は難し



1号墳(SM001) 墓丘・周溝土層断面

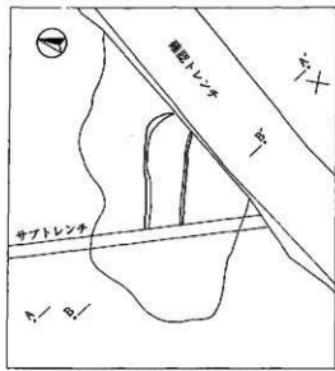
- 1 表土  
 2 黒褐色土層 暗褐色粒子を微量混入。1mの大ローム粒を若干含む。純土質部を混入。しまりよい。  
 3 黒褐色土層 2層より多い。暗褐色の混入も少ない。純土質部を混入。しまりよい。  
 4 黒褐色土層 2層より薄く。3層よりやや多い。しまりよい。  
 5 黒褐色土層 3、4層より多く。しまりもやや弱い。  
 6 黒褐色土層 ローム粒子を少混入。3mまでの大ローム粒を若干含む。しまりよい。  
 7 黒褐色土層 2層よりやや多い。暗褐色を微量。ローム粒子を微量混入。しまりよい。  
 8 黒褐色土層 1m~10mまでの暗褐色の粒子一塊。20cmのかけた黒褐色の混合層。  
 9 黒褐色土層 黒褐色の中に約2cmの幅で横張る複数の塊のようになり黒褐色土が混入する。しまりよい。  
 10 黒褐色土層 黑褐色土の中にローム粒、暗褐色粒子を斑状に呈し、混入する。しまりよい。  
 11 明褐色土層 ローム土層体。  
 12 明褐色土層 ローム土層とすると、暗褐色土を少量混入する。  
 13 明褐色土層 暗褐色土を主体とし、黒褐色土と多く混入する。しまりよい。6層に比べ弱い。  
 14 黑褐色土層 黒褐色土を主体とし、3mの大ロームの塊を若干含む。  
 15 ローム混入層 黒褐色土を多く含む。ともに10cmの塊が複数している。  
 16 黑褐色土層 黒褐色土を主とし、1~3cmの大暗褐色土の塊を若干含む。しまりよい。  
 17 暗褐色土層 暗褐色土を主とし、ローム粒の塊と暗褐色土の塊の混合層。  
 18 暗褐色土層 ローム粒子を多く混入する。  
 19 黑褐色土層 暗褐色土を多量含む。  
 20 黑褐色土層 19層より多く、ローム粒子の混入がやや多く、しまりもやや弱い。
- 21 黒褐色土層 20層に比べ、ローム粒子の塊が更に多い。しまりはよい。  
 22 黒褐色土層 黒褐色土を主体とするが、ローム粒子を少量混入する。しまりはよい。  
 23 黒褐色土層 19層に比べ弱い。  
 24 黒褐色土層 (旧表土)。  
 25 明褐色土層 10cm前後の黑色土の塊を含む。  
 26 暗褐色土層 暗褐色粒子を2~5cmの大塊を単層として混入する。  
 27 暗褐色土層 ローム粒子を若干含む。しまりが弱い。  
 28 黑褐色土層 暗褐色粒子を微量含む。しまりが弱い。(近貴振跡の窓による軟化面)  
 29 黑褐色土層 しまりが弱い。  
 30 黑褐色土層 暗褐色土を主体とする。しまりよい。(近貴振跡の窓による軟化面)  
 31 黑褐色土層 しまりは弱い。  
 32 暗褐色土層 30層より強く、しまりよい。(20層に対応)  
 33 暗褐色土層 しまりよい。(21層に対応)  
 34 黑褐色土層 ローム粒子を少量混入する。(22層に対応)  
 35 黑褐色土層 34層よりローム粒子を多く混入する。  
 36 黑褐色土層 空洞部をく、しまり非常にかたく、ガラス状にシャリシャリする。(空水の火山田)  
 37 黑褐色土層 ローム粒子を若干含み、36層よりもしまりは弱く弱い。  
 38 暗褐色土層 混合層のローム粒を含む黒褐色土層。  
 39 黑褐色土層 黒褐色土層を含む。

第83図 1号墳墳丘・周溝土層断面図

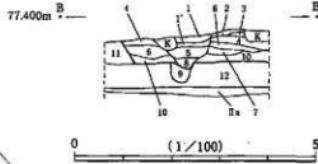
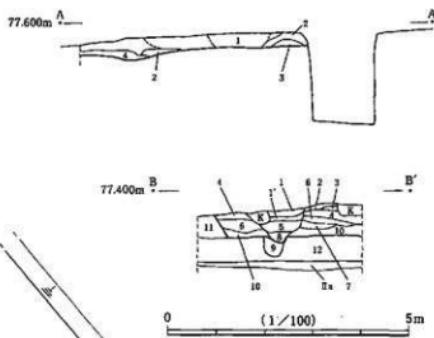
かったと思われるが、比較的さらさらした粒子の細かい暗褐色土層が木棺痕として捉えられており、検出面から4.4~23.4cm掘り下がったところで底面に達している。掘り方は、平面的には明瞭に捉えられていないが、覆土の土層断面を見ると盛り土を切り込んだ深さ48~60cmの掘り方が記録され、墳丘盛土とは明らかに異なる細かな土層の堆積を確認できる。

長さ95cmの直刀が木棺痕の長側に沿って出土し、木棺の向き・幅を知る貴重な手がかりとなった。また、東小口付近では鹿角袋の鱗(4)・錐と見られる工具(3)・鐵鏃(2)がまとまって出土し、東小口の位置を裏付けている。これらによって捉えられた木棺の規模は、長軸2.39m(底面2.29m)以上・東小口幅91.5cm(底面75.0cm)・西小口幅76.5cm(底面61.0cm)・深さ23.4cm以上ということになる。

木棺の主軸はほぼ東西に置かれ、東から18°北に傾いている。南の長側に沿って出土した直刀は切先を



埋葬施設掘り方検出状況 (1/50)

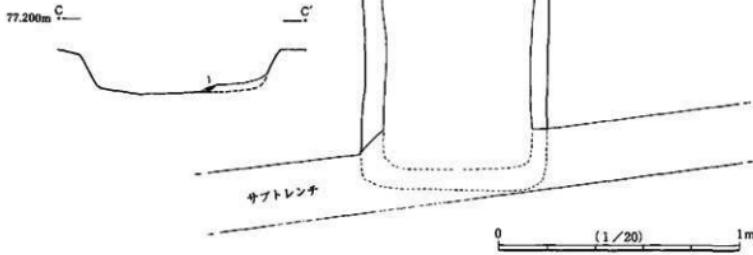


#### 埋葬施設土層A-A'

- 1 黒褐色土 ソフトロームを少し含む。やや重らかでしまりがな。
- 2 黒褐色土 ソフトロームと1よりや多く含む。ローム量を少し含む。
- 3 黒褐色土 ブロック状のロームをや多く含む。ローム量を少し含む。
- 4 明黄色土 ソフトロームをやや多く含む。粘質土をやや多く含む。

#### 埋葬施設土層B-B'

- 1 黒褐色土 さらさらした粒子。小ロームブロックを含む。(主体複土)
- 1' 黒褐色土 にじみ出たロームを含む。
- 2 黑褐色土 ロームブロックを主体とする。かたい。
- 3 黑褐色土 ローム量を含む。
- 4 黑褐色土 ロームブロック、粘質土を含めた層。
- 5 黑褐色土 ローム量を主体とする。均一。粘質性あり。
- (複合層) 黑褐色土 小ロームブロックを含む。
- 6 黑褐色土 小ローム粒、小ロームブロックを含む。
- 7 黑褐色土 小ロームブロックを含む。やわらか。
- 8 黑褐色土 ローム量を主体。やわらか。
- 9 黑褐色土 ローム量を主体。小ブロックを含む。
- 10 黑褐色土 ローム量を主体。しまりない。さくさく。
- 11 明黄色土 小ロームブロック主体。しまりない。
- 12 黑褐色土 大ロームブロック。粘土をブロック状に含む。



第84図 1号墳埋葬施設

西に向かって、刃部を外（南）側に置いている。茎尻は東小口から約70cmの位置にあり、刃部と長側の間は約20cm空いている。これによって遺骸は頭部を東に向かって、直刀の内側に納められていたことが分かる。東小口付近の遺物群は、頭部の後ろに置かれていたと考えられ、鉄鎌は矢柄から外して副葬した可能性がある。また、鑿・錐状工具は切先を西に向かっているが、鉄鎌は東に向かっている。なお、いずれも欠損部分が失われており、鉄鎌は鎌身の一部がやや離れて出土するなど、草根や小動物の擾乱を受けていることを考慮する必要がある。

鉄鎌の茎から西小口の残存部までは1.89mあり、この部分に遺骸を伸展しても充分な長さである。上記のように木棺痕の残存部長は2.3mで、幅25cmのサブレンチを超えて西側には伸びていないことからサブレンチの中に納まるものと考えると、木棺の長さは底面で約2.5m、検出面で約2.7mと推定される。

#### 埋葬施設の遺物（第85図、図版19）

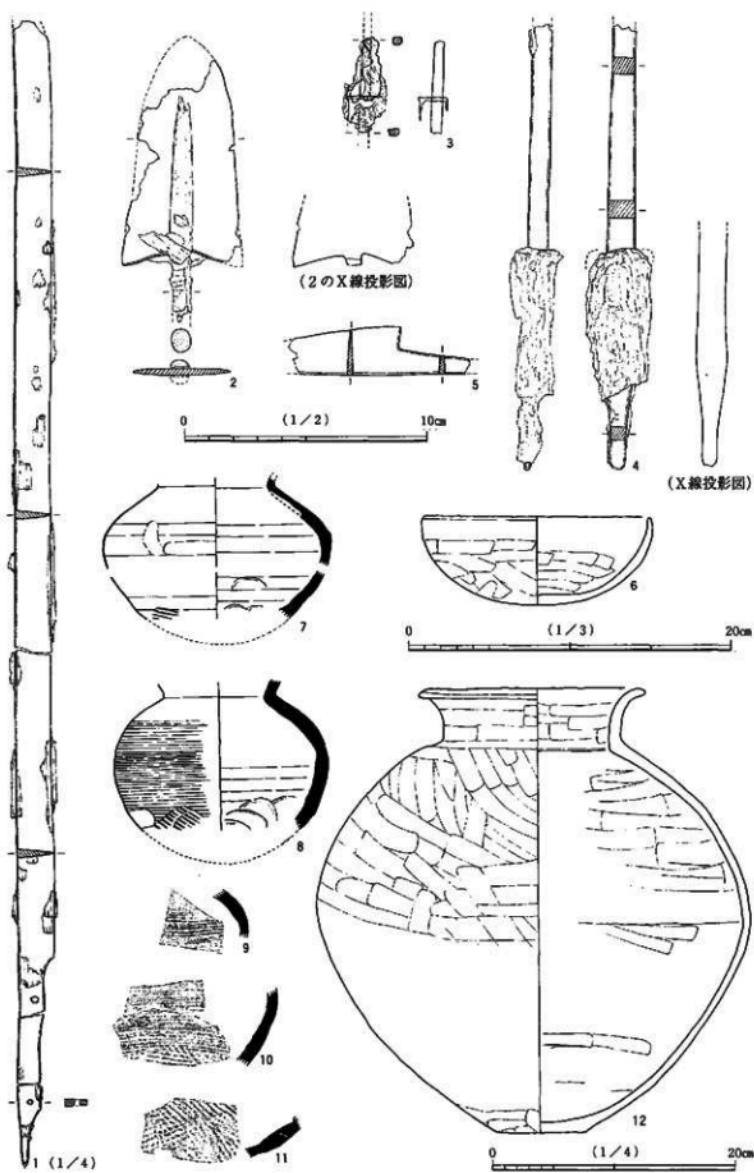
木棺内から出土した遺物は、直刀(1)・鉄鎌(2)・錐と見られる工具(3)・鹿角装飾(4)・刀子(5)各1点である。それぞれ1点ずつに限られた副葬品であるが、古墳の規模の割りには充実した内容である。なお、個々の所見に記した計測値は、計測器具の精度や遺物の状態によって小数点以下一桁の場合と二桁の場合が生じている。また、重量は保存処理の初期対応を行った後の計測値である。

直刀(1)は切先を欠くほかは茎尻まで遺存し、刃部で1か所、茎部で2か所の割れ目がある。残存する総長は94.6cm、刃部長77.6cm、刃部幅28.5～30.5cm、背幅7.0～7.5mm、茎長17.1cm、茎幅18.0mm、茎尻幅5.0mm、茎厚4.5～6.0mmである。関は刃部との境と茎尻の2か所にあり、いずれも弧を描いている。関の付近にはそれぞれ目釘孔がある。鞘木・把木と思われる木質が全体に付着している。重量は904.69gである。

鉄鎌(2)は短い舌状の茎をもつ長三角形の広根鎌である。3片に割れて出土し、切先と片側の逆刺を欠く。木製の根抜みが遺存し、鎌片面ではほぼ完存している。刃部の現存長84.8mm、根抜みを含めた茎の現存長27.2mm、全体の現存長は108.5mmである。舌部は根抜みに覆われているためX線写真で確認したが、舌の中程で割れて分離していたため腐蝕して輪郭が不明瞭な状態である。長さは4.2mm前後と見られる。刃部中央部の幅40.1mm、逆刺部の復元幅は約50mmで長さの割りに幅の狭い形態である。逆刺は浅く、切り込みの深さは4.5mm程度である。根抜みの大きさは茎の断面圓化部で幅8.2mm、厚み9.3mmである。根抜みに別の木材（棺材か）が付着しており、それを含む重量は32.10g。

3は表面に皮革状の膜が付着する棒状の鉄製品で、木柄の一部が残っている。棒状部の断面は3.6×3.9mm～4.5×3.7mmの横円、あるいは隅丸方形で柄部の方がやや太い。木柄の幅は12～13mmで、菱形部端面がやや幅広く17.7mmである。このような形態から錐である可能性が高いと考えられる。現存長38.7mm、柄部残存長15.2mm、重量4.08mmである。木柄は鉄分を吸収して堅くなってしまい、表面には鉄鎌が吹き出している。なお、図の裏面には棺材、あるいはこれらの鉄製品を入れた容器の可能性がある別の木質が付着している。

鹿角装の鑿(4)は刃部を欠くが、厚みのある断面方形の棒状部～茎の形態によって鑿と判断した。棒状部は幅を減じて茎に移行するが、関は左右非対称である。茎の長さはX線投影図の左側が3.8cm、右側が4.4cmである。柄部は鹿角鑿で、上半は比較的良く遺存し、上端には旧状を留めた部分も見られる。現状の柄部最大径は27.7mmあり、本来の径は28mm以上であったと推定される。現存長18.32cm、鹿角柄部長8.98～9.02cm、棒状部幅10.4～12.5mm、棒状部厚7.2～8.6mm、茎中央部幅6.5mm、同厚5.6mm、茎尻厚2.2mmで、棒状部に比べて茎尻が極めて薄く作られている。重量は87.40gである。



第85図 1号墳(SM001)出土遺物

刀子(5)は切先と茎尻を欠失しているが、一見して刃部の幅が広く、茎の長い形態であることがわかる。刃部の幅は関部で20.7mm、残存する刃部中央部で19.0mm、切先側の破断面では14.7mmとなっており、切先に向けて急角度で幅を減じている。刃部の角度から見て、刃部の長さは70mm前後であったと推定される。茎の幅は関部で11.8mm、中央部で7.8mmと刃部の約半分になっている。刃部とのバランスを考えると、茎の長さは50mmになろう。現状の全長は74.9mm、刃部長46.8mm、茎長29.7mmで、重量は10.17gである。

#### 周溝内出土遺物（第85図、図版20）

周溝内で出土した遺物は、土師器壺1(6)・壺1(12)、須恵器小型壺2(7・8・11)点である。土師器壺(6)は口縁端部を部分的に欠くが、ほぼ完形である。比較的深い丸底の壺で、口径14.0cm・器高5.5cmである。底部外面はヘラケズリによって調整され、その痕を明瞭に残している。内面はヘラナデ調整の後、焼いて平滑に仕上げられている。かなり緻密で精良な土で作られており、内外面とも赤彩されている。

土師器壺(12)は口縁部90%・肩部95%・胴部50%・底部70%が接合しほぼ全容を復元できたが、ほかに表面が剥離したり破断面が摩滅して接合できなかった破片が相当量あるため、完形で周溝内に遺存したものと思われる。口縁端部が外反する大型の短頸壺で、口径（内）17.3～18.5cm・口径（外）18.7～19.8cm・頸部径15.0～15.5cm・胴部最大径35.9cm・底径7.6cm・口頸部高4.4cm・器高36.9cmである。口頸部は内外面とも横方向のヘラナデ調整、胴部は外面が横方向のヘラケズリ後縱方向のヘラナデ調整、内面は横方向のヘラナデ調整である。底部および底面はヘラケズリによって調整されている。胎土には砂粒・褐色粒が多く含まれ、白色針状物質・螢母が混入している。内外面とも明るい橙色で、肩部～胴部の2か所に大きな黒斑がある。

7の須恵器小型壺は、肩部10%・胴上部15%・底部10%ほどの破片が遺存する。口頸部は頸部の立ち上がりを若干残すのみである。肩～胴上部がソロバン形に張る特徴的な器形によって趣と推定される。肩部外面は自然釉がかかるため調整痕が見えないが、胴部は回転ヘラケズリ後手持ちナデ調整である。内面は回転ナデ調整である。底部は叩き板成形で、外面に平行叩き板痕、内面に無紋の当て具痕がある。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデによって調整されている。頸部復元径7.2cm・胴部復元径14.0cm・現状の復元高8.7cmである。胎土にはφ1mm前後の白色砂粒が含まれ、表面には黒色細粒が見える。表面は良く還元して灰色に発色しているが、中心部は完全に還元していないため灰赤色である。

8～11の須恵器小型壺は頸部下端～底部付近の破片が接合した。頸部下端12.5%・肩部25%・胴部～底部付近25%が遺存する。図示したもののほかに肩部2片、胴下部～底部1片の破片がある。球形の胴部をもつ丸底の壺で、7に比べてかなり厚手のつくりである(7の器壁厚4.3～5.9mm、8の器壁厚5.5～7.0mm)。肩部～胴部外面にはカキ目(1単位8条)が施され、内面は回転ナデ仕上げである。底部は叩き板成形で、外面には手持ちヘラケズリが加えられている。頸部内面・肩部外面・胴下部～底部外面に降灰が見られる。頸部復元径6.8cm・胴部復元径13.0cm・現状の復元高9.2cmである。胎土にはφ1mm弱の白色砂粒とφ1～2mmの黒色粒が多く含まれ、良好に還元している。内外面とも灰色である。

#### 古墳の時期

埋葬施設、および周溝から出土した遺物によって本古墳の時期は中期後半と推定することができる。埋葬施設に納められていた大型の鉄鎌、鹿角装の鑿や錐等の鉄製工具類は中期後半になって広く副葬される鉄製品である。刃部の幅が広い刀子・2段闇の茎をもつ大刀も同時期の特徴を備えている。周溝出土の須恵器小型壺類は陶邑TK23型式期に位置づけられ、土師器壺・大型壺も中期後半の型式である。

## 第5節 中近世

中近世の遺構は調査区西側を中心に土坑4基、溝4条が検出された。遺物の出土はなく性格は不明である。遺物はグリッドから陶磁器類が出土したが、いずれも小破片であり図化できなかった。

### 1 土坑

#### SK001 (第86図)

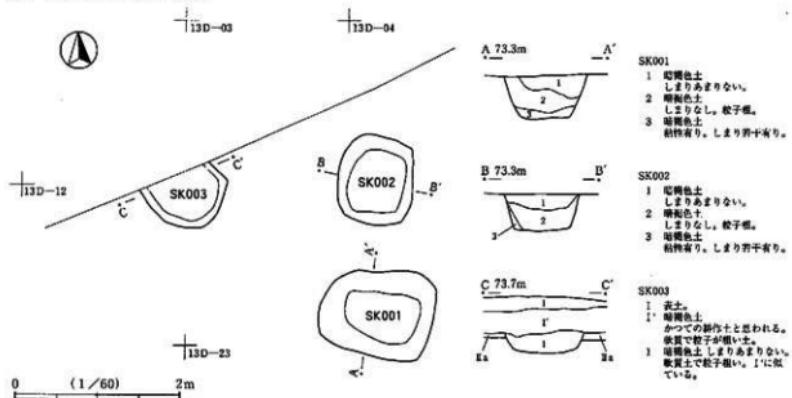
【位置】 13D-13・14・23・24

【標高】 73.2m

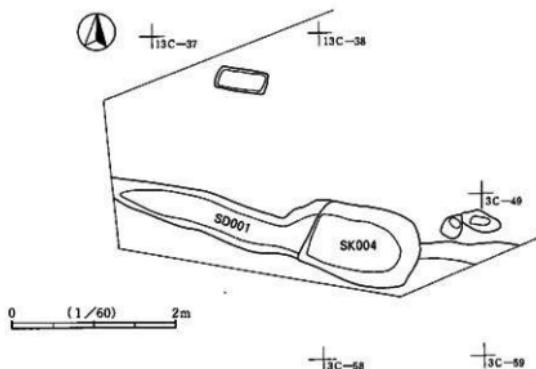
【形状と規模】 楕円形。長軸 136cm × 短軸 104cm × 深さ 53cm。

【断面形状と覆土】 逆台形。しまりがなく粒子の粗い暗褐色土がレンズ状に堆積する。

【床面】 ほぼ平坦である。



第86図 中近世土坑(SK001・002・003)



第87図 中近世土坑、溝(SK004, SD001)

### S K 0 0 2 (第 86 図)

〔位 置〕 13D - 03・04・13・14

〔標 高〕 73.2m

〔形状と規模〕 楕円形。長軸 110cm × 短軸 90cm × 深さ 45cm。

〔断面形状と覆土〕 逆台形。しまりがなく粒子の粗い暗褐色土がレンズ状に堆積する。

〔床 面〕 ほぼ平坦である。

### S K 0 0 3 (第 86 図)

〔位 置〕 13D - 02・03・12・13

〔標 高〕 73.2m

〔形状と規模〕 楕円形。長軸推定 110cm × 短軸 85cm × 深さ 25cm。

〔断面形状と覆土〕 逆台形。しまりがなく粒子の粗い暗褐色土が单一に堆積する。

〔床 面〕 ほぼ平坦である。

### S K 0 0 4 (第 87 図)

〔位 置〕 13C - 47・48

〔標 高〕 73.1m

〔他遺構との重複関係〕 S D 0 0 1 と切り合うが新旧不明。

〔形状と規模〕 圓角方形。長軸 132cm × 短軸 95cm × 深さ 39cm。

〔断面形状〕 逆台形。

〔床 面〕 ほぼ平坦である。

## 2 溝

### S D 0 0 1 (第 87 図)

〔位 置〕 13C - 36・37・46・47・48・49

〔標 高〕 73.2m

〔他遺構との重複関係〕 S K 0 0 4 と切り合うが新旧不明。

〔規 模〕 検出長 4.8m × 最大幅 48cm × 深さ 21cm。

〔断面形状〕 逆台形か。

### S D 0 0 2 (第 88 図)

二列の溝が並行するように掘り込まれている。極めて類似しており同一のものであろう。

〔位 置〕 11G - 04・05・06・15・16・17・27・28

〔標 高〕 73.2m

〔規 模〕 大半が未掘のため、データは既掘部分を対象に計測している。検出長 7.1m × 最大幅 130cm × 深さ 62cm。

〔断面形状〕 溝底に土坑が並ぶように掘り込まれている。土坑がある部分は楕形であろう。

### S D 0 0 3 (第 88 図)

S D 0 0 2 溝とほぼ 90° に交差するように位置するが、相互に関連があるかは不明である。

〔位 置〕 11G - 03・12・13・22・23・31・32

〔標 高〕 73.2m

【規 模】端部が下層確認トレンチにより欠損しているため、データは既掘部分を対象に計測している。  
検出長 6.1m × 最大幅 103cm × 深さ 47cm。

【断面形状】溝底に土坑が不規則に掘り込まれている。土坑がある部分は楕形であろう。

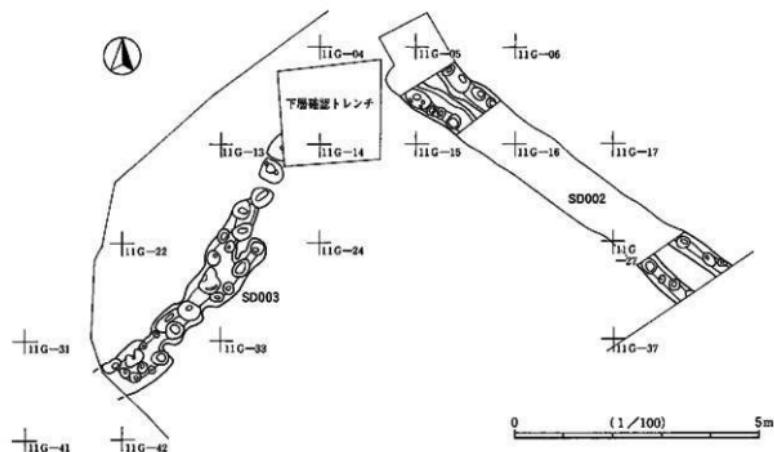
#### SD004 (第89図)

【位 置】50-90・91、60-00・10・20・30

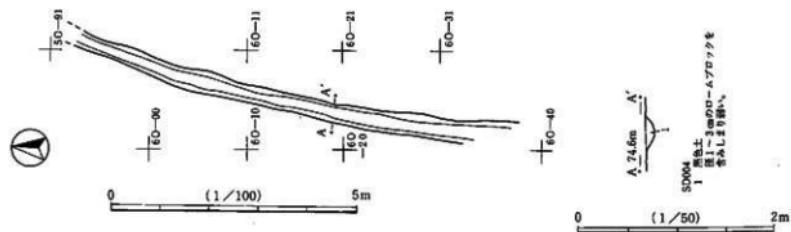
【標 高】74.7m

【規 模】検出長 9.2m × 最大幅 48cm × 深さ 16cm。

【断面形状と覆土】皿形。ロームブロックが混入する黒色土でしまりは弱い。



第88図 中近世溝 (SD002・003)



第89図 中近世溝 (SD004)

## 第3章 柏野遺跡・山口城跡の調査成果

### 第1節 柏野遺跡の調査成果

#### 1 調査の概要（第91図）

調査対象地は柏野段丘面から柏野台段丘面へ移行する緩斜面に位置する。道路拡幅のためのごく狭い面積の調査であったため、確認調査は用地の形状に合わせてトレンチを任意に設定して実施した。

図化はされていないが調査時のメモによれば、表土の下はテフラと礫の混入した黒褐色土が堆積しており、その下は粘土質の明褐色土が堆積していた。表土上より約70cm掘り下げたところで粘土層が露出した。山小川道路と同様ロームの堆積は確認できなかった。

遺構は検出されず遺物も出土しなかった。

### 第2節 山口城跡の調査成果

#### 1 調査の概要（第90図）

調査対象地は養老川左岸の独立丘陵上、南西から北東に延びる尾根上にあたり、調査区も同様に北東から南西方向に細長いものとなっている。調査区は南西半と北東半で様相が異なっており、南西半は両側が急峻な崖面を呈する痩せ尾根であり、北東半は東側が南西半同様に急峻な崖面であるが、西側は北に向かって緩斜面が形成されている。確認調査は尾根方向に3本のトレンチ（1・2・4トレンチ）と斜面方向に1本のトレンチ（3トレンチ）を設定し調査を実施した。1トレンチでは北西半に包含層が認められたため拡張しており、他のトレンチに比べ広くなっている。確認調査では尾根方向に設定した3本のトレンチで土層柱状図を作成した。包含層の部分を除き、基本的には浸食を受けて露呈した基盤層の上に僅かな腐食土層が形成されており、植物の根や天水等の影響を受けていると判断される部分を除去するために基盤層の一部を掘削して遺構検出面とした。

#### 2 遺構と遺物

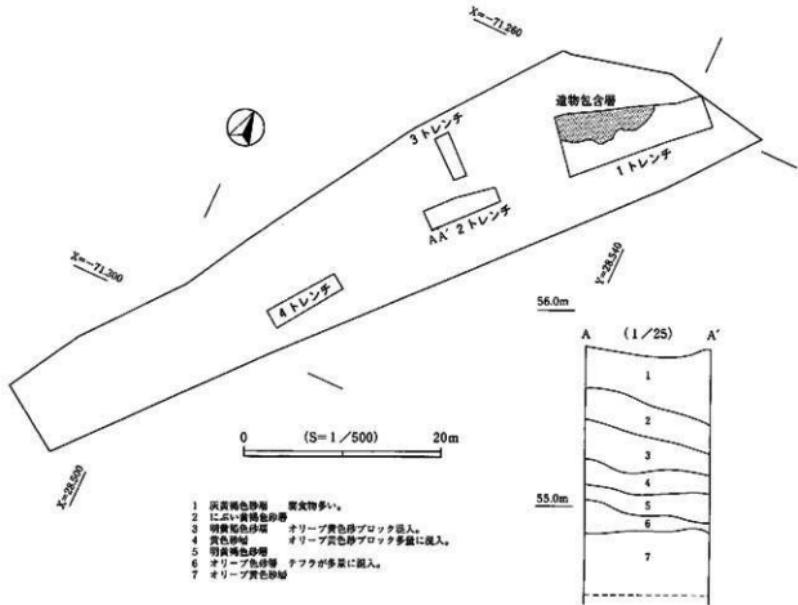
今回の調査により確認された遺構は1トレンチから検出された縄文時代の遺物包含層のみである。

##### 遺構

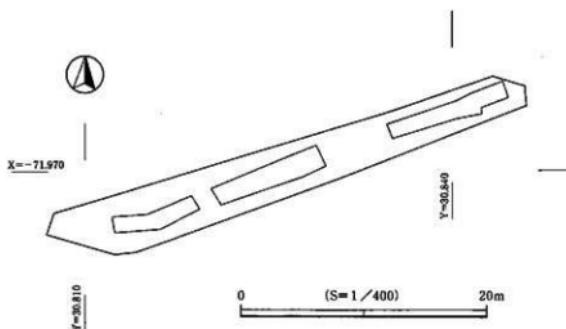
1トレンチ南西部の谷頭状の落込みより数片の縄文土器片と石錐素材と思われる剥片、焼礫が出土したため、遺物包含層とした。包含層は南東から北西方向の奥行き290m、北東から南西方向の幅8.90mの谷頭に堆積した黒色（25Y2/1）シルト層を主体とし、下層は基盤層を含んだにぶい黄褐色（10YR5/4）砂で硬くしまり、上層も基盤層を含んだ黒褐色（10YR3/2）粘土混じり細砂層である。更にその上に明黄褐色（10YR6/8）粘土混じり砂層が見られたが、基盤層が崩落したものと判断して表土層とした。この土層は南西側で厚く堆積しており、南西半で包含層が不明瞭となる点は緩斜面から急斜面へと移行する過渡的な斜面により多く堆積したものであろう。

##### 遺物

遺物は遺物包含層から縄文土器片、石錐素材と思われる剥片、焼礫が出土したのみである。土器は摩耗が著しく時期が判断できるものはほとんどないが、胎土の状況から早期と判断されるもの、器面調整から後期と判断されるものが出土している。なお、焼礫は調査時点での破砕率を中心に採取したものであり、必ずしも遺跡の礫組成を表現出来る資料ではないが、流紋岩の焼礫が3分の1を占めており、土器と合わせると縄文時代早期の炉穴が存在した可能性が考えられる。



第90図 山口城跡 トレンチ配置



第91図 柏野遺跡 トレンチ配置

## 第4章 まとめ

### 第1節 繩文時代

#### 1 遺跡の立地について

市原市には各時代において県内ののみならず関東地方全体を俯瞰してもキーとなる重要な遺跡が多数存在する。しかし、その調査事例は主として東京湾岸および養老川下流域に集中しており、内陸部に関しては情報に乏しかった。もとよりそれは遺跡が無いことを示しているわけではなく、開発行為が比較的少ないことや地形的制約により踏査の機会が乏しいことなどの要因も大きい。また、平地に比べ地形が陥しく陸水などによる地形変化も著しいため、場所によっては短期間のうちに著しく変貌している可能性もある。すなわち各時代の遺跡の立地と変遷を検討する際、考古学的視点だけでなく地理学的、地質学的な視点も必要とされよう。限られた時間ではそれらを網羅的に検証することは不可能なため、今回はごく簡単に段丘の状況と遺跡の立地について述べておく。なお、段丘の名称は(木村 1979)に従っている。

第1章で述べたとおり、高滝ダム周辺は養老川の中流域にあたり、支流である平蔵川とともに河岸段丘が発達している。川に最も近い低位段丘面には集落や水田面が集中し、現在の生産活動の拠点となっているといえる。從来こうした低位段丘面には遺跡の存在が認識されないことが多かったが、近年の調査によって成果も上がってきている(関尻遺跡・竹ノ下遺跡など)。山小川遺跡の位置する中位段丘面(鶴舞カントリーパーク)は低位段丘面と比べ約30m高く、間の斜面もかなり急である。斜面の中間にテラス状の平坦地が形成されている部分もある。段丘面上はまとまった広さの平坦地が広がり、集落を営むには適した立地であったと想像される。西側の養老川右岸に面した中位段丘面(柏野面)には良好な遺物包藏地が存在しており(柏野遺跡本体)、中期以降集落を営むに際し中位段丘面が選択された可能性が強い。ただし第11図で示したとおり段丘上の土層堆積状況は安定しているとはいはず、大小様々な土壤の移動が絶えず起こっていたと推察される。下流域の台地上に比べ必ずしも条件がいいとは言えないこの地をあえて選択した理由には色々あるだろう。第1章でも触れた市原市石神遺跡や君津市寺ノ代遺跡、大多喜町堀之内上の台遺跡など山間部の集落遺跡の様相とも比較する必要がある。太平洋沿岸諸地域と東京湾岸との交通ルート上にあたっていた可能性と、山間部の資源(万田野縄縛などから産出される原縄など)の採掘基地ないしは中継地の役割を担っていた可能性を指摘しておく。高位段丘面(柏野台面)から丘陵へと移っていく境目には早期の新井花和田遺跡が存在する。その内容から該期の拠点的な集落と位置付けるにふさわしいものである。当然丘陵上というその立地も当時の人々の行動様式と密接に結びついているはずである。ただしその当時段丘側の状況がどうであったか不明な点が多く、現在の遺跡の立地と地勢のみで行動様式を云々するには問題が多い。先に述べたとおり地理学的、地質学的な視点が不可欠であるとする所以である。機会を改めて検討したい。

#### 2 出土遺物について

出土土器口縁部の時期別・出土地点別重量を第3表に挙げておいた。紙数もないため特徴的な点についてのみ述べる。

エリア①からは網取式の影響を受けたと考えられる上器がまとまって出土した。第19図41は口縁部無文帯と胴部とを刺突隆起線で区画し、正面に鈎文を配するもので網取I式古段階に特徴的に認められる。ただし南東北地方で出土するものに比べると小振りであり、器形も口縁部がやや外反し隆起部分がくびれ

るなど「本場」の様相とは異なる部分も見られる。在地産である可能性が強い。第21図73も同様に綱取I式の鈎文モチーフを口縁部に配し、胴部に「J」字状のモチーフを配する。胴部のモチーフは内部をきれいに磨り消しており、単位文的な性格をよく示している。これらに比べ縦年的には後続すると考えられる鈎文モチーフの崩れた一群も存在する。第19図43・50・51、第21図72、第22図74・75などが相当する。ただしこれらも口縁部無文帯と胴部とは隆帯で区画されており、綱取I式の影響を残すものである。ただし、胴部文様の磨消が徹底されなくなることや、第22図75のように単位文的效果が希薄になり地化が進行している。口縁部無文帯と胴部との区画が弦線に代わる一群がこれらに後続し、「堀之内化」が相当程度進行した段階と考えられる。第22図78、第24図97・98などで口縁部無文帯には縦位短沈線が配されるのみとなる。ただし第24図97は先行する一群と同様の口縁部モチーフを保持しており、胴部文様にも磨消が施されるなど、他の土器とは異なる様相を見せている。綱取I式終末か綱取II式最古段階に当たるものかもしれない。これらの土器群の影響下にある在地の土器群というべきものがSI001にまとまっており、堀之内1式古段階に位置づけられるものである。第17図20・21などは頸部沈線によって上下が区画され、胴部に単位文的なモチーフが配されるもので東関東の堀之内1式では主体を占めるものである。その一方でエリア①からは綱取式だけでなく称名寺式からの流れで成立した土器も出土しており(第23図81)、その影響を受けた磨消繩文の土器もSI001から出土している(第17図22)。堀之内1式が東西各方面からの影響下に成立していることをうかがわせる事例であるといえる。

### 3 遺構について

山小川遺跡から検出された縄文時代の遺構群は中期末から後期前葉に限定される。一部やや曖昧さもあるが、各遺構の時期はおおむね以下の通りである。遺物の時期が分かれる場合は第3表を参考にした。なお、2基の陥穴は除外している。

加曾利E3	SI020・021、SK019、SH001?・003
加曾利E4	SI010・013~016・018・019、SH002
称名寺I	SI005・011・012、SK012
称名寺II	SI006
堀之内1古	SI001・008、SK006?・007
堀之内1中~新	SI007・017、SK005・008・018
堀之内2	SI002

エリア③とした古墳下には後期中葉の遺構が存在した可能性が強いが、記録に残されていない以上対象から除外せざるを得ない。ただし仮にこれを加えても主たる時期は中期末から後期前葉であるという評価に変更を加える必要はない。

各遺構の分布をみると、加曾利E3式から称名寺式にかけては段丘中央部にある程度の広がりをもって占地しているのがわかる。路線外への遺構の広がりも想像することができる。しかし、堀之内1式古段階になると段丘先端のごく狭い範囲に密集するようになる。調査区の外側もやせ尾根上になっており、遺構が存在するにしてもそれほど広い範囲に分布するとは考えにくい。加曾利B式の遺構が存在したと思われる古墳は再び段丘のやや奥になり、ある程度の広さを確保することができるようになる。

検出された竪穴住居跡の特徴をみると、いずれも規模が小さいこと、炉が作られないか、作られても使用頻度の低い貧弱なものであるといった点で共通する。柱穴をみても建て替えた痕跡は認められず、床面か

ら硬化面が検出されたという記録も残っていない。土坑とした遺構についても竪穴住居跡より若干規模が小さい以外はほとんど変わらないものも存在する（現にS1020竪穴住居跡は、調査時はSK020という土坑として扱われていた）。個々の竪穴住居跡はごく短期間に使用されたに過ぎない状況が看取される。特に炉については加曾利E3式と4式の3軒に限定され、時間が経過するにつれ使用期間が短期化していく状況が示されている。

中期環状集落の崩壊から後期集落の再編にかけてのプロセスを、「非居住域への分散居住」と「異質な社会」への「再編成」と定義づける考え方によると（千葉県史料研究財団編 2004）、環状集落という從来の社会の崩壊を食い止めるため他地域・他集団との交流を図り、異質な社会へと再構成する過程として捉えられる。その中で、特に中期後半から後期初頭まで継続する長期的な土地利用がなされる集落においては、異質な社会の要素を色濃く反映した遺構・遺物が出現するのが特徴とされる。山小川遺跡の場合、遺構では特別異質な要素を呈するものはみられないが、遺物に関しては1項で挙げた網取系土器などが当てはまるであろう。これら網取式が多く出土したエリア①の遺構群は堀之内1式古段階に限定されており、この集落の画期となった可能性もある。もちろん異系統土器の流入やその影響下の土器の出現は縄文時代各時期・各地域において認められる現象であり、それだけを過大評価すべきでないことはいうまでもない。山小川遺跡の調査は養老川中流域の縄文社会の様相を明らかにする手掛かりを提供するものとなった。今後他の調査事例と併せて検討を進めたいと考える。

## 第2節 古墳時代

### 1 山小川古墳群

養老川流域には、東京湾東岸有数の古墳群が形成されている。下流域には墳丘長100m級の大型前方後円墳を4ないし5基擁する師崎古墳群をはじめ、「王賜」鉢銘剣を出土した稻荷台1号墳が所在する市原台古墳群などが築かれた。下流から中流域にかけては50m級の前方後円墳を含む吉野古墳群・佐古墳群などの古墳群と、西国吉・岩・外部田ヤツ・池和田・浅間台などの横穴墓群が分布する。中流域では、養老川本流と支流内田川の分岐点付近に築かれた牛久古墳群と江子田古墳群が中心的な古墳群として挙げられる。牛久古墳群は、江子田古墳群より2km下流の右岸に立地し、前期前半の円墳（I号墳）と方墳（II号墳）が各1基、終末期の方墳（III号墳）1基の計3基が調査された。調査時には既に6基しか残存していないかったが、本来は十数基存在したと言われている。有段口縁の壇をもち、鉄槍・銅鏡を副葬したI号墳は中流域前期前半の代表的な調査例といえる。III号墳は二重周溝をめぐらし、墳丘長辺32mにおよぶ流域最大級の終末期方墳である。前掲のように、江子田金環塚古墳は下流域の師崎古墳群に大型前方後円墳が確認できない後期初頭に築かれた前方後円墳として注目される。墳丘長は45m、二重にめぐる周溝を含む主軸長は62mにおよび、この時期では流域最大の規模をもつ。名称の由来になった金製耳環をはじめ、f字形鏡板付骨・鏡形杏葉・雲珠・辻金具などの鉄地金銅張馬具、大刀、柳葉形長颈鏡、鉄鉗（かなはし）、刀子、多様な玉類で構成される豊かな副葬品をもつことからも、金環塚古墳がこの時期の養老川流域を代表する首長墓であった可能性は高い。このように、中流域の拠点には前期から終末期に至る一大古墳群が形成され、後期から終末期では下流域に比肩する規模を有したと考えられる。

ところが、これより上流に遡ると古墳の分布は激減し、横穴墓群が目立つようになる。江子田古墳群から3.5km上流の緑岡古墳群まで確認されている古墳ではなく、さらに2kmほど奥まった支流の平蔵川上流域

で本古墳群に至るまで古墳分布の空白地帯となっている。周辺には後期以降の横穴墓群が群在しているため、本古墳群も後期の古墳であると想定されたが、意外にも中期に遡ることが判明した。ここで、改めて本遺跡に中期の古墳が存在する背景について確認してみよう。

第2章でも触れたように、本流右岸の番後台遺跡では古墳時代前期～中期を中心とする集落が営まれ、その形成は弥生時代中期後半に始まっている。弥生時代後期初頭の竪穴住居2棟からは磨製石斧と共に板状鉄斧がそれぞれ1点ずつ出土しており、下流域の弥生集落に勝るとも劣らない最新の利器を入手していることが分かる。調査された23,270m<sup>2</sup>の範囲では弥生時代30棟・古墳時代99棟の竪穴住居跡が検出されているが、遺跡は少なくとも2倍以上の範囲に広がっていると捉えられている。一方、2.5km上流の左岸に位置する皿郷田茂遺跡では、古墳時代前期の方墳7基と円墳1基、竪穴住居跡1棟が調査された。方墳は1辺約5m～13.6mの小規模なもので、おそらく墳丘も低かったと見え既に失われていた。円墳も径12.8mの小円墳である。これらは近接して群在しており、付近に同時期の集落が存在することは竪穴住居の検出によって明らかである。このような集落近くに群在する前期の方墳群は、主要河川の下流域に展開する大規模な遺跡では通有に見られるが、養老川中・上流域の河岸段丘上に存在することは意義深い。生産基盤を異にする環境下にあっても、集落と古墳から成る古墳時代前期の「ムラ」の構成は変わらないのである。規模こそ小さいが、河川の流域に沿って古墳時代のムラは連続と営まれ、中期にはより奥まった支流域にも20m級の円墳を築造するに至ったといえる。

山小川1号墳は、墳丘と埋葬施設が遺存した古墳として養老川最奥部の調査例である。副葬された大型広根鉄鎌、鹿角袋の鑿・錐・刀子等の鉄製利器、長刀は鉄製品が普及した中期後半の時代相を象徴する遺物である。また、周溝から出土した須恵器壺類は下流の沖積平野部の遺跡でも出土例の限られる製品である。副葬された数が少ないので入手経路から離れていることに疑うと思われるが、養老川中・上流域の開発は想像以上に早く進んでいたことを示唆する調査例となった。現在、本古墳に隣接する柏野遺跡で調査中の円墳も中期～後期初頭に築かれた可能性が高く、さらに規模が大きい。調査の成果に期待したい。

#### 参考文献（第1章掲載分を除く）

- 木村泰治 1979『市原市の地形と地質』『市原市史(別巻)』市原市  
藤原文夫 1979『妻老川』『市原市史(別巻)』市原市  
市立市川考古博物館編 1982『シンボジウム堀之内式土器資料集－各地の堀之内式土器とその変遷－』  
市立市川考古博物館編 1983『シンボジウム堀之内式土器の記録』  
福島県いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団編 1985『愛谷遺跡－いわき好間中核工業団地造成事業に伴う調査－』  
千葉県史料研究財団編 2000『千葉県の歴史 資料編 考古1(旧石器・縄文時代)』千葉県  
縄文セミナーの会編 2002『第15回縄文セミナー 後期前半の再検討』  
縄文セミナーの会編 2002『第15回縄文セミナー 後期前半の再検討－記録集－』  
千葉県史料研究財団編 2003『千葉県の歴史 資料編 考古2(弥生・古墳時代)』千葉県  
千葉県史料研究財团編 2004『千葉県の歴史 資料編 考古4(遺跡・遺構・遺物)』千葉県

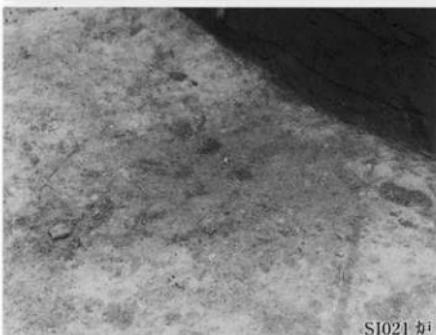
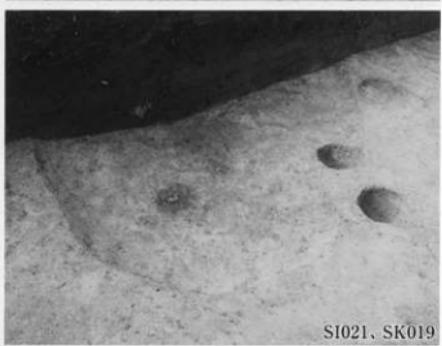
第3表 山小川遺跡縄文土器時期別・出土地点別口縁部重量一覧

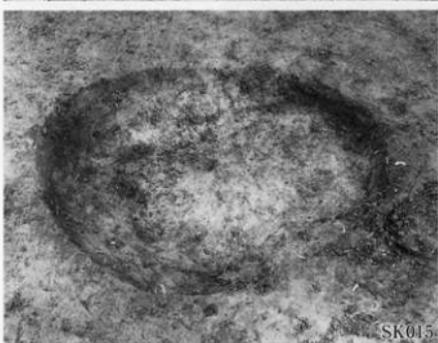
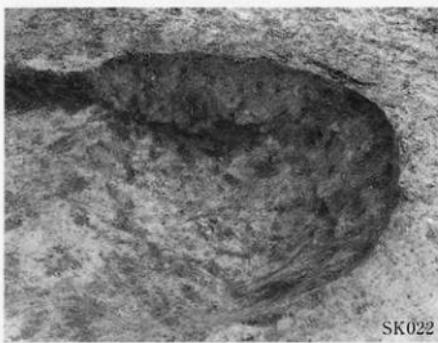


# 写 真 図 版

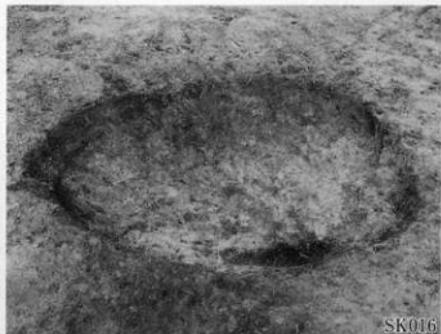


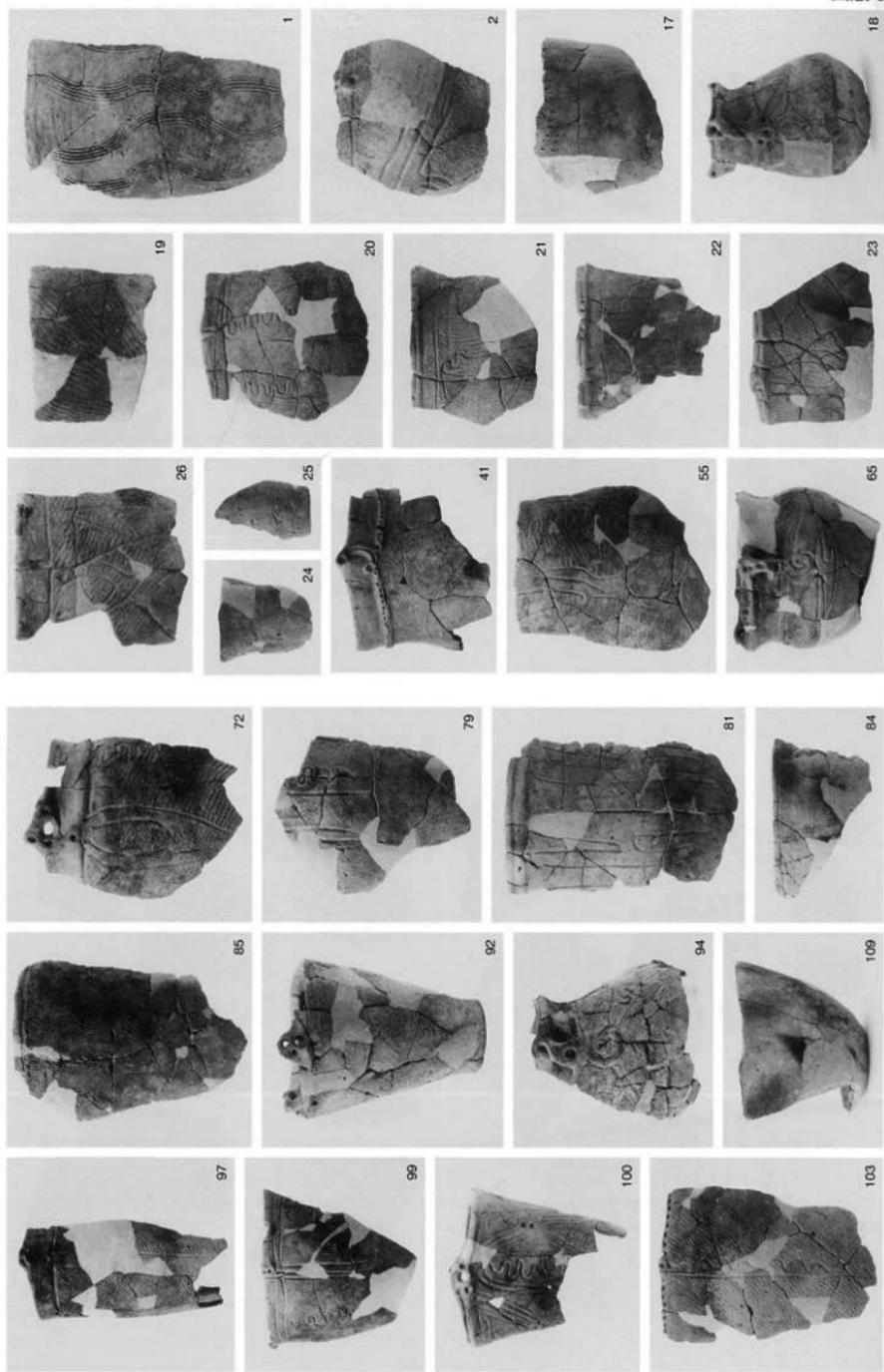
図版2

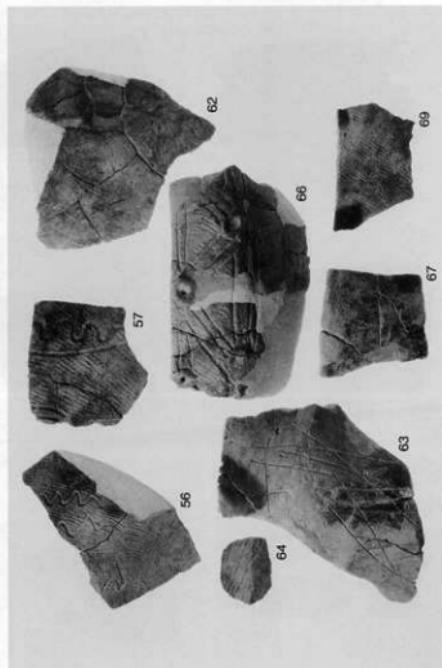
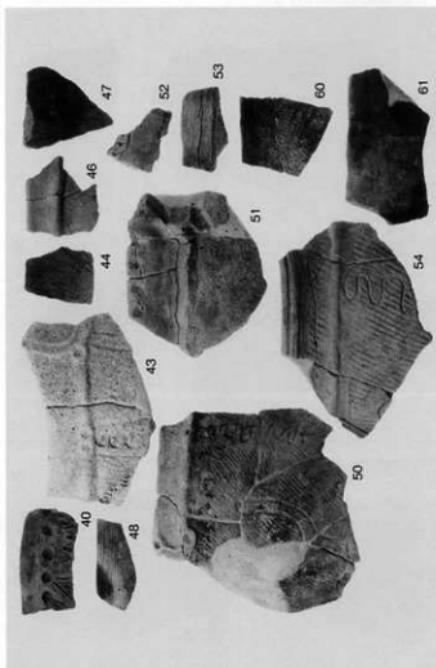
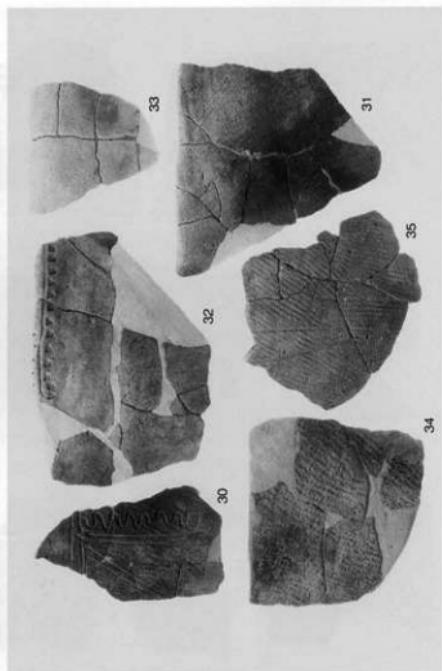
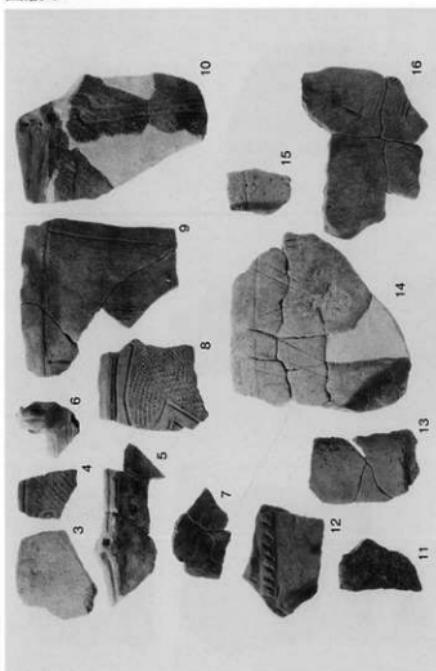




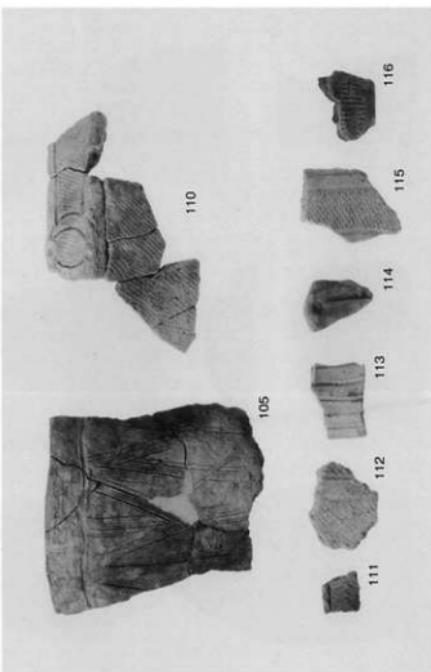
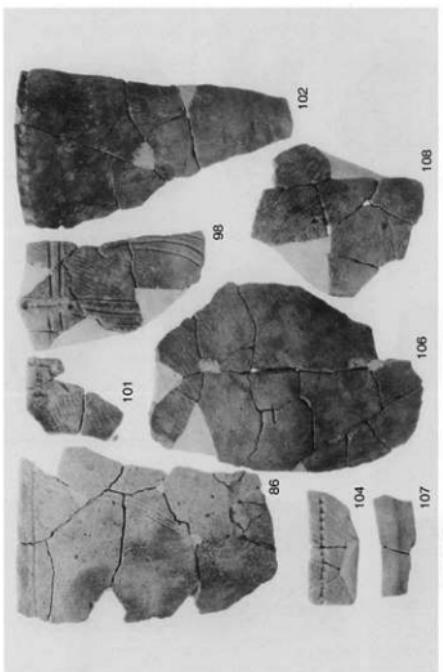
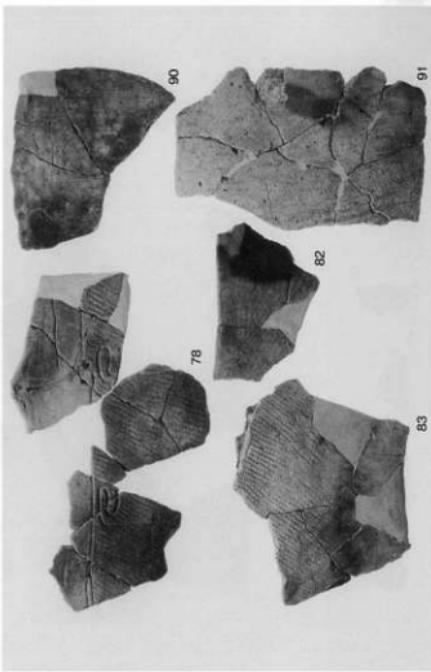
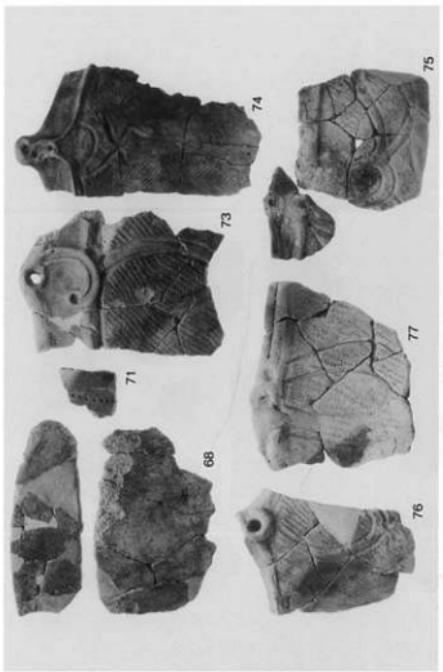
図版 4







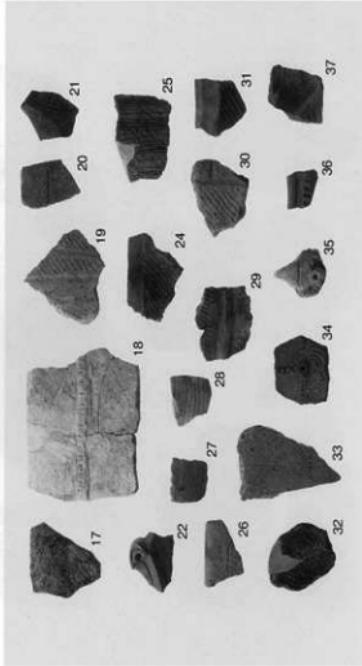
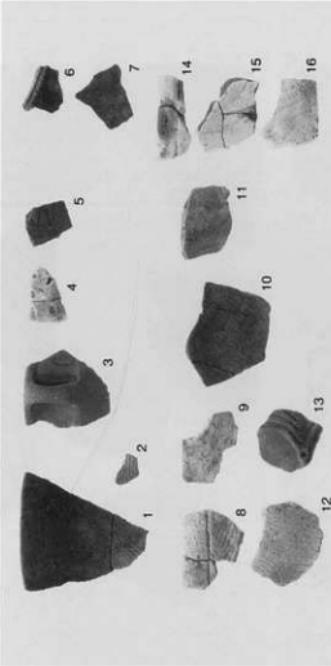
## エリア①出土土器



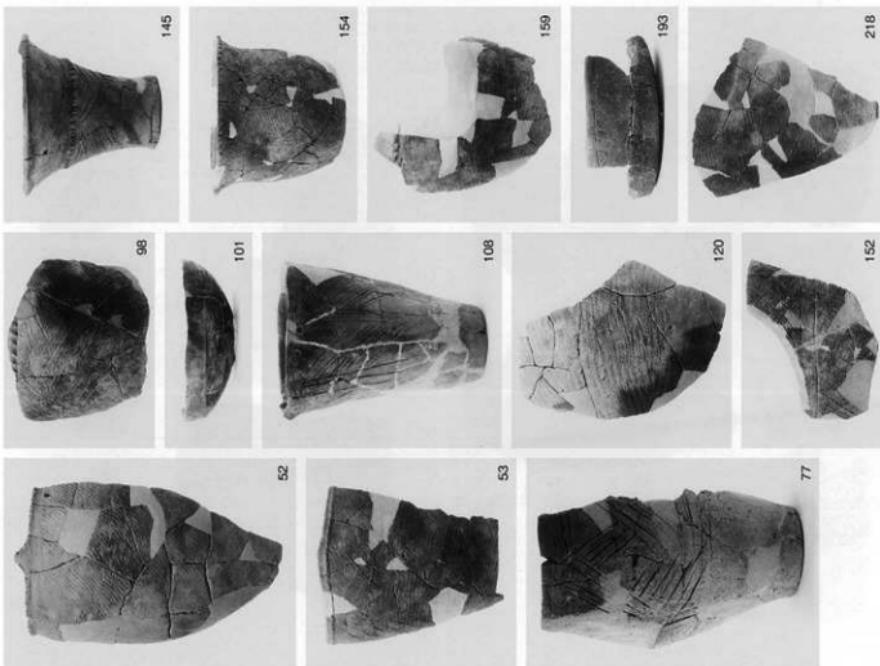
エリヤ① 出土土器

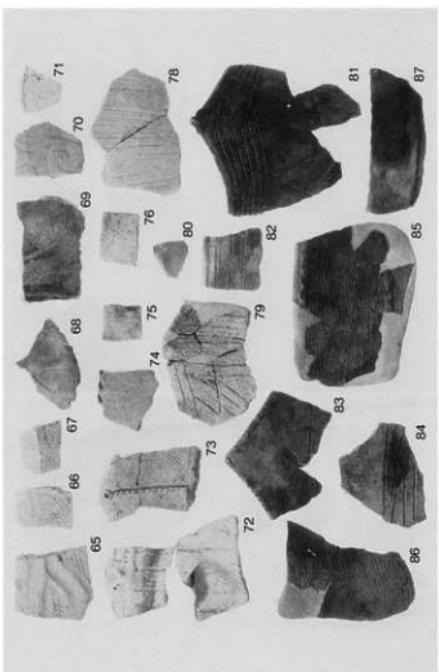
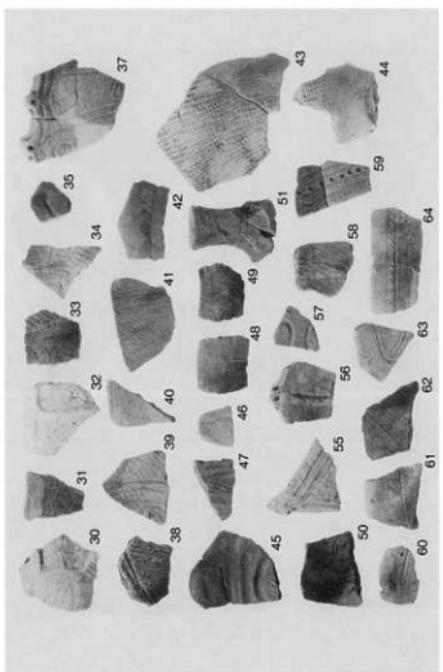
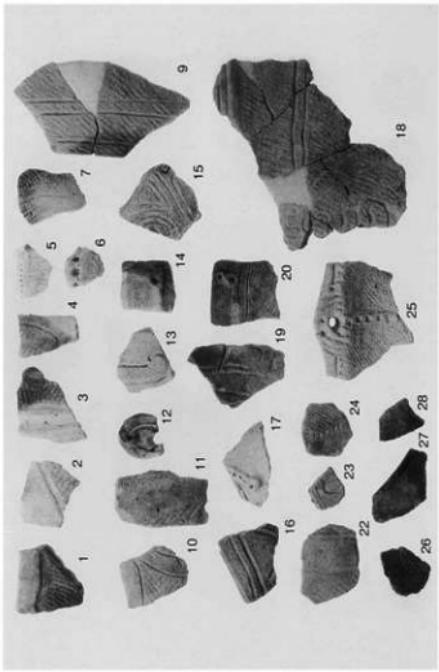
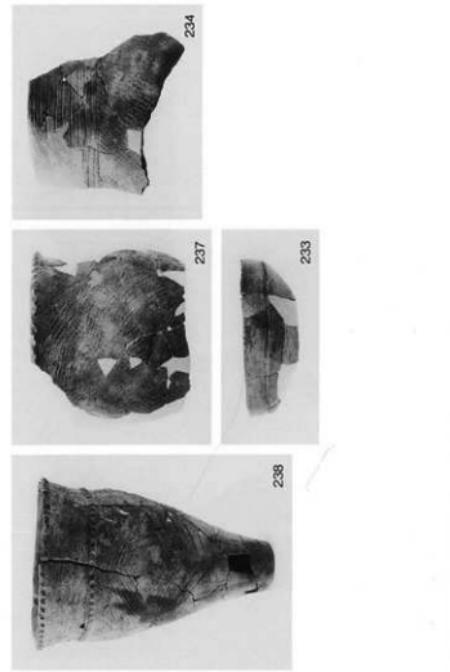


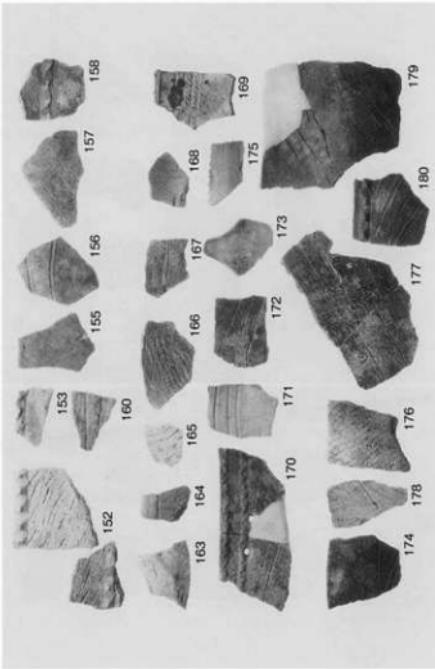
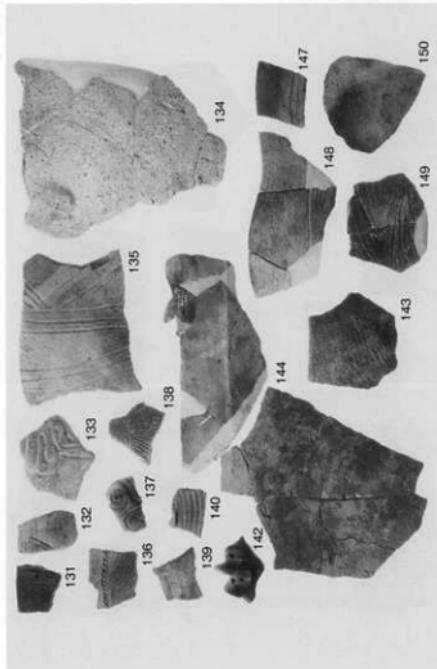
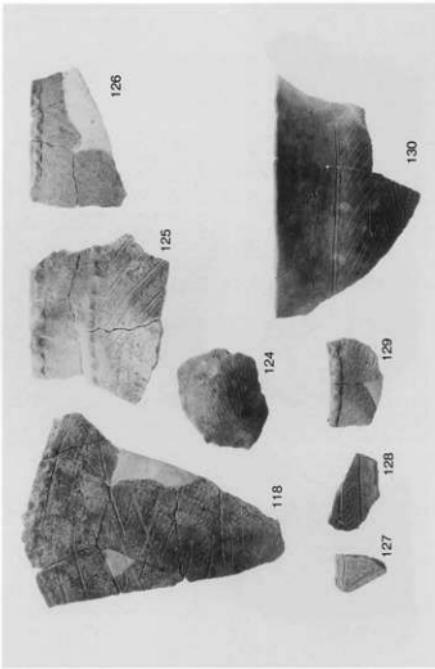
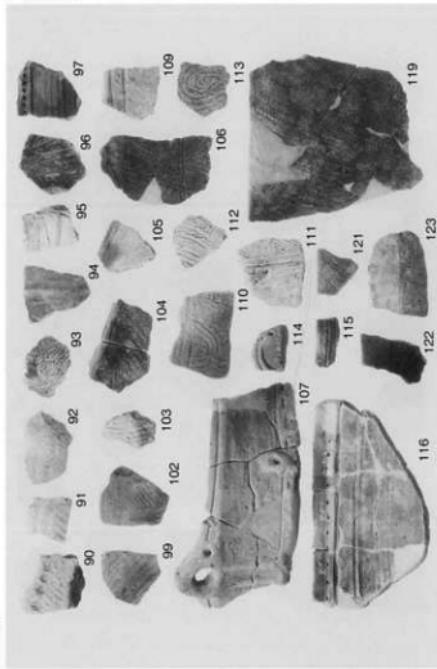
エリヤ② 出土土器

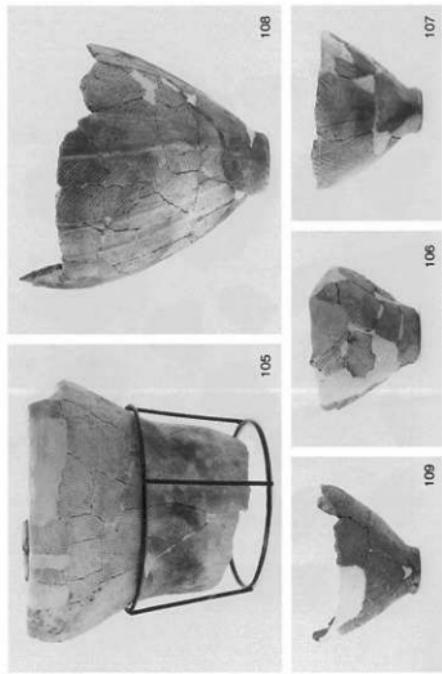
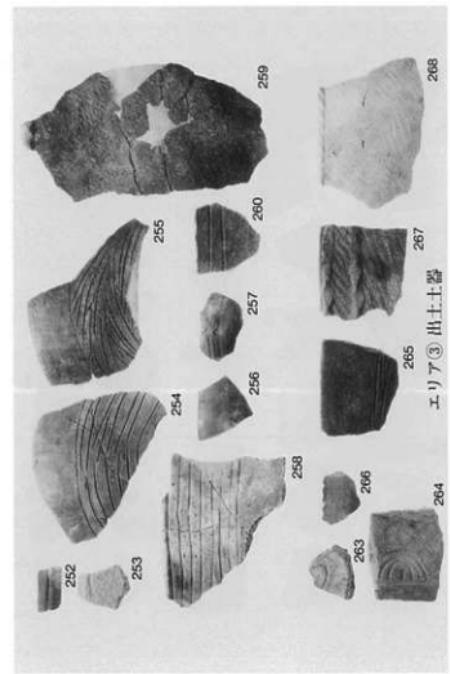
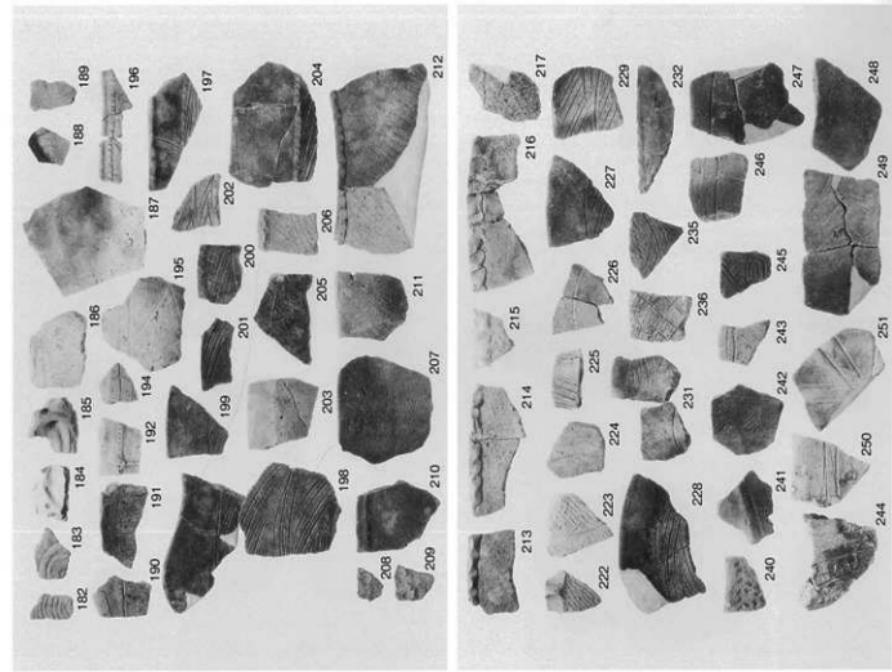


エリヤ③ 出土土器



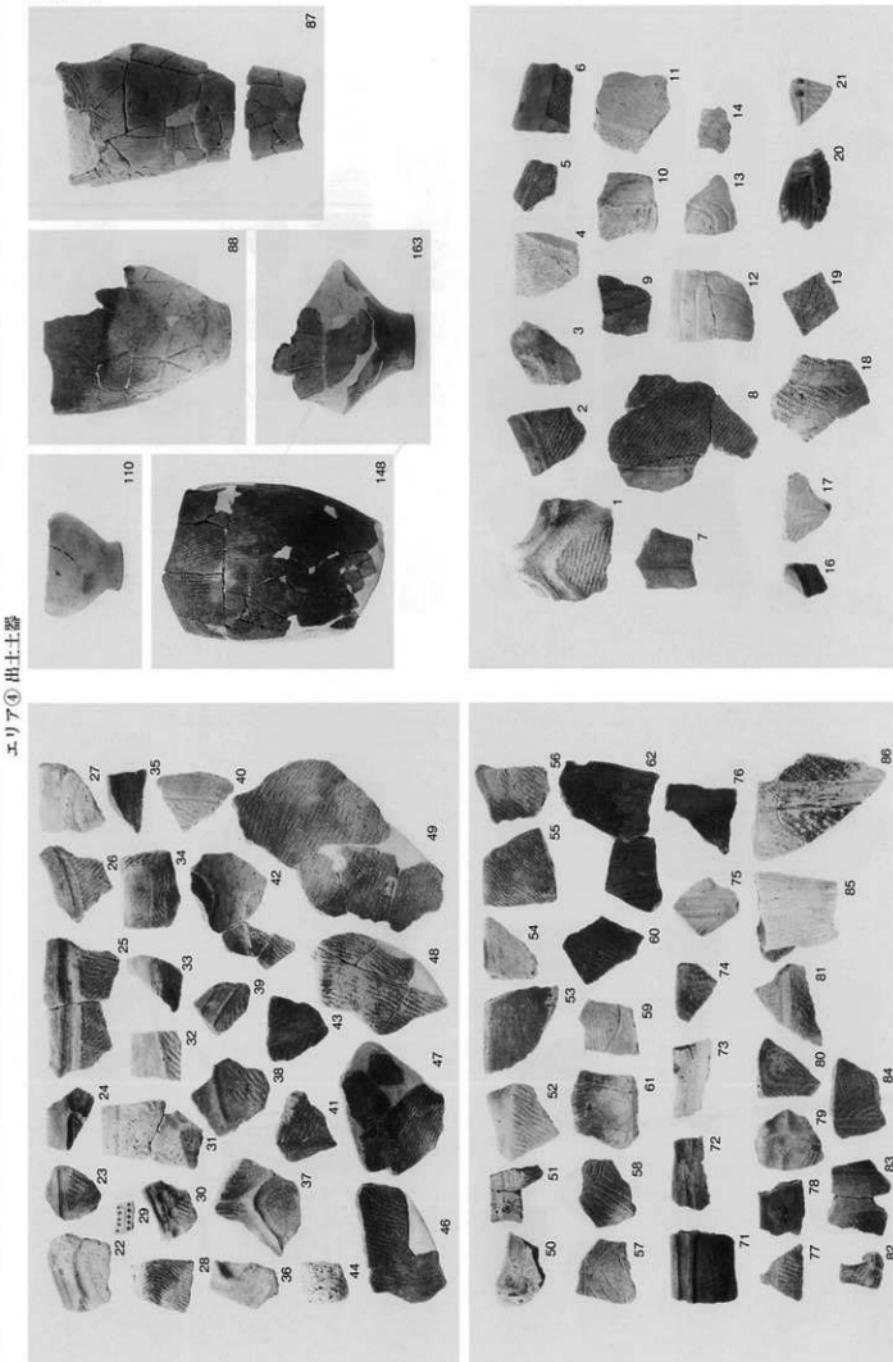


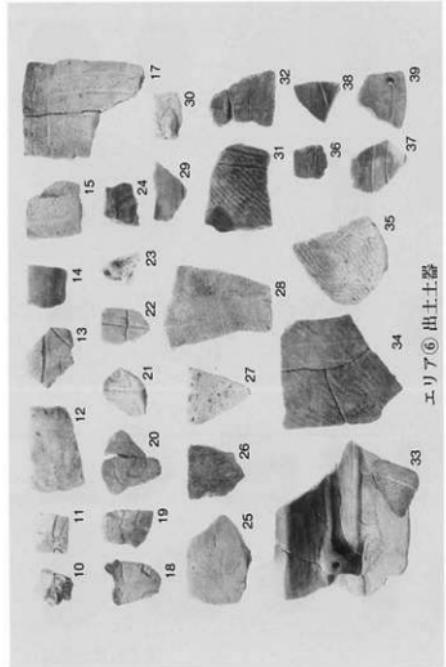




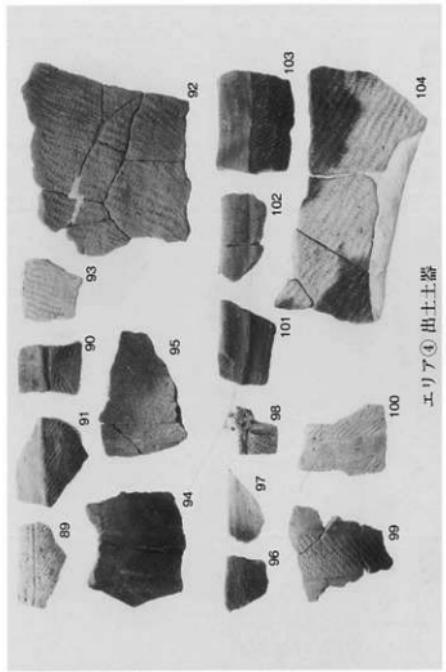
エリア③ 出土土器

エリア④ 出土土器

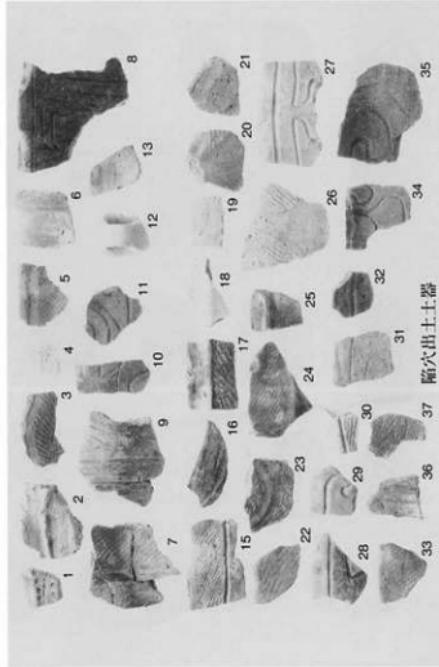




エリヤ 7(6) 出土土器



エリヤ 4(4) 出土土器



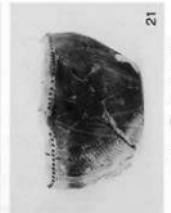
窯穴出土土器



エリヤ 5(5) 出土土器

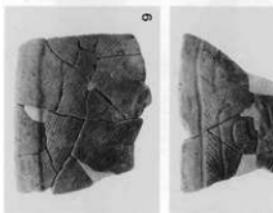


26

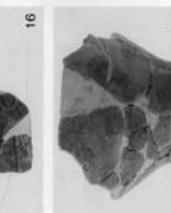


21

エリア⑤ 出土土器

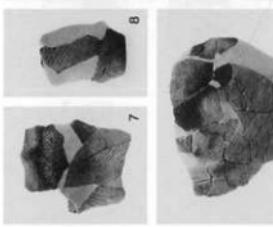


9

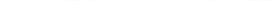


16

エリア⑥ 出土土器



エリア⑦ 出土土器

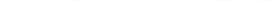


8

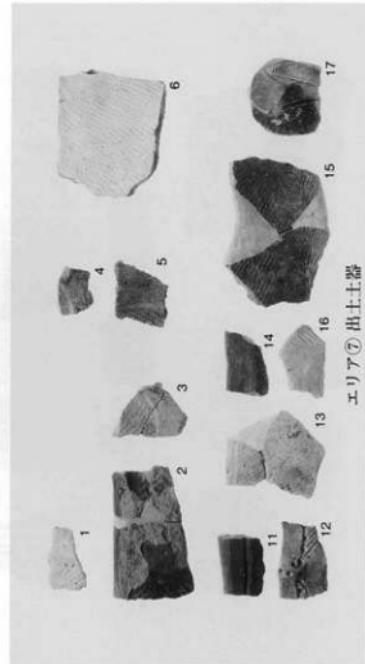


10

トレンチ出土土器



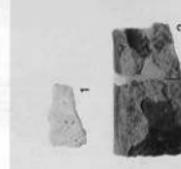
7



6



4



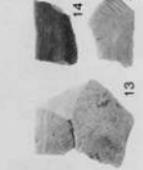
5



15



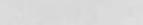
16



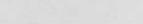
13



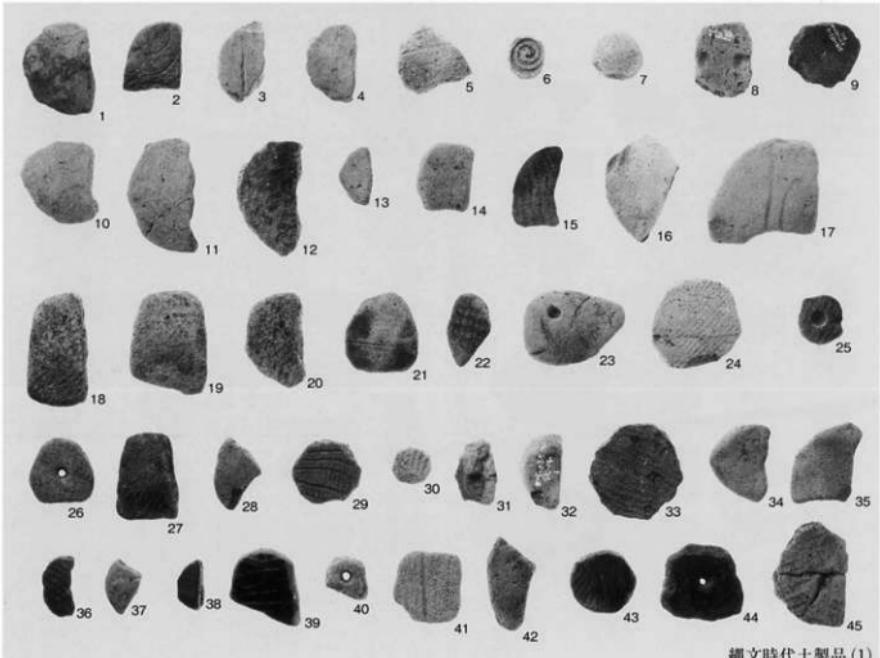
14



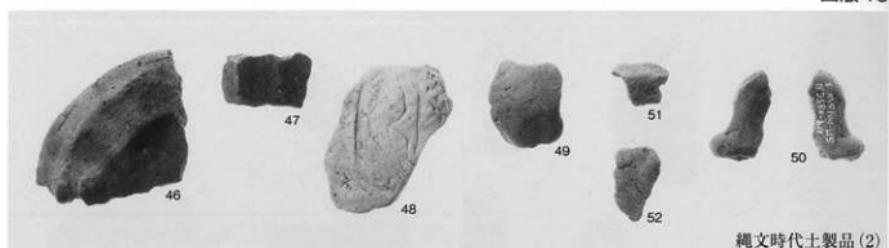
11



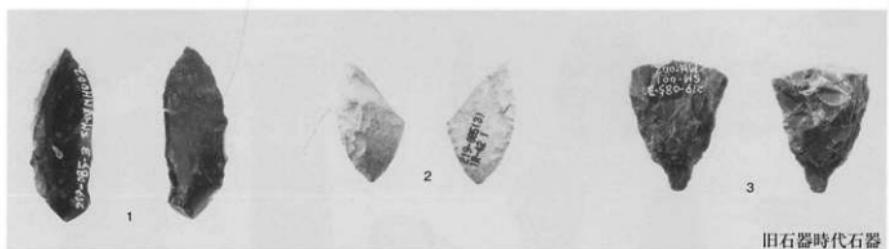
12



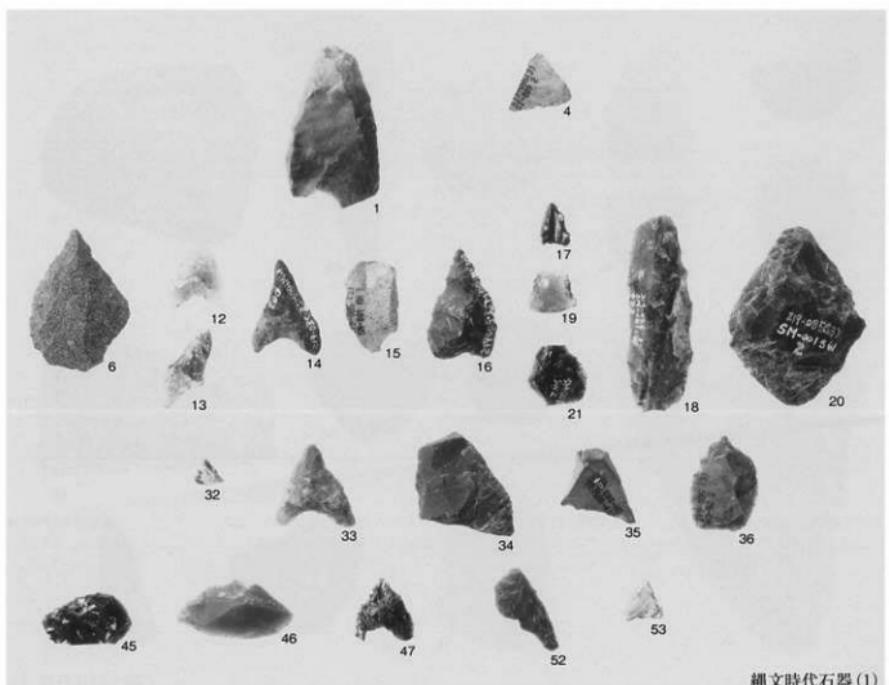
縄文時代土製品(1)



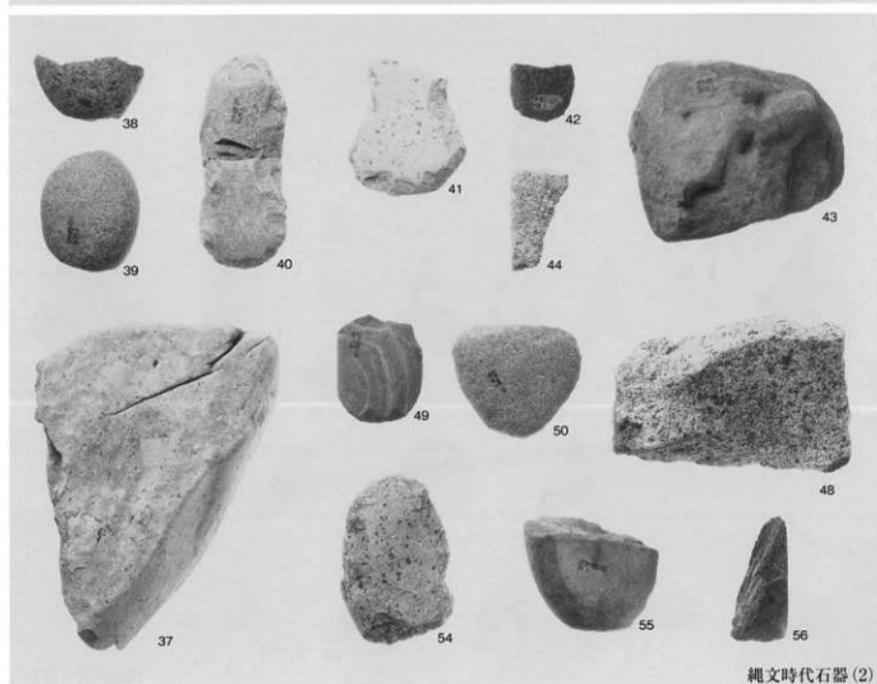
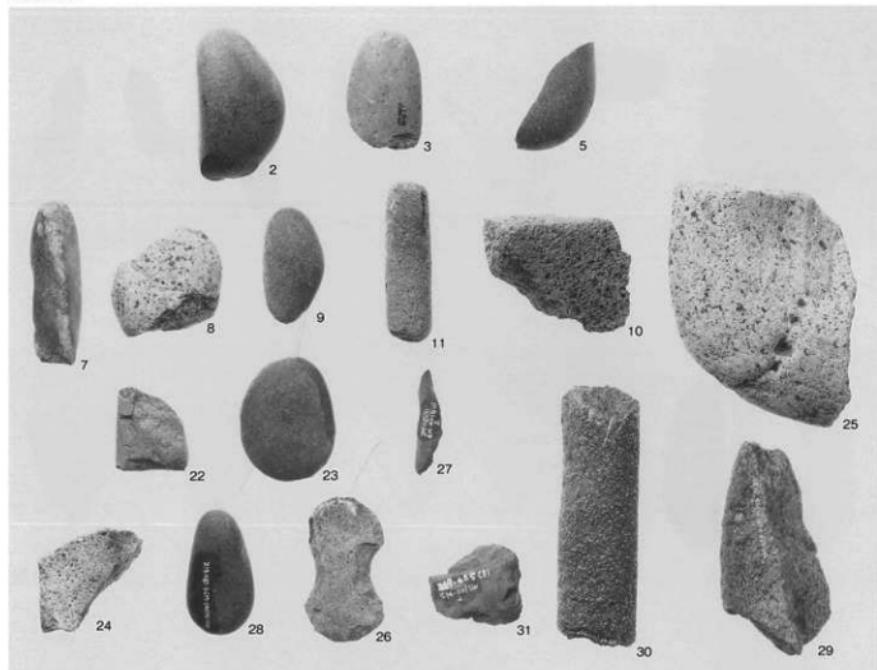
縄文時代土製品(2)



旧石器時代石器



縄文時代石器(1)





圖版 18

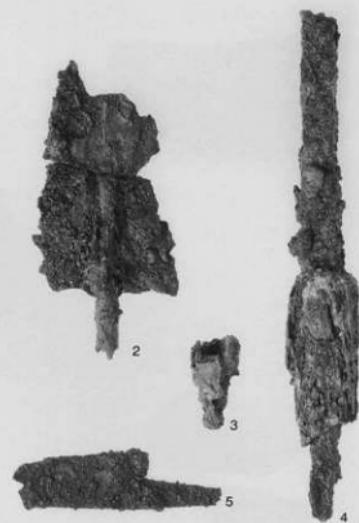




1 (表)



1 (裏)



1号墳出土鉄製品(表)



1号墳出土鉄製品(裏)

1号墳出土大刀



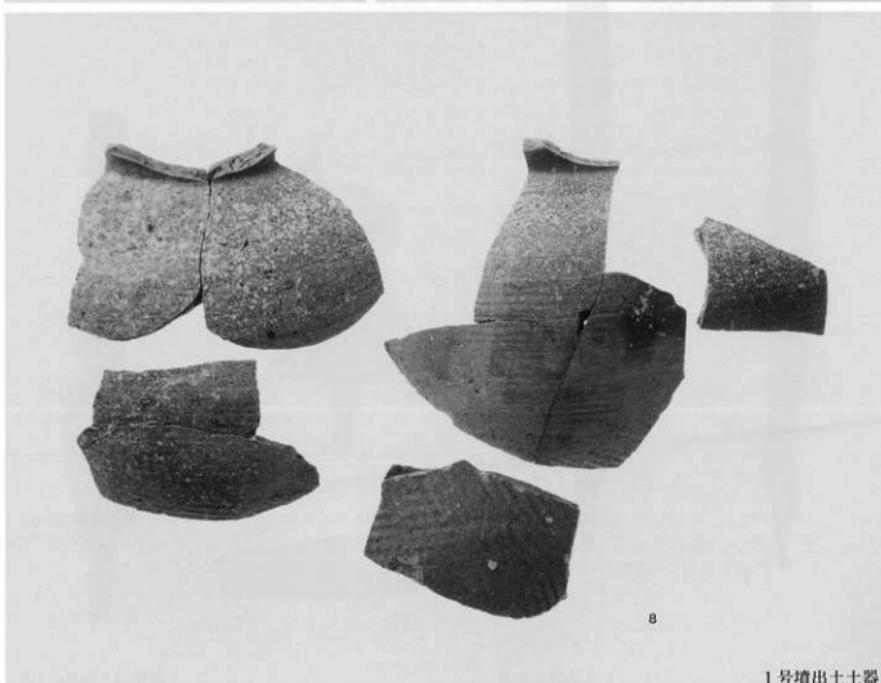
6



7



12



8



## 報 告 書 抄 錄

千葉県教育振興財団調査報告第 624 集

## 市原市山小川遺跡・柏野遺跡・山口城跡

- 県道改良（幹線）委託事業（山小川・柏野・山口地区）埋蔵文化財調査報告書 -

---

平成 21 年 3 月 25 日 発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団  
文化財センター

発 行 千葉県県土整備部  
千葉市中央区市場町 1-1  
財団法人 千葉県教育振興財団  
四街道市鹿渡 809 番地の 2

印 刷 大和美術印刷株式会社  
千葉県木更津市中央 1-1-6

---